# を

【發音】一わ行第五の音。子音wが母音oに結び附きて發音す。その發音の方法・位置は、もとはわ及びおの條下に說けるが如くなりし筈なれど、後には、子音w脫落して、母音oのみとなりし結果、假名は、舊來のままながら、實際の發音は、あ行のおと何等異なる所なきに至れり。なほ、あ行の條下のおを參照せよ。二長音は、をおと書くとをーと書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。三をの直後にう又はふの續く場合には、通例、あ行のおうおふと同じく、おの長音に發音す。例へば、をう(翁)をふ(終ふ)を、何れもオオと發音する類。四一語の中にて、をがあ列音の直後に來る時、そのあ列音をお列に轉じ、長音に發音することあり。例へば、あをめ(青女)・まをか(眞岡)・まをす(申す)をオオメ・モオカ・モオスと發音する類。五一語の中にて、をがお列音の直後に來る時、そのお列音の長音に發音することあり。例へば、とを(十)をトオと發音する類。六漢語の熟語にて、をの頭音を有する文字が、nの韻を有する文字の直後に續く時、そのををノと轉呼することある場合に就きては、の四の條下を見よ。

【字源】平假名をは漢字「遠」(呉音ヲン)の草體、變體平假名殘は「越」(呉音ヲチ)の草體、又は「乎」(漢音ヲ)の草體、又、片假名ヲも、同じく「乎」より出で、萬葉假名としては、前記「遠」・「越」・「乎」の外、字音に據れるものに「呼」・「烏」・「鳴」・「塢」・「嗚」・「惡」・「袁」・「怨」・「惋」・「弘」・「泓」・「溫」等、訓を取りたるものに「小」・「少」・「男」・「士」・「雄」・「尾」・「峽」・「麻」・「緒」等あり。

**を** 魚【名】うを(魚)一の略。 記「おふをよし飾(ヒシ)突く蜑よ」

**を** 男【名】一男性の人。をとこ。をのこ。男子。(女に對して) 記「吾(ア)が大國主せこそはをにいませば」 二配偶の男性。をつと。良人。(女に對して)[夫] 記「吾(ア)はもよめにしあれば汝(ナ)をきて夫(ヲ)は無し汝をきて夫(ヲ)は無し」 男の神【句】をがみ(男神)に同じ。(「女(メ)の神」に對して) 萬葉「をの神も許したまひめの神もゆるしたまひて」 男の巫(カム)【句】男のかんなぎ。をのこかむなぎ。

**を** 牡・雄【名】男性の動物。をす。をん。(牝(メ)に對して)

**を** 麻【名】一[梔]あさ(麻)一に同じ。二麻又は苧(カラ)などの莖の皮より得たる纖維を紡ぎて、絲にせるもの。[苧]

**を** 緒【名】一綱に似て、細きもの、即ち絲・紐などの總稱。 記「轡轤然、此云二乎謀苦留留比一」 萬葉「住吉(スミヨシ)の津守(ツモリ)網引(キビ)の浮(ウキ)の緒の浮かゆかむ戀ひつつあらずば」 二弓に張る絲。弦。 萬葉「三笠(ミカサ)刈る信濃の眞弓引かずして弦(ヲ)ぐる樂を知るといはなくに」 三樂器に張りて彈き鳴らす絲。絃。 枕「琵琶…、彈くにはあらず、緒などをまさぐりにして」 四はなを(鼻緒)に同じ。 枕「履子(シナイ)・沓(クツ)などの緒をすげさせ」 五物事の長きつづき。「年のを」「生(オ)のを」 緒になる【句】蔗(ムシロ)、古びちぎれて、編緒のみ殘る。 萬葉「ひとり寢(ム)と薦(モ)朽ちめやも綾蔗(アヤムシロ)緒になるまでに君をし待たむ」

**を** 尾【名】一鳥獸・蟲魚の尻より、後の方へ、長く伸びたるもの。しりを。しっぽ。 萬葉「足引の山鳥の尾のしだり尾の長き長夜を獨かも寢む」 二後方に長く延びたる部分。「彗星の尾」 三凧の下端に附けたる絲・繩など。 四をはり。すゑ。しり。 續群書類從「人聲に尾の無き秋の夕べかな」 五を(丘)を見よ。

尾が見ゆ【句】『「尾を見す」を見よ』取り繕ひおほせずして、失敗の形跡あらはる。ぼろが出る。尻尾(シッポ)が出る。 永代藏「年の暮に、又、二百三十貫足らず、今は內證に、尾が見えて」

尾に附いて物を言ふ【句】人の言ふ所に、口を合はせて言ふ。附和雷同す。

尾に鰭附ける【句】次條に同じ。

尾に尾を附く【句】事實を、大袈裟に傳へ言ふ。針小棒大にす。おまけを附く。尾鰭(ヒレ)を附く。 「毛。

尾の雨覆【句】鳥の尾の附根(オネ)の尾の助【句】たすけ(助)三を見よ。

尾も頭も覺えず【句】前後不覺になる。 若鳳禽寢たが最後、尾も頭も覺えず、五人ながら、枕も定めかね」

尾も羽も無し【句】「尾羽(オハ)打枯らす」に同じ。

尾を見す【句】『人に化けたる狐・狸の、尾を隱すこと能はざるに譬へていふ』取り繕ひおほせずして、失敗の形跡をあらはす。尻尾(シッポ)を出す。ぼろを出す。 心中刃は氷の朔旦「このやうに身代の尾も見せず暮らすは、小かんの孝行ゆゑ」

尾を搖がし、憐を乞ふ【句】『韓愈の應科目時與人書に「若俛首帖耳、搖尾而乞レ憐者、非二我之志一也」とあり。犬の、尾を左右に振りて、愛を求むるに譬へていふ』他人の同情を求むとて、卑劣なる行をなす形容。

尾を泥中に曳く【句】『莊子の秋水篇に「吾聞、楚有二神龜一、死已三千歲矣、王巾笥而藏二之廟堂之上一、此龜者寧其死爲二留レ骨而貴一乎、寧其生而曳二尾於塗中一乎。二大夫曰、寧生而曳二尾塗中一。莊子曰、往矣、吾將レ曳二尾塗中一」とあるに本づく』仕官して束縛を受けんよりは、貧賤なりとも、家居して、安らかに一生を送るに如かざる譬。

**を** 丘・峰・尾【名】山の低き部分、又、土地の、谷・平原などならぬ、高き處。高地。をか。 萬葉「花散らふこの向峰(ムカヲ)のをなの峰(ヲ)のひじにつくまで君が世もがも」 古今「山櫻わが見に來れば春霞峯(ネ)にも尾にも立ち隱しつつ」 「の方言」

**を** 【名】きね(杵)一を云ふ。 常陸國・下總國

**を** 唯【感】應答の聲。はい。をい。をいや。をう。 著聞「人の召す御いらへには、男は、よと申し、女は、をと申すなり」

**を** 【助】一感嘆の意。や。よ。 記「八雲(モヤ)立つ出雲八重垣つまごみに八重垣作るその八重垣を」 萬葉「みはかしを剡(キル)の池の」 二意味を强むるにいふ語。 源氏「いとかたはならんとを申させたまへ」 三名詞・代名詞に添ひて、目的格を示す語。「犬を追ふ」「酒をば飲まず」 四或位置・方向を基準として動作する意。「故鄕を出づ」「山を越ゆ」 五人を示す名詞又は人代名詞に添ひて、に一に似たる意に用ふる語。(但し、「問ふ」といふ動詞に續く時に限る用法なるが如し) 記「我を問はずな」 記「大坂に逢ふや少女(ヲトメ)を道問へばただには告(ノ)らず當麻路(ヤマヂ)を告る」 六用言の連體形又はそを省きたる詞に添ひて、に九に似たる意に用ふる語。ものを。 萬葉「つばらにも見つつ行むを」 古今「白露の色は一つをいかにして秋の木の葉をちぢに染むらん」 七前項のと同じ語に添ひて、に十に似たる意を示すに用ふる語。ものを。 萬葉「大かだはなどかも戀ひむ言擧(コトア)せず妹に寄り寢む年は近きを」

**を** 小【接頭】一軍又は程度の小く少き意。「小舟(オブネ)」「小止(オヤミ)」「小黑(オグロ)し」 二物をやさしげに言ひなす意。「小簾(オス)」「小琴(オゴト)」「小筑波(オツクバ)」

**を** 男・牡・雄【接頭】一男性の意。(女に對して)「牡鹿(オジカ)」「牡牛(オウシ)」 二二つ相

對する物の、大なる又はいかめしき一方。(女に對して)「牡瓦(ハツガ)」『雄柱(ヲシバ)』

**を-あい** 汚穢・汚穢【名】をわい(汚穢)に同じ。

**を-あい** 汚埃・汚埃【名】ちり・ごみ。ほこり。さくらあさ。(女麻(サ)に對して)

**を-あさ** 雄麻【名】麻(ヲ)の雄木(ヲ)。けむし。

**をあさつまわくご-のすくねのみこと** 雄朝津間稚子宿禰命【名】[人]『を(雄・男)は、實は小(ヲ)の義、朝津間は大和國葛上(カツラキ)郡朝妻にて、御母后の御郷里』いんぎようてんわう(允恭天皇)の御名。

**をあね-のきみ** 小姉君【名】[人]欽明天皇の妃。蘇我稻目の妹(實は姉ならんといふ)。崇峻天皇及び四皇子を生む。一名、小兄(ヲ)姫。

**を-あはせ** 緒合・絃合【名】琴・琵琶などを合奏すること。ひきあはせ。新六「秋よはひ立つる琴柱(ヲシ)の緒あはせのただせめにのみせめもゆくかな」謠曲(班女)「重衡、興に乘じ、琵琶を引き寄せ彈じ給へば、又、玉琴の緒合に」

**をい** 唯【感】をに同じ。[古語] 枕「をい、この君にこそといひたるを聞きて」

**を-いくさ** 男軍【名】雄雄しきいくさ。强き兵士。(女軍(ヲウサ)に對して)[古語] 紀「男軍、ヲイクサ」

**をい-や** 唯や【感】『やは感嘆の意の助詞』をいに同じ。[古語] 源氏「初も、ここになん宿りたまへりしと申すに、をいや、聞きし人なりとおぼし出でて」

**をい-をい** 唯【感】をいを重ねていへる語。[古語] 榮花「をいをい、さなり、さなりとのたまふ」

**をう** 翁【名】■年老いたる男。おきな。■揚子方言に「凡尊老、周秦秦隴謂二之公一、或謂二之翁一」とあり』老人の尊稱。

**をう** 唯【感】をに同じ。[古語] 宇治「をうといひて、逃げにけり」

**をう-あう** 翁媼【名】ぢちばば。

**をう-うつ** 蓊鬱【貌】■草木のさかんに茂れるさま。鬱蓊。[蓊蔚] ■をうぼつ(蓊勃)に同じ。

**をう-けい** 甕醯【名】「甕裡の醯雞」の略。

**を-うし** 牡牛【名】をすの牛。ぼぎう。(牝牛(メウ)に對して)

**を-うす** 雄臼【名】磨臼(ヲスス)又は碾臼(ウヒス)の、上の方。(雌(メ)臼に對して)

**を-うつばり** 男梁【名】門の冠木(キヲブ)に直角なる、長き梁(ハリ)。

**を-うと** 夫【名】『をひと(夫)の音便』をっと(夫)に同じ。[古語] 和名「後夫、伊萬乃乎宇止」

夫の男【句】前條に同じ。[古語] 水鏡「かのめの女、いみじくおぢて、男に、これらち殺してよかしといひしかども、をうとの男聞かざりき」

**をうな** 女【名】『をみな(女)の音便』をんな(女)■に同じ。[古語] 古今「繪に書けるをうなを見て」

**をうな-ご** 女子【名】をんなご(女子)に同じ。[古語] 源氏「人にまさらんと思ふを、うなごを、宮仕に思ひたえては」

**をうなめ** 妾【名】めかけ。てかけ。[古語] 字鏡集「妾、ヲウナメ」

**をう-ぼつ** 蓊勃【貌】雲・霧のさかんに立つさま。蓊鬱。

**を-うま** 牡馬【名】をすの馬。をとこうま。をんま。(牝馬(メウ)に對して)

**をう-り** 甕裡【名】甕(カ)のなか。

甕裡の醯雞(ケイ)【句】『莊子の田子方篇に「孔子見二老聃一。……出以告二顏回一曰、丘之於道也、其猶二醯雞一與、微二夫子發二吾覆一也、吾不レ知二天地之大全一也」とあるに本づく。醯雞は蟻蟻(ギ)』「井の中の蛙」に同じ。[諺語]

**をう-をう** 悲【感】■をうを重ねていふ語。■悲しみ叫ぶ聲。宇治「われを殺す人あり、をうをうとぞ叫びける」

**を-えつ** 嗚咽【名】泣きむせぶこと。すすりなき。あえつ。

**をえ-ひめ** 小兄姫【名】[人]をあねのきみ(小姉君)に同じ。

**をおたあしゆうと** 【名】うおおたあしゆうと「を見よ。

**をおほど-のみこと** 男大迹命【名】[人]

**けいたいてんわう**(繼體天皇)の御名。

**を-か** 岡【名】『丘處(ヲ)の義』土地の、小高くして、平らかなる處。丘陵。丘阜。[丘・陵・阜] 和名「丘、乎加」

**を-か** 陸【名】■前條の語と、語源同じ』地球の表面の、水に覆はれてあらぬ所。くが。くぬが。りく。(海に對して)夫木「鳴海潟をかをめぐりて行く人は都のつとに何を語らん」■風呂場の、湯槽(キユ)の外(ヒ)。ながし。浮世風呂「まだ熱いやうだ、さあさあ出ようと、をかへ出ると」■硯の、墨を磨る所。(海に對して)■鑛山の坑内の外(ヒ)。[鑛夫の語]

**を-か** 牡鹿【名】をじか(牡鹿)に同じ。(牝鹿(カ)に對して)

**を-か** 岡【名】■[地]大和國高市(ヒカ)郡高市村の大字。飛鳥(カ)村に接す。古は、市來(ヒ)岡・飛島岡・高市岡など呼び、舒明天皇の岡本宮、齊明天皇の後岡本宮、推古天皇の小墾田(ヲハ)宮は、皆、この地に屬したり。今、岡寺(ヲカ)存す。■[地]豐後國竹田町の別稱。■[地]明治の初年設置の縣の一。ひだ(日田)■參照。■をかめ(岡木綿)の略。

**を-か** 岡【接頭】『陸上に在りて、水上の人を云云する意に出づ』その物に關係せず、傍に離れゐる意。「岡目」『岡惚(ボカ)』

**を-かはねう** 陸河骨【名】[植]りふきんくわ(立金花)に同じ。

**を-かがみ** 尾鏡【名】「尾ろの鏡」に同じ。萬代「山つ鳥尾ろの長尾の尾鏡にかかる心を見るやとほ妻」

**を-がさ** 男餓鬼【名】男の餓鬼。(女餓鬼に對して)萬葉「寺寺の女餓鬼まをさく大神(オホ)の男餓鬼賜(タ)りてその子生まはむ」

**を-がきつ** 小垣内【名】『を(小)は接頭語』かきつ(垣内)に同じ。[古語] 萬葉「小垣内の麻をひき乾し妹なねの作り著せむ」「に同じ。

**を-かけ** 尾掛【名】しりがけつな(尻掛綱)■

**を-かごえ** 岡越【名】岡を越えて行くこと。新六「岡越の道を苦しみ川ぞひの飛鳥(カア)の方をゆきてめぐらん」



**を-がさ** 小笠【名】『を(小)は接頭語』かさ(笠)■に同じ。萬葉「妹著(ケ)せる菅笠(ガス)小笠吾が頸懸(ケナ)る珠の七緒(ナナツ)」

**をがさ** 小笠【名】[地]遠江國六郡の一。郡役所を掛川(カケ)町に置きたり。

**を-がさがけ** 小笠懸・小笠掛【名】かさかけ(笠懸)を見よ。

**をかざき** 岡崎【名】■[地]三河國額田(ヌカ)郡にある市。愛知縣の管下。國內第一の市街。舊東海道五十三驛の一。鐵道東海道線の停車場あり。本多氏の舊藩地。德川氏創業の地。舊稱、菅生(スガ)。■[地]明治の初年設置の縣の一。ぬかだ(額田)■參照。■『をかざきをどり(岡崎踊)の略』德川時代に、吉野山・近江踊・小倉踊・伊勢踊等と共に、箏・三味線の手ほどきとして後世までも流行せし小唄の節。古くは天正年間に行はれ、寛永年中には箏唄にも用ひ、又、一節切(ヒトヨ)・三味線にも用ひたり。唄の詞は「岡崎女郎衆、岡崎女郎衆は良(ヨ)い女郎衆、岡崎女郎衆は良い女郎衆」にて、糸竹初心集に見え、岡崎踊とも呼びたるより見れば、元は踊を伴なひしものなるべし。一代女「やうやうこの程岡崎を覺えたる手つきして、口やかましき撥音」柳亭雜記「岡崎・柴垣は、寛永の頃、並び行はれしなり。岡崎は、足にて、拍子を打つものにて、近き頃流行せしてんてつとんの類なるべし」



■[地]『神樂岡(カグラカ)の南方にあるよりいふ』京都市上京區にある町。もと山城國愛宕(ヤタ)郡に屬する村なりしが、明治二十二三年頃、市に編入せらる。平安神宮、又、本願寺の岡崎別院あり。景勝の地なり。堀鑑「岡崎わたりに、火出で來て」

**をかざき-どばう** 岡崎御坊【名】ぐわんじやうじ(願成寺)■を見よ。

**をかざき-じやう** 岡崎城【名】三河國岡崎市にありし城。康安中、德川氏の組松平康親の創始に係り、家康、この城中に生る。後、豐臣氏の將田中吉政居りしが、慶長四年の亂に、吉政、東軍に應じ、戰後、封

を筑後に移され、爾來、三河の舊臣を居らしむ。明和六年、本多忠祐(ただすけ)に賜與せられ、世襲して、明治に及べり。城址、今は公園となれり。

**をかざき-ぢよろしゆ** 岡崎女郎衆【名】東海道岡崎驛の女郎衆。丹波與作「岡崎女郎衆ともつれ寢よやれ、藤川に」

**をかざき-づきん** 岡崎頭巾【名】東海道岡崎驛にて流行せし頭巾なるべし。くまさかづきん(熊坂頭巾)に同じきかともいふ。俳諧富士石「鼠寒し岡崎頭巾糸鹿(カイ)山」

**をかざき-はっちやうみそ** 岡崎八丁味噌 をかざきみそ(岡崎味噌)に同じ。

**をかざき-びやうし** 岡崎拍子【名】一岡崎踊の拍子。還魂紙料「今の踊に、六拍子といふが、これ卽ち岡崎拍子なり」二里神樂の拍子の一。主に、東京にて、祭禮の時、山車(ダシ)・神樂堂又は小屋掛にて、大太鼓附(ツ)太鼓・鐃鉦(ガネ)などを合奏して行ふ。俗に、馬鹿囃(バカバヤシ)といふ。

**をかざき-べつねん** 岡崎別院【名】をかざきごぼう(岡崎御坊)に同じ。

**をかざき-まさむね** 岡崎正宗【名】〔人〕劫工。五郎と稱す。初代行光の子。相摸國鎌倉に住む。正應・嘉曆年間の人。劍工中興の祖と稱せらる。

**をかざき-みそ** 岡崎味噌【名】三河國岡崎附近の名產なる味噌。二三晝夜煮たる大豆をつぶし丸めて、塊とし、筵の上に並べて、數日間乾したる上、塊を碎き、數十日の後、鹽を混じて桶に貯へおき、約一年の後用ふるもの。八丁味噌。

**をかざきや-かんろく** 岡崎屋勘六【名】〔人〕勘亭流書風の祖。江戸中村座の手代。姓は長谷川、文化二年歿。年六十。

**をかざき-をどり** 岡崎踊【名】をかさき(岡崎)三に同じ。ひゝめ草「小歌の岡崎踊のみにて」「に同じ。

**をかさ-たけ** をかさ蕈【名】〔植〕きおらだけ

**をかさはら** 小笠原【名】一姓氏の一。清和源氏より出づ。新羅三郎義光第五世の孫小二郎長清、甲斐國北巨摩(コマ)郡小笠原に居りて、この姓を稱す。長清、左京大夫・信濃守に任ぜられ、承久の亂に、東軍に屬して、阿波國の守護職となり、子孫繁榮す。長清の孫、長房の弟なる長忠・長能・長實・盛長等は、何れも信濃國に繁衍す。長清十八世の孫秀政、德川氏の世に、下總國古河(コガ)に封ぜられ、信濃國飯田に遷り、又、同國松本(もとの深志)に轉じ、子孫、諸地に轉轉の後、秀政より第六世長興以後、播磨國宍粟(シサ)郡安志(アノ)を領す。秀政の次子忠直の後も、大阪陣の功により、播磨國明石に封ぜられ、寛永九年以後、豐前國小倉(コクラ)に轉じ、小倉の忠直の第三子直方の後は、父の遺領の內、豐前國築上(チクジヤウ)郡千束(チヅカ)の地を分與せられて、子孫これを領し、秀政の第三子忠知は、初、豐後國杵築(キツキ)を領し、三河國吉田に遷り、子孫諸地轉封の後、文化十四年以後、肥前國唐津(カラ)を領し、又、長經第九世の孫長秀の子孫は、初、武藏國本庄を賜はり、諸地轉封の後、元祿四年以後、越前國大野郡勝山(カツヤマ)を領す。以上、五家、何れも、明治維新後、子爵を授けらる。二姓氏の一。家系詳かならず。和泉守吉次、尾州家德川忠吉の家老として、犬山の城主となり、孫吉次、下總國佐倉に遷り、尋いで、常陸國笠間(カサマ)に轉ぜしが、故ありて除封せられ、子孫、尾州侯に仕へ、代代、三九郎といふ。三をがさはらりう(小笠原流)四の略。四〔地〕をがさはらじま(小笠原島)の略。



**をがさはら-さだむね** 小笠原貞宗【名】〔人〕武將。信濃國の人。通稱は彥五郎。信濃の守護となる。元弘の亂、北條高時に屬し、後、官軍に歸順し、軍功あり。尊氏の叛するに及び、これに降る。家、世世、騎射の法を傳へ、貞宗に至りて、遂に武家の禮式を定めて、三儀一統を著す。(一說に、玄孫長秀の著なりともいふ)薙髮して、名を泰山と改め、正平五年歿。年五十七。

**をがさはら-じま** 小笠原島【名】〔地〕太平洋中、北緯二十六度二十二分より同二十七度四十三分の間に羅列せる火山列島。最北の婿島列島、中央の父島列島、南部なる母島列島の三列島に分れ、外に、火山列島(北硫黃島・硫黃島・南硫黃島)及び南鳥島を加へて、島嶼の數大小九十七あれども、面積は僅かに五方里に過ぎず。伊豆國に屬し、東京府にて管轄す。文祿二年、信濃國深志(フカ)の城主小笠原貞頼の發見に係り、一時、英米人も來住し、その子孫、今も存す。

**をがさはら-ながひで** 小笠原長秀【名】〔人〕武將。貞宗の玄孫。通稱は兵庫助。禮式・騎射の法に通じ、足利義滿の師範となり、その命を奉じて、伊勢滿忠・今川氏頼と相議し、武家の禮法を定む。をがさはらさだむね(小笠原貞宗)參照。

**をがさはらりう** 小笠原流【名】一射術及び馬術の一派。信濃國の武將小笠原長清(源頼朝の臣)、その基礎を定め、第七世の孫貞宗、更にこれを增補せり。二武家禮式の一派。小笠原貞宗(一說に長秀)を祖とす。三兵法の一派。小笠原宮內大輔氏隆を祖とす。信州流。四流鏑馬(ヤブサメ)の一派。みうらりう(三浦流)參照。

**をがさはら-れったう** 小笠原列島【名】〔地〕をがさはらじま(小笠原島)に同じ。

**をかし** 犯【名】犯すこと。掟を破ること。違法。犯罪。源氏「古の人も、まことに犯あるにても、斯かる事に當らざりけり」

**をかし** 可笑・可咲【名】あひのきやうげん(間狂言)に同じ。

**をかし** 可笑し・可咲し【形二】一趣あり。面白し。愉快なり。みごとなり。枕「前栽の菊の露こぼるばかり濡れかかりたるも、いとをかし」二笑ふべし。見ともなし。笑はし。源氏「中將、をかしきを念じて」和合人「をかしくも無(ネ)えと、面をふくらせたるを見れば」三怪むべし。あやし。梅曆「何も言はずにゐるのに、其方(チヤ)からをかしくすると、どうも、つい疳癪に觸(サワ)ってならねえ」

**をかし** 可笑し・可咲し【句】腹が立つ。面白くも無い。和合人「何をしてゐるのだな、早く來(コ)ねえか、をかしくもねえと、面をふくらせ」



**をかし-がる** 可笑しがる・可咲しがる【動四自】をかしく思ふ。笑はんとす。

**をかし-なかま** 可笑仲間・可咲仲間【名】氣輕に物事ををかしがる仲間。

**をかし-なげ** 可笑しなげ・可咲しなげ【貌】をかしきさま。一代男「笑(カ)しなげに、髮ぐるぐると卷いて」「同じ。

**をか-しね** 陸稻【名】〔植〕をかぼ(陸穗)に同じ。

**をかじまくわんざん** 岡島冠山【名】〔人〕儒者。名は璞、字は玉成、通稱は援之、後、彌太夫と改む。長崎の人。初、譯官を以て萩侯に仕へしが、後に浪華に至りて、講說を業とす。又、江戸に出で、京都に赴く。支那語に精しきを以て、水滸傳に校定・國譯を施ししが、刻成るに先だちて、享保十三年歿。年五十五。著す所多し。

**をかじまつねき** 岡島常樹【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。八十右衞門と稱す。淺野長矩に仕へて、中小姓となり、勘定方を兼ぬ。元祿十六年二月四日、死を賜はる。年三十八。

**をかし-み** 可笑味・可咲味【名】をかしき趣味。輕妙なる滑稽の味。ゆうもあ。

**をか-しようき** 陸蒸氣【名】『汽船を、當時、蒸氣船と呼びしに對していへる語』をしや(汽車)に同じ。〔明治の初期の語〕

**をかし-やか** 可笑しやか・可咲しやか【貌】をかしくあるさま。趣あるさま。源氏「をかしやかに氣色(キケ)ばめる御文などのあらば」

**を-かしら** 尾頭【名】魚介類の尾と頭と。猿蓑「去來「尾頭の心もとなき海鼠(ナマコ)かな」

**をかしらし** 可笑しらし・可咲しらし【形二】いかにもをかしきさまなり。城傾置「筋道「泣く事があるものか。をかしらしい」

**をかしら-つき** 尾頭附【名】神事・祝儀等の場合に、魚類を、尾も頭も切り離さず、その儘に用ふること、又その魚類。

**をかす** 侵す・犯す・干す・冒す【動四他】一守るべき範圍を越えて爲す。制規以外

の事を爲し、又は、國土の範圍以外に入り込みなどす。「法を犯す」「隣國を侵す」「二障碍を凌ぎつつ進む。「雪を冒す」「矢石を冒す」三害を被らす。太平記「病に犯され、早世仕る事候ひなば」四猥褻なる行を爲す。たはく。「好す・奸す」祝詞「己が母犯せる罪」五己が意見を陳べて、長上に勝たんとす。さからふ。六長上に對して願ひ求む。「干す・犯す」七『冒の字の直譯。冒は帽と關係ある字にて、被(カブ)る義より、この意に用ふ』他家の姓氏を稱す。「他姓を冒す」

**をかすずみ** 陸涼・陸納涼【名】夏の夕べ、地上又は橋の上などにての納涼。

**をかせ** 麻桙・亭桙【名】麻(ソ)を絡ふに用ふる桙。狂言「筒麻(ツツソ)や綜麻(ソ)や麻桙を」麻桙のやう【句】亂雜なる形容。麻の如し。

**をかぞめ** 陸染【名】うはぞめ(上染)に同じ。

**をかだ** 陸田【名】はた(畑)に同じ。

**をかだ** 岡田【名】〔地〕一下總國の舊郡の一。明治二十九年、結城(ユウキ)郡に合併す。二備中國吉備(キビ)郡にある町。岡山縣の管下。伊東氏の舊藩地。三明治の初年設置の縣の一。**ふくやま**(福山)三參照。四山城國相樂(サガラカ)郡の古の地名。今の木津・加茂・當尾(タウノヲ)・瓶原(ミカノハラ)等數村の地に亙りしものなるべしといふ。昔、久仁(クニ)・賀茂の二郷に分れたり。五近江國栗太(クリタ)郡志津村大字岡本の地の古稱。續後拾遺「あづまに春や來つらん近江なる岡田の原に若菜摘むなり」

**をかたいふ** 岡大夫【名】一**わらびもち**(蕨餅)の異稱。狂言「岡大夫」「これは、わらび餅と申す物でござるが、延喜の帝の御寵愛なされたるによりて、官を下されて、蕨餅を、岡大夫とも申します。即ち、朗詠の詩に載ってござる」二龍(ソ)の狂言の一。聟人(ムコリ)の式の席上にて、聟なる者、舅より蕨餅(一名、岡大夫)を振舞はれ、その製造法は嫁が知りをる由を聞かせられ、歸宅後、これを造らせんと欲して、名稱を忘れ、これを思ひ出すにつきて、さまざまの滑稽を演ずる次第を記せるもの。

**をかだぎよくさん** 岡田玉山【名】〔人〕法橋。大阪の人。名は修德、字は子秀。江戸に來りて、神田紺屋町に住す。文化九年歿す。年七十六といふ。著書に繪本太閤記あり。

**をかだきりやう** 岡田奇良【名】〔人〕劍客。總右衞門と稱す。江戸の人。初、心形刀流を學び、遂に一流を創む。柳剛流劍法の祖。文政年間歿したりといふ。

**をかたくわらん** 尾形光琳【名】〔人〕畫家。京都の人。祖父宗柏以來、東福門院御所吳服所の用達を營み、屋號を雁金屋といふ。幼名は市之丞、長じて、藤重郎(一說に藤三郎、又、藤十郎)。名は惟富、字は伊亮、法名は方祝、又、寂明。後、日蓮宗に歸依して、日受といふ。畫道は光悅と俵屋宗達とに私淑し、土佐派の畫風を研鑽し、名聲、一時に振ひ、光琳風・光琳模樣などの名、今に喧傳す。豪奢の行を以て、京都を逐はれ、江戸に移り、居ること年餘、赦されて京師に歸り、享保元年歿す。年五十六(一說に六十二又六十三)。

**をかたけんざん** 尾形乾山【名】〔人〕陶工。京都の人。光琳の弟。名は惟久、通稱は權平、又、新三郎。紫翠・深省・靈海等の別號あり。窯を洛西鳴瀧(ナルタキ)村泉谷に築き、廬をその側に結ぶ。釉法は光悅及び仁清(ニセイ)に倣ひて、別に新意を出す。書をその父宗謙に、畫を兄光琳に習ひ、作る所の陶器、亦、雅趣あり。點茶家の間に愛玩せらる。東山天皇の皇子崇保院公寛法親王の知遇を得、正德二年、法親王の輪王寺宮となりて東下するや、從ひて江戸に下り、地を東叡山領入谷(イリヤ)村に賜はり、又、陶窯を築きて、樂燒を製す。寛保三年歿す。年八十一。

**をかたとうあん** 緒方洪庵【名】〔人〕蘭方の醫者。備中國足守(モリ)の人。名は章、通稱は三平、字は公裁。江戸に出でて、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴きて、蘭醫に親炙し、遂に大阪に業を開く。藩侯の侍醫となり、又、文久二年、幕命により、江戸に來りて、侍醫に擧げられ、法眼に敍し、西洋醫學所頭取となり、翌年歿す。年五十四。

**をかだち** 岡立【名】岡の上に立ちてあること。夫木「岡立の松の嵐の音聞けば思ひしかりも涙落ちけり」

**をかだつ** 岡立つ【動四自】岡らしく見ゆ。宇治「林の下の、岡だちたる所にて」

**をかだのみや** 岡田宮【名】神武天皇の、東征の途次、筑前國遠賀(ヲガ)郡崗縣(カタガタ)、即ち崗水門(ミナト)の地に設けて、一年間滯在せられし宮殿。一名島の宮。記「神倭伊波禮毘古命(カムヤマトイハレビコノミコト)、……、筑紫の岡田の宮に、一年(トセ)坐(ヰ)しましき」

**をかだばんさい** 岡田盤齋【名】〔人〕神道學者。江戸の人。名は正利、通稱は左近、垂加流の神道を跡部良嗣に學び、遂に一家を成す。江戸にて神道を唱ふる者、皆、盤齋を宗とす。延享元年歿す。年七十八。著書多し。

**をかたま** 黃心樹【名】〔植〕次條に同じ。

**をかたまーさかき** をがたま榊【名】〔植〕次條に同じ。

**をかたまーのき** 黃心樹【名】〔植〕『心材帶綠褐色にして美しきより、この名あり』木蘭科に屬する常綠喬木。幹は、高さ六丈、內外に達し、樹皮は暗灰綠色にして平滑、葉は互生し、全緣の長楕圓形乃至狹倒卵形をなし、革質にして、葉柄長し。木蘭の花開き、圓形又は楕圓形の果實、簇り結ぶ。暖帶及び熱帶に自生し、又觀賞用として栽培し、材は床柱・器具類に適し、葉を香料とす。**さんぼく**(三木)一參照。古今「をがたまのき。三吉野の吉野の瀧に浮び出づる泡をかたまのきゆと見つらん」

**をかたまーもくれん** 黃心樹木蘭【名】〔植〕前條に同じ。

**をかち** 雄勝【名】〔地〕羽後國九郡の一。郡役所を湯澤町に置きたり。

**をーかち** 小舵・小楫・小楫【名】『を(小)は接頭詞』かち(舵)に同じ。萬葉「さ丹塗(ヌ)の小船をまけて玉纏(ヲキ)の小舵しじ貫(ヌ)き」

**をかぢ** 陸路【名】くがぢ(陸路)に同じ。

**をかちーいし** 雄勝石【名】陸前國桃生(モ)郡雄勝灣頭の雄勝濱に產する、黑色の石。中生代の粘板岩にして、硯・石盤・敷石・屋瓦などに用ふるに適す。

**をかちーじやう** 雄勝城【名】奈良朝時代に、蝦夷を禦ぐために、今の羽後國雄勝郡に築きし城。廢城の年時も明かならず。

**をーかづき** 尾被・鼯鼠【名】〔動〕むささび(鼯鼠)に同じ。

**をかーづけ** 陸著・岡附【名】荷物を陸路の運搬によりて送り屆くること。胸算用「諸國より、荷物、船路、岡附の馬方」

**をかーつづき** 陸續【名】りくつづき(陸續)に同じ。

**をかーつつじ** 岡躑躅【名】〔植〕一**につつじ**(丹躑躅)に同じ。蜻炎「入日さすをちの岡べのをかつつじ夕紅の色ぞまされる」二**みやましきみ**(深山櫁)に同じ。〔茵芋〕

**をかーつーぴき** 岡引【名】をかひき(岡引)の音便。

**をーかつら** 男桂・楓【名】〔植〕ふう(楓)に同じ。(女桂に對して) 和名抄「楓、一名、橫、乎加豆良。爾雅云、有ノ脂而香、謂ニ之楓ノ」

**をかーづり** 岡釣・陸釣【名】一陸上より、魚を釣ること(船釣に對して) 其角「岡釣のうしろ姿や秋の暮」二それとなく見せかけて、他人を釣り込み欺くこと。

**をかーでら** 岡寺【名】**りゆうがいじ**(龍蓋寺)に同じ。色葉字類「岡寺、大炊天皇之時、越前國封五十戶施入」

**をかーとさき** 桔梗【名】〔植〕**ききやう**(桔梗)に同じ。

**をかーとらのを** 岡虎尾・珍珠菜【名】〔植〕**とらのを**(虎尾)一に同じ。

**をかにしーねぢゆう** 岡西惟中【名】〔人〕俳人。因幡國鳥取の人。又の名を一有といひ、一時軒と號す。大阪に出でて、醫を業とし、傍ら西山宗因の門に遊びて、俳諧をよくす。兼ねて、和歌・筆道に達す。元祿五年歿す。年五十四。

**をかーのーうら** 岡浦【名】〔地〕崗湊(ミナト)の邊の浦。紀「幸二筑紫一、……、入二崗浦一、到二水門一」

**をかの-かねひで** 岡野包秀【名】〔人〕赤穂四十七士の一人。初、名を九十郎といひ、十字槍の達人。俳諧を巧みにす。父金右衛門、復仇の擧に與らずして世を去りしを哀み、その通稱を襲ひて、志を嗣ぐ。元祿十六年二月四日死を賜はる。年二十四。

**をか-の-つ** 崗津【名】〔地〕**をかのみなと**(崗湊)に同じ。

**をか-の-べ** 岡邊【名】**をかべ**(岡邊)に同じ。 續拾遺 岡のべやいつともわかぬ松風の身にしむほどに秋は來にけり」

**をか-の-みなと** 崗湊【名】〔地〕『内浦村より廬屋まで、三里の間、海邊に岡の續けるよりいふなるべしといふ』筑前國遠賀(オガ)郡に屬し、遠賀川の川口に在る、後世の蘆屋の地の古稱。筑前風土記「鳩嶋縣(アガタ)之東側近有二大江口一、名曰二鳩嶋水門一」

**をか-のみや** 岡宮【名】草壁皇太子の宮殿。大和國高市(イマチ)郡高市村大字岡にありしもの。今の岡寺即ち龍蓋寺は、その遺址なり。

**をかのや** 岡屋【名】〔地〕山城國宇治郡の古の地名。今の同郡宇治村大字木幡(コバタ)の五箇莊(ゴカノショウ)の地。宇治川の東岸に位す。方丈記 跡の白浪に身を寄する朝(アサ)には、岡屋に行きかふ船を眺めて」「流。

**を-がは** 小川【名】小き川。こがは。細

**をがは** 小川【名】〔地〕■武藏國比企(ヒキ)郡にある町。居民、多く抄紙を業とし、又、索麵を作る。■常陸國東茨城郡にある町。霞ケ浦の沿岸。石岡町の東二里。

**をがは** 小河【名】次條を見よ。「見よ。

小河鐵【句】「發知(ホッチ)楓に小河鐵」を

**をがは-きぬ** 小川絹【名】越中國より產する、薄地の絹織物。

**をか-はくく** 岡白駒【名】〔人〕儒者。播磨國の人。初、攝津國西宮(ニシノミヤ)に住し、醫を以て業とせしが、後、京都に移りて、儒者となる。專ら經史を究め、兼ねて、小說にも通じ、晚年蓮池(ハスイケ)侯鍋島氏に仕へ、明和四年歿す。年七十六。



**をかは-ごしよ** 小川御所【名】足利將軍義尙(ヨシヒサ)の築きし邸宅。京都一條の南、油小路の西、小川殿町にありて、一時、後土御門天皇の御所となりしことあり。

**をか-はしよ** 岡場所・陸場所【名】江戸にて、官許を經たる吉原以外の遊里。市中・近郊に散在して、田沼意次(オキツグ)執政の時は、所所の新地に五十餘箇所を數ふるに至れり。内藤新宿・品川・千住・板橋の四宿のも、その一に數へられたり。

**をかははりつをう** 小川破笠翁【名】〔人〕俳人。名は宗宇、通稱は平助。笠翁ともいへり。芭蕉の門に學ぶ。又、漆器を造るに巧みにして、頗る風韻あり。世に笠翁細工と稱す。延享四年歿す。年八十四。

**をか-はんたう** 男鹿半島【名】〔地〕羽後國にある半島。南秋田郡に屬し、東西約四里半、南北約三里餘。船川・戸賀(トガ)・北浦(キタウラ)等の港あり、又、奇岩怪石多きを以て、廻覽の客尠からず。「よ。

**を-がはら** 牡瓦【名】**めがはら**(牝瓦)を見

**をがば-りつをう** 小川笠翁【名】〔人〕**をかははりつをう**(小川破笠)に同じ。

**を-がひ** 小貝【名】**こがひ**(小貝)に同じ。〔古語〕 萬葉 梅の花散りまがひたる岡びには鶯鳴くも奉かたまけて」

**をか-び** 岡邊【名】**をかべ**(岡邊)に同じ。

**を-がひ** 小峽【名】小き峽(キヨウ)。(大峽に對して)〔古語〕 祝詞「奥山の大峽・小峽に立てる木」

**をか-ひき** 岡引・陸引【名】『傍に居て手引する者の義』德川時代に、捕吏の手先となりて、罪人捕縛の事に從ひし者。てさき。めあかし。をかっぴき。

**をか-ひじき** 陸鹿尾菜【名】〔植〕藜(アカザ)科に屬する一年生の草。高さ一二尺。葉は互生し、肉質にて、針狀をなし、莖・葉共に柔軟・多汁、淡黃綠色を呈す。葉腋に小形の花、一輪づつ著生す。我國、諸國の海濱砂地に自生し、これを燒きて、曹達を採取するを得べく、鰍莖と葉とは、食用に供す。くがひじき。はままつ。はままつな。



みるな。をかみる。

**をか-ひやうぎ** 岡評議【名】局外者が、徒にかれこれと評議すること。

**をか-ふ** 陸生【名】陸に生えてあること、又その物。 夫木「あづま野のをかふの稻穗出でざれば何をたのみと過ぐるわが世ぞ」

**をか-ぶら** 陸漫歩【名】『この遊里に通ふ者、多くは、川筋の舟に依りしより、特にいふ』文化の頃、江戸深川仲町(ナカチヤウ)の遊里に、陸上より通ひしこと。梅曆「看官(ミヒト)、汐合の程を量りて、よろしくをかぶらの足を洗ひ」

**をか-ぶろ** 岡風呂・陸風呂【名】ひばち(火鉢)を云ふ。〔奥州の方言〕

**をか-べ** 岡邊【名】岡のほとり。をかび。をかのべ。 萬葉 島山をいゆきめぐれる川ぞひの岡べの路ゆ」

**をか-べ** 岡部【名】〔地〕■武藏國大里郡にある村。埼玉縣の管下。安部氏の舊藩地。 問國雜記 なきを訪ふ岡部の原の古塚に秋のしるしの松風ぞ吹く」■駿河國志太(シダ)郡にある町。舊東海道五十三驛の一。丹波與作「藤枝・岡部・瀨戸の染飯(ヤイヒ)」

**をか-べ-の-もり** 岡部森【名】〔地〕駿河國岡部にありし森。 新六「庵(リオ)さす岡部の森の木の間より暮るる待ちける夕月夜かな」

**をか-べ-まぶち** 岡部眞淵【名】〔人〕『遠江國敷智(フチ)郡伊場村岡部、即ち今の濱名郡淺場村の内なる地の新宮の禰宜定信の第二子』かもまぶち(加茂眞淵)に同じ。

**をか-べ-ろくやた** 岡部六彌太【名】〔人〕源義經の士。武藏の人。姓は岡部、名は忠澄、六彌太は通稱。一の谷の戰に平忠度を殺せり。

**をか-ぼ** 陸稻【名】〔植〕『畑にも作り得るより、陸穗の義にていふ』稻の一品種。普通の稻を、水利不便の地にも生育し得るやう馴致せるもの。早稻(セ)・中手・奥手の別あることも、普通の稻に異ならざれど、米粒は、水田のものよりも粘力乏しく、味も亦劣れり。はたけいね。ひでりいね。



をかしね。りくたう。

**をか-ぼれ** 岡惚【名】親しく接したることもなき人を、窃かに慕ひ慕ふこと。

**をが-ま-せ** 令拜【名】**かいちやう**(開帳)を云ふ。〔京都の語〕

**をがまふ** 拜まふ【動四他】**をがむ**(拜む)に同じ。〔古語〕 謠曲「國栖」「紫雲のたなびいたるを拜まひ給うたか」

**をか-み** 岡見【名】■**をかめ**(岡目)に同じ。■古、十二月晦日の夜、蓑笠を著て、木に上り、我家の方に向ひて、祝事をせしこと。斯くすれば、來年の吉凶前知するを得といひ傳へたり。 堀太「言魂(コトダマ)のおぼつかなさにをかみすと梢ながらも年を越すかな」

**をかみ** 拜・拝【名】〔動〕**いさぎ**(鮴)に同じ。

**を-がみ** 拜・拝【名】■拜むこと。 紀「設齋、ヲガミス」■齋會(サイ)を設くること。「して)

**を-がみ** 男神【名】男性の神。(女神に對はい。

**を-がみ** 尾髮【名】馬の、尾の毛と鬣(タテガミ)と。 盛衰記「尾髮、飽くまで逞しきが」

**をが-みいし** 拜石・拝石【名】造園法にて、庭園の中の淨地に据ゑたる平石。

**をが-みいる** 拜入る・拝入る【動四他】**をがむ**(拜む)を强めていふ語。 源氏「手をひき放たず、拜み入りてをり」

**をが-みうち** 拜打・拝打【名】『手の形、合掌して拜むに似たるよりいふ』刀の柄(カラ)を、兩手にて握り、まともに振りかざして、切り下ぐること。をがみぎり。 領城反魂香「居合(ヒヤウ)の眞似、拔打(ヌキウチ)・撫切(ナデギリ)・拜打」「よ。

**をが-み-かかり** 拜掛・拝掛【名】次條を見拜掛の雪隱【句】飽くまで痩我慢(ガマン)をすることの形容。 新永代藏「拜掛の雪隱とて、それは違ひたるといふても、合點で拜むと、片意地を張る男」

**をかみ-がは** 雄神河【名】〔地〕『東鯛波(ナルシ)郡雄神村を通過するによりていふ』越中國射水(イミ)川の別稱。 萬葉 をかみ川紅(クレナヰ)匂ふをとめらし葦附(アシヅキ)採ると瀨に立たすらし」

**をがみ-ぎり** 拝切・拝切【名】をがみうち(拝打)に同じ。太平記「坂本樣(トサカモ)の拝切」

**をがみ-だふし** 拝倒・拝倒【名】をがみたふすこと。春の門松「賢女ごかしの拝倒に逸うて」

**をかみ-たふす** 拝倒す・拝倒す【動四他】相手の機嫌を損はぬやうにして、我願望を達す。なでころばす。

**をがみ-づき** 拝搗・拝搗【名】杵を、両手にて、まともに頭上に振りかざして、搗くこと。「鹿尾菜」に同じ。

**をかみる** 陸水松【名】〔植〕**をかひじき**(陸「じ。

**をがむ** 拝む・拝む【動四他】『をろがむ(拝む)の略』一身を前方に屈めて、禮をなす。ぬかづく。禮拝す。二左右の掌を合はせて、禮をなす。合掌す。(もと、印度の禮法の移れるなり)三みる(見る)一を、謙遜していふ語。拝見す。

**をかむなぎ** 覡【名】**をかんなぎ**(男巫)に同じ。

**をかむら-しやうけん** 岡村尚謙【名】名〔人〕は遜。江戸の人。醫を業とし、本草に精し。本草古義を著し、屋代賢等と古今要覽の編輯に與る。天保十年八月歿す。

**を-かん** 悪寒【名】發熱などのために、ぞくぞくと寒きこと。さむけ。「じ。

**を-かんなぎ** 男巫【名】「男(ヲ)の巫」に同

**をかも-め** 岡目【名】他人の爲す所を、局外より見てをること。をかみ。はため。傍觀。岡目八目(モク)【句】『八目は、碁盤の目の數八目ほども見越して、利と不利とを察し得る義』一圍碁にて、對局者よりは、傍觀者の方が、却りて、よく、勝敗の大勢を觀察し得ること。〔諺語〕二事の局に當れる者よりは、傍觀者の方が、是非得失を明かにするを得。〔諺語〕室町千疊敷「一門も、緣者も、岡目八目、傍(ハタ)からは言ひよいもの」

**をかも-ち** 岡持【名】形、手桶の如くにて、極めて淺く、且つ蓋あり、食物を入れて持ち運ぶに用ふる物。「寺」に同じ。

**をかもと-てら** 岡本寺【名】**ほふき**(法起

**をかもと-の-すめらみこと** 岳本天皇【名】〔人〕『舒明天皇は飛鳥岡本宮(カケモトノミヤ)に御したり』じよめいてんわう(舒明天皇)又はさいめいてんわう(齊明天皇)の何れかなるべしといふ。萬葉「岳本天皇御製一首並短歌」

**をかもと-の-みなみ-の-みや** 岡本南宮【名】あすかのきよみはらのみや(飛鳥淨見原宮)の異稱なるべし。平安「天智天皇……、大津の宮に住ませたまふ。天武天皇元年に、なほ、大和の國に歸って、岡本の南の宮に住ませたまふ」

**をかもと-の-みや** 岡本宮【名】一あすかのをかもとのみや(飛鳥岡本宮)に同じ。二大和國斑鳩(イカル)に在りし、聖德太子の別宮。今の岡本寺(法起寺)は、その址なり。

**をかもと-ぶんや** 岡本文彌【名】〔人〕淨瑠璃の太夫。大阪の人。文壽軒と號す。山本土佐掾の門人といふ。遂に一流を譜ひ出して、文彌節と稱す。元祿七年歿す。年六十二。

**をか-もの** 陸物【名】陸地に產する物。

**をか-もめん** 岡木綿【名】尾張國岡地方より產する白木綿。中形染・更紗染等に用ふ。をか。

**を-がや** 小萱【名】〔植〕『を(小)は接頭語』**かや**(萱)に同じ。新勅撰「主はあれど野となりにける雜かな小萱が下に鶉なくなり」

**をかやき** 岡燒【名】局外に居ながら妬むこと。はたにて、燒餅を燒くこと。

**をかやきもち** 岡燒餅【名】前條に同じ。浮世風呂「己己の好好(カヅキ)だから、をか燒餅はいらねえ事だが」

**をかやなぎ** 陸柳【名】〔植〕**やまならし**(山ならし)に同じ。

**をかやま** 岡山【名】〔地〕一備前・備中・美作の三國を管轄する縣。明治四年七月、備前國岡山藩廢せられて、縣となり、同國全部を管し、八年十二月、小田(オ)縣を合併して、備中全國及び備後國六郡をも管し、九年四年、北條縣をも合併して、美作國をも管するに至り、同時に、備後國六郡は、廣島縣に屬して、今日に至れり。二備前國にある市。岡山縣の管下。池田氏の舊藩地。三紀伊國和歌山の別稱。

**をかやま-じんじや** 岡山神社【名】備前國岡山市石關町に鎭座せる縣社。祭神は日本武尊。貞觀中、甲斐國の酒折(サカヲリ)宮を勸請せるものといふ。酒折神社。

**をかやま-じやう** 岡山城【名】備前國岡山市の東部に在りし城。天文の頃、金光(コンクワ)宗高の築造に係り、天正年間、浮田直家、これを奪ひて、大いに修營し、その子秀家の時、關ヶ原の役に敗れしため、小早川秀秋、代りて封ぜられしが、嗣無くして除封せられ、慶長八年以後、池田氏、代代、城主たり。一名、烏城(ウジ)。

**をかやまだいみやうじん** 岡山大明神【名】**をかやまじんじや**(岡山神社)の舊稱。

**をか-ゆ** 陸湯【名】**あがりゆ**(上湯)に同じ。

**をか-よし** 陸葭【名】〔植〕一くさよし(草葭)に同じ。二しば(芝)一に同じ。

**を-から** 麻幹【名】あさがら(麻幹)に同じ。麻幹の箸【句】**をからばし**(麻幹箸)に同じ。

**をがら-うり** 麻幹賣【名】聖靈會(シヤウリヤウエ)に用ふる麻幹を賣りあるく人。蜻蛉日記「似合しや白髮にかつぐ麻木(ラガ)賣」

**をがら-づきん** 麻幹頭巾【名】**からむしづきん**(苧頭巾)に同じ。

**をがら-ばし** 麻幹箸【名】麻幹を、適當の長さに折りて、聖靈會(シヤウリヤウエ)の供物に添へ、又、その迎火・送火を焚く時の箸に用ふるもの。麻幹の箸。

**をがら-ぶき** 麻幹葺【名】麻幹を束ねて屋根に葺くこと、又その葺きたる屋根。

**を-がるかや** 雄刈萱【名】〔植〕一禾本科に屬する多年生の草。高さ三四尺。莖は、上部に枝を分ち、葉は細長くして尖り、平行脈を具へ、花は、多數の小穗花序をなして、下垂し、各花に長き芒ありて、綠れたるさま、烏麥のに同じ。鬚根は强靭なによりて、束藁(シタ)・刷毛などに作る。いぬがるかや。(雌(メ)刈萱に對して)二**われもかう**(地楡)に同じ。

**をぎ** 荻【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。高さ五六尺。全形、薄(ススキ)に酷似し、葉は互生し、硬質にして、平行脈を具へ、薄のよりやや闊大なり。夏・秋の交、莖部に絹樣の毛の叢生せる花、莖頂に圓錐花序をなして開き、芒は薄のよりも剛く、花色、初は淡紫、後、白變す。水邊・原野に自生す。うみがや。かぜきぎさ。和名抄「荻、乎木」源氏「小鳥狩の鳥を、荻の枝に附けて」

荻の上風【句】荻の葉の上を吹く風。(秋の風にいふ)千載「常よりも身にぞしみける秋の野に月すむ夜半の荻の上風」

**を-ぎ** 男木【名】木材を喰ひ合はする時の、凸狀をなす方。(女木(ギ)に對して)〔大工の語〕

**を-ぎ** 雄木【名】一雌雄異株の植物に於ける、雄花を具へたる方。(雌木(ギ)に對して)二をあさ(雄麻)に同じ。(雌木(ギ)に對して)

**をぎ** 小城【名】〔地〕一肥前國十四郡の一。郡役所を小城町に置く。二肥前國小城郡にある町。佐賀縣の管下。佐賀市を距ること三里九町。鐵道唐津(カラ)線の停車場あり。もと鍋島氏支封の地。三明治の初年設置の縣の一。四年七月、肥前國舊小城藩の地に立てしもの。同年十一月、伊萬里縣に入る。みづま(三潴)四參照。

**をぎえ-ぶし** 荻江節【名】俗曲の節の一。明和年中、荻江露友の、江戸長唄に上方長唄の曲節を交へ、少しく語る氣味をも加へたるもの。主に江戸吉原を中心として行はれしものの如しといふ。

**をぎ-かぜ** 荻風【名】荻を吹く風。和泉式部集「荻風の吹かばいも寢で今よりぞ驚かすかと聞くべかりける」

**をぎ-かふ** 招飼ふ【動四他】鷹を手放しおき、餌を見せて、誘ひ寄せて飼ふ。

**を-ぎし** 雉雉【名】をすの雉。延「無名雄雉、ナナシヲキジ」

**をぎそ-め** 小木曾女【名】信濃國西筑摩(ニシツカマ)郡木祖(ソ)村大字小木曾(麻子驛の

西なる谷にて、木曾川の水源に當れる僻地)の女。木賊(ヤスク)・科木(ハネキ)の皮などを背負ひ、藪原邊に出で來りて賣る。

**をきーなは** 招縄【名】鷹を馴れしむるために、脚を繋ぎおく縄。(但し、大鷹のにいひ、小鷹のは、經緒(ツ)といふ)

**をきの** 荻野【名】〔地〕相摸國愛甲(カヅイ)郡にある村。神奈川縣の管下。厚木町の西北二里。もと荻野山中(ヤマナカ)と呼び、大久保氏の支封の地たりし所。

**をきーのきうこく** 荻野鳩谷【名】〔人〕儒者。江戸の人。名は信敏、字は孔平、通稱は喜内。別に天愚、又、草鞋大王とも號し、天愚孔平(ヒヤウヘイコ)ともいふ。雲州侯に仕へ、奇行に富む。神社・佛閣に詣でて、名札を殿堂に貼附すること、この人より始まるといふ。文化十四年歿す。年百一。

**をきのはま** 荻蔕【名】〔地〕陸前國牡鹿(ヲシカ)郡にある村。牡鹿半島の中部・西側に位し、海水の灣入深く、横濱・函館間往復の汽船の定期寄航地となり、東北地方に出入する貨物は、この地と石巻(マイキシ)・鹽釜との間を往復する小汽船によりて集散せらる。

**をきのやまなか** 荻野山中【名】〔地〕㊀前條の舊稱。㊁明治初年の設置の縣の一。相摸國舊荻野山中藩の地に立てしもの。

**をたはら**(小田原)㊂參照。

**をきのーりう** 荻野流【名】砲術の一派。寛文の頃、上野國の人荻野六兵衛安重を祖とす。

**をきのりうーぞうほーしんじゆつーりう** 荻野流增補新術流【名】砲術の一派。坂本孫八郎俊豊を祖とす。

**をきーはた** 荻畑【名】徳川時代に、荻を仕立てて、檢地の範圍内に入れられし畑。位附なく、石盛(コク)低く、年貢も少かりき。

**をきーはら** 荻原【名】荻の生えてゐる原。新千載「吹く風の音のみ秋のかたみにて霜枯れはつる庭の荻原」

**をきはらーしげひで** 荻原重秀【名】〔人〕徳川幕府の勘定奉行。元祿八年、國用足らざるを以て、將軍綱吉に勸め、銀及び銅を混じて、金銀を改鑄す。惡貨幣の行はるること、これより始まる。重秀ますます舊法を更改し、遂に新井白石に彈劾せられ、正徳三年憂憤して死す。年五十六。

**をきはらーせん** 荻原錢【名】『荻原重秀の指揮の下に鑄造せしよりいふ』元祿十二年、京都七條及び江戸鳥井戸にて鑄造せし寛永銅錢。

**をきーびと** 招人【名】よりまし(憑)に同じかるべし。〔古語〕紫式部日記「御物怪(モノ)の、いみじうこはきなりけり。宰相の君、をき人に、ゐいかうを添へたるに、夜ひと夜ののしり明かして、聲も嗄れにけり」

**をきふーそらい** 荻生徂徠【名】〔人〕『祖先、三河國大給(オギ)の地に住みしより、荻生を姓とす』儒者。名は景元、又の名雙松、字は茂卿、通稱は總右衛門。姓は物部(モノベ)、護園(ゴエン)とも號す。江戸に生る。延寶中、父景明、事に坐して、上總國に竄せられし時、十四歳にしてこれに隨ひ、謫居十年の間、祖父手鈔の大學諺解一本を得て、獨學す。江戸に還りて後、芝增上寺門前に住み、貧窮の間に研鑽怠らず、增上寺山主の推擧を得て、幕府に仕ふ。元祿九年、柳澤吉保に仕へ、晩年郊居し、享保十三年歿す。年六十三。初、朱子の學を喜び、後、伊藤仁齋の古學を慕ひ、後、又、別に自家の說を立てて、古文辭を唱ふ。

**をきふもけい** 荻生茂卿【名】〔人〕前條に同じ。

**をきーむし** 尺蠖【名】㊀〔動〕しやくとりむし(尺取蟲)に同じ。〔古語〕和名抄說文云、蠖、乎岐無之、屈伸蟲也」㊁次條の略。

**をきむしーねり** 尺蠖邊・尺蠖練【名】『尺蠖の進む時の狀に似たるよりいふ』舞樂にて、邊(ネリ)㊀の一。後足を運びて、前足に接せしめては、前足を蹈み出しつつ進むこと。をきむし。

**をきーよし** 荻葭【名】〔植〕をぎ(荻)に同じ。

**をきれ** 尾切【名】次條を見よ。

**をきれ** 尾切なる歌【句】〔文〕下の句の詞遣の行き詰りてある和歌。耳底記「尾きれなる歌とは、如何樣なるを申し候ぞ。答、下の句の詰りたるをいふ」

**をきーゑ** 招餌【名】鷹を招き寄するための餌。〔古語〕拾遺「はしだかのをき餌にせんと構へたる押鮎かすな鼠取るべく」

**をく** 屋【名】㊀いへ(家)㊁に同じ。㊂やね(屋根)㊁に同じ。

**をく** 招く【動四他】招き寄す。〔古語〕萬葉「月立ちし日よりをきつつうちしぬび待てど來鳴かぬ時鳥かも」

**をくう** 屋宇【名】いへ(家)㊁に同じ。

**をくう** 屋鳥【名】屋根の上にとまれる鳥。

屋烏の愛【句】『說苑の貨德篇に「武王克ル殷、召二太公一而問曰、將下奈二其士衆一何上。太公對曰、臣聞、愛二其人一者、兼二屋上之烏一、憎二其人一、憎二其餘胥一」とあるに本づく』我に親しき人に關する物には、何にても善く思はるる譬。〔諺語〕

**をくーか** 屋下【名】屋根のした。(屋上に對して)

屋下に屋を架す【句】『世說に「庾仲初作二楊都賦一。人人競寫、都下爲ル之紙貴。謝太傅云、不レ得レ爾、此是屋下架レ屋耳」、顏氏家訓の序致篇に「魏晉來所レ著諸子、理重事複、猶二屋下架レ屋、牀上施レ牀耳」とあり』無用の事を爲す譬。

**をーぐき** 小岫【名】『を(小)は接頭語』くき(岫)に同じ。〔古語〕萬葉「武藏野のをぐきが雉子(ヌキ)立ちわかれいにし宵よりせろに逢はなふよ」「同じ。

**をくーぐわ** 屋瓦【名】やねがはら(屋根瓦)に同じ。

**をくーぐわい** 屋外【名】家屋など、すべて建築物のそと。(屋内に對して)

**をくわぐいーかせんーはふ** 屋外架線法【名】電力傳送及び分配等のために電線を布設する方法。架空式と地中式とありて、前者は地表上に立てたる、電柱に架設し、後者は、地中に埋設す。

**をくーご** 屋後【名】家のうしろ。

**をーぐさ** 小草【名】『を(小)は接頭語』くさ(草)㊁に同じ。曾丹集「わがせこが來ませりつるか見ぬ程に夏の小草も片まよひせり」

**をぐさおひーづき** 小草生月【名】陰暦二月の異名。……。二月。綠なるけに色淺し小草生ふ月待ちえたる武藏野の原」

**をーぐし** 小櫛【名】『を(小)は接頭語』くし(櫛)に同じ。萬葉「志賀の海人(アマ)は海布(メ)刈り鹽燒き暇無み櫛笥(クシ)の小櫛取りも見なくに」

**をくーしや** 屋舍【名】いへ(家)㊁に同じ。

**をくーじやう** 屋上【名】屋根のうへ。(屋下に對して)

尾上に屋を架す【句】「す」に同じ。〔諺語〕

**をくじやうーていゑん** 屋上庭園【名】『英Roof-garden』西洋式の建築にて、屋上を平坦にし、周圍に欄を繞らし、花壇を設け、運動場に適する設備ある處。

**をくーぜい** 屋稅【名】『宋史の李義耘傳に「秦減二城中居民屋稅一」とあり』家屋に課する稅金。家屋稅。

**をくそ** 苧屑・麻屑【名】麻又は苧(カラムシ)の「絲の屑。

**をくそーづきん** 苧屑頭巾【名】『もと苧屑を用ひて製したるよりいふとぞ』やまとかづきん(山岡頭巾)に同じ。毛吹草(諸國名產越前の條)「割繰布・島布・苧屑頭巾・蒲はばき」

**をーぐち** 尾口【名】尾㊁の附根(ネツケ)の部分なるべし。盛衰記「馬の足屈かんまでは、手綱をくれて游がせよ。……。尾口沈まば、前輪に縋れ」

**をくぢら** 男鯨・牡鯨【名】をすの鯨。(女鯨(ガラク)に對して)

**をーぐつ** 麻沓・麻鞋【名】藁沓の如くにて、麻を材料とせるもの。昔、軍用などに供したり。いはぐつ。

**をくづーづきん** 苧屑頭巾【名】をくそづきん(苧屑頭巾)を云ふ。〔北國の方言〕

**をーぐな** 童男・小男【名】『をは小の義、くなは、朝鮮語Kun(人)と關係ある古語』をのわらべ。男の子。(翁に對して)〔古語〕紀「童男、此云二烏具奈一」

**をくーない** 屋內【名】家屋など、すべて建築物の內部。(屋外に對して)

**をーくに** 小國【名】㊀小き國。せうこく。㊁『を(小)は接頭語』くに(國)㊁に同じ。

萬葉「こもりくの泊瀬(セツ)をくにに」

**をくにじんじゃ** 小國神社【名】遠江國周智(スチ)郡一宮(ミヤチノ)村、大字五川に鎮座せる國幣小社。祭神は大巳貴(オホミナ)命。

**をくはい** 屋背【名】一屋根の背(ネ)。二

**をくご** (屋後)に同じ。

**をくへき** 屋壁【名】家の壁。

**をーぐま** 牡熊【名】をすの熊。(牝熊(マグ)に對して) 祭礼「めぐま・をぐま、子を生み連れて」

**をぐら** 小倉【名】一〔地〕山城國久世(ゼ)郡にある村。宇治町の西。巨椋池(ハイクケ)の東南岸。興臣氏の時、槇島(シマキ)・向島(ムカシマ)の堤防成りて、宇治川と巨椋池との連絡絶ゆるに及び、小倉堤の名生じ、京都・伏見方面より、奈良・伊賀方面への旅客は、伏見の豐後橋(今は觀月橋といふ)を渡りて、堤上を通過し、宇治橋を渡るを要せざるに至れり。二〔地〕樹木生ひ茂りて、小暗きによりて得たる名稱。山城國葛野(カヅノ)郡小倉山附近一帯の地の古稱。山家集「小倉の麓に樓みけるに、鹿の鳴けるを聞きて」三をぐらかん(小倉羹)の略。四をぐらじるこ(小倉汁粉)の略。

小倉の山莊【句】山城國嵯峨の小倉山の附近、今の中院(ナカヰン)町にありし、宇都宮頼綱の山莊。

小倉の色紙(シキシ)【句】宇都宮頼綱が、その小倉の山莊の襖障子の料にせんがため、定家卿に請ひて、所謂小倉山百人一首を書かしめし色紙。

**をぐらーあん** 小倉餡【名】餡の一種。普通、赤小豆(アヅキ)に、大納言赤小豆(シヤウナゴンアヅキ)の蜜漬(ミツヅ)豆を混合したるもの。

**をぐらーかん** 小倉羹【名】赤小豆(アヅキ)隱元などの粒を交へたる煉羊羹。をぐら。

**をぐらーこばん** 小倉小判【名】をだはらひしこばん(小田原菱小判)を見よ。

**をぐらーさんせい** 小倉三省【名】〔人〕土佐侯の老職。近江國の人。名は克、字は政義、通稱は彌右衛門。野中兼山と共に、國政を輔け功勞多し。學は專ら程朱の旨を奉じ、南學の巨擘たり。承應三年歿す。年五十一。

**をーぐらし** 小暗し【形一】すこし暗し。うすぐらし。源氏「山の蔭は、をぐらきここもするに」

**をぐらーしきし** 小倉色紙【名】「小倉の色紙」に同じ。鬼貫「秋もはや小倉色紙の隣まで」

**をぐらーじるこ** 小倉汁粉【名】白餡の汁粉の中に、赤小豆(アヅキ)又は隱元豆を、粒のまま入れたるもの。をぐら。

**をーぐらす** 小暗す【動四自】『を(小)は接頭語』闇くなす。くらます。〔古語〕源氏「知らぬ涙こそ、心をぐらすものなりけれ」

**をぐらーづつみ** 小倉堤【名】〔地〕をぐら(小倉)一を見よ。伊賀越道中雙六「小倉堤を伊賀越に、志州島羽の港より」

**をぐらーどの** 小倉殿【名】山城國葛野(カドノ)郡小倉山の邊に在りて、後龜山天皇の、北朝と媾和せさせ給ひし以後、三十餘年間幽樓せられし御殿。今の二尊院のある所なりしならんといふ。南方紀傳「應永三十一年、小倉殿南方崩御」

**をぐらーのーみささぎ** 小倉陵【名】さがのをぐらのみささぎ(嵯峨小倉陵)の略。

**をぐらーのーみね** 小倉嶺・小鞍嶺【名】〔地〕

**をぐらやま** (小倉山)一に同じ。萬葉「白雲の龍田の山の瀧の上(ヘ)の小鞍の嶺に咲きをる櫻の花は」

**をぐらーのーみや** 小倉宮【名】〔人〕後龜山天皇の御孫。御父は恒敦宮。山城國嵯峨の小倉に住む。正長元年、稱光天皇御不豫に際して、大統を承けんと欲し、伊勢の國司北畠滿雅に投じて、兵を擧げ、敗れて、嵯峨に歸り、その王子は、將軍足利義政の猶子として、勸修寺門跡となる。永享六年入道として聖承と稱し、後、下京に移り住む。嘉吉三年薨ず。たかよしわう(尊義王)參照。

**をぐらーのーわうじ** 小倉皇子【名】〔人〕をぐらのみや(小倉宮)に同じ。

**をぐらーひやくしゆ** 小倉百首【名】〔書〕

**をぐらやまひやくにんいっしゆ** (小倉山百人一首)の略。

**をぐらーひやくにんいっしゆ** 小倉百人一首【名】〔書〕をぐらやまひやくにんいっしゆ(小倉山百人一首)の略。

**をぐらーやま** 小倉山【名】〔地〕一『をぐら(小倉)三を見よ』山城國葛野(カドノ)郡嵯峨村大字上嵯峨にある山。紅葉の名所。麓に二尊院あり。雄藏山、又、隱椋山とも書きたり。後撰「小倉山峰のもみぢ葉心あらば今一たびの御幸待たなん」二大和國平群(ヘグ)郡龍田山の一部。〔小椋山〕萬葉「夕されば小倉の山に鳴く鹿の今夜(コヨ)は鳴かず寢ねにけらしも」

**をぐらやまひやくにんいっしゆ** 小倉山百人一首【名】〔書〕宇都宮頼綱が、名家百人の歌を、一人一首づつ選びしもの。定家卿の選定なりとの說もあり。「小倉の色紙」參照。

**をぐらーをどり** 小倉踊【名】德川時代の初期に、岡崎踊・吉野山・近江踊などと共に行はれ、箏・三味線の手ほどきに用ひし、一種の小唄の節。

**をぐり** 小栗【名】一〔地〕常陸國眞壁郡にある村。中世、附近の村里を併せて、小栗御廚(リヤク)・小栗保(ホウ)・小栗郷(ガウ)など呼びたり。二姓氏の一。本姓は平氏。常陸大掾(ダイジヨウ)氏の支族。前項の常陸國小栗に住み、地名を取りて姓とす。祖を重義といひ、子孫連綿し、戰國の初、助重(即ち小栗判官)城池を失ひしが、後、奇、三河國に居る者あり。天正中、これを外戚とする松平又一政といふ者、德川家康に仕へ、家康の命によりて小栗姓を名乘るに至れり。「條の略。

**をぐりーかうづけ** 小栗上野【句】〔人〕次

**をぐりかうづけーのすけ** 小栗上野介【名】〔人〕幕末の名臣。初の名は又一、名は忠順。豐後守と稱す。西洋の技術・學問を尊信し、今日の横須賀鎭守府の前身なる造船所の創始は、その意匠に出づ。文久三年、二十餘歲にして、米國に渡航し、歸來幣制改革の効を擧げ、勘定奉行兼陸海軍奉行に擢でらる。將軍慶喜、大阪より敗歸するや、開戰論を主張して職を免ぜられ、邑上野國高崎に歸り、明治元年四月官軍に戮せらる。

**をぐりーそうたん** 小栗宗湛・小栗宗丹【名】〔人〕畫家。丹波國の人。中年に大德寺の春浦和尙に參禪す。宗湛はその法名なるべしといふ。初、周文に從ひ、後、一家を成す。周文の後を承けて、室町將軍家に仕へ、殊に將軍義政に寵遇せられ、設色・水墨、共に妙域に入る。

**をぐりーだう** 小栗堂【名】相摸國藤澤の遊行寺にある、小栗判官夫妻の舊蹟。俗曲(柴書片瀨曙「數珠の藤澤、驛路(ヤウチ)の駒にゆかりの小栗堂」

**をぐりーなみ** 小栗波【名】『常陸の小栗氏の定紋』紋所の一。波の高く立てる形に描く。立波。

(みなりぐを)

**をくりーのーいた** 緒繰板【名】つぼいた(壺板)に同じ。

**をぐりーは** 小栗派【名】〔美〕繪畫の一派。小栗宗湛を祖とするもの。

**をぐりーはんぐわん** 小栗判官【名】〔人〕常陸國の佳人。名は助重、通稱は小次郎。父孫五郎滿重、管領足利持氏に攻められ、遂に三河國に落ち行き、助重は、窃かに關東に在りて、賊の爲に命を失はんとせしを遊女てる姫の好意に依り、死中を脫して藤澤遊行上人の道場に投じ、上人の助を得て、三河國に送らる。世に、てる姫を照夫姫と傳へ、又、照天は、小栗の妻なりともいひ、助重、毒酒に中てらるるや車に乘せて溫泉に挽き行きたりなど傳ふ。

**をくーりやう** 屋梁【名】家の梁(ハリ)。

**をぐる** 【動四他】しかる(叱る)に同じ。〔肥後國の方言〕

**をぐるず** 小栗栖【名】〔地〕山城國宇治郡醍醐村の大字。天正十年、明智光秀の土兵に刺殺せられし地。

**をーぐるま** 小車【名】一『を(小)は接頭語』くるま(車)一に同じ。夫木「霜深く起くるわかれの小車にあやなくつらき牛の聲かな」二〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は互生し、披針形にして、

小鋸齒あり。夏、形、菊花に似て、各花細狹なる、黃色の頭狀花を著く。原野に自生し、又、觀賞用として栽培し、又、花を乾して、藥用に供す。のぐるま。［旋覆花。金沸草・滴滴金］

**小車の錦**【句】牛車(ギッシャ)の形に擬へたる紋樣を織り出せる錦。地黑く、車は黃色の絲にて織り出せるものと、これと反對の色なるとあり。伊勢大神宮の御衣には、これを用ふる定なりと云ふ。新千載「君が代に又めぐりあふ小車の錦ぞ神の手向(タヲ)なりける」

**をぐるみ** 雄胡桃【名】［植］おにぐるみ(鬼胡桃)に同じ。

**をぐろ** 小畔【名】『を(小)は接頭語』くろ(畔)に同じ。［古語］夫木「ひまもあらばをぐろに立てる靑鷺のこまごまとこそいはまほしけれ」

**をぐろ** 小黑【名】形小くて、色の黑きもの。萬葉「ぬば玉の飛驒の大黑見るごとに巨勢(コセ)の小黑し思ほゆるかも」

**をくろう** 屋漏【名】㊀爾雅の釋宮篇に「西北隅謂二之屋漏一」とあり』家の西南隅。㊁雨の、屋根より漏り入ること。やもり。あまもり。

屋漏に愧ぢず【句】『詩經の大雅抑篇に「相レ在二爾室一爾不レ愧二于屋漏一」とあり。西北隅は日光の射し入ること少きより、人の居らぬ隱微なる處の意にていふ』人の見ぬ所にても、行を二三にせずして、愧づる所無し。

**をくわい** 汚穢・汙穢【名】をわい(汚穢)の俗音讀。

**をけ** 麻笥・苧笥【名】績みたる麻を入れおく器。蓋ありて、上等なるは、檜の曲物なれど、竹の網代(アジロ)に紙を貼りたるなどもあり。をごけ。萬葉「處女(オトメ)らがをけに垂れたる績麻(ウミ)なす長門の浦に」

**をけ** 桶【名】『前條の轉義』細長き板を、縱に並べ合はせ、圓形の側(ハタ)を造り、板の底を嵌め、側の周圍の上下二箇所ほどに、竹又は金屬の箍を嵌めて締め固め、水を盛るに用ふる器。手桶・片手桶・米泔(ミ)桶・半切(ハンセツ)桶・天水桶・肥(コヤシ)桶など、種類多し。

**をけ** 桶【助數】弦二十條(一說には、二十二條とも、十二條とも)づつを、一まとめにして數ふるに用ふる語。

**をけがは** 桶側【名】桶の側とすべき板。

**をけがは** 桶側【名】［地］武藏國北足立(アダチ)郡にある町。中仙道の一驛。上尾(アゲ)と鴻巢(コウノス)との間。鐵道高崎線の停車場あり。

**をけがはどう** 桶側胴【名】『形、桶側に似たるよりいふ』かなどう(金胴)㊁に同じ。

桶側胴の鎧【句】桶側胴に、袖と草摺とを取附けたるもの。

**をけごし** 桶越【名】桶に乘りて、川越(カハゴシ)をすること。昔、遠江國大井川の上流にて行はれきといふ。

**をけじり** 桶尻【名】和船にて、艫舷(ヘモヤウ)の端の、立戸(テトグ)の附く所。をけぞこ。

**をけぞこ** 桶底【名】㊀桶の底。㊁前條に同じ。［徳川時代の語］

**をけだいく** 桶大工【名】をけや(桶屋)に同じ。

**をけつ** 惡血【名】病毒のために變質せる血。わるち。くろち。

**をけっとう** 烏骨雞【名】［動］をこっけい(烏骨鷄)の訛。

**をけつぼ** 【名】［植］あくしばに同じ。

**をけどう** 桶胴【名】をけがはどう(桶側胴)に同じ。

**をけとり** 桶取【名】壬生(ミブ)狂言の曲目の一、又それに用ふる假面(メン)。

**をけねだん** 桶値段【名】『立會(タチアヒ)終了の際は、上水(ミヅノ)の役の者が、仲買人を退散せしむるため、桶の水を撒布する習にて、その撒布より、桶を俯伏にするまでの間に定まる値段なるよりいふ』帳合米(ヤウ)の取引に於ける、取引當日の最終の値段。

**をけばうし** 桶帽子【名】淺き桶を伏せたるが如き形の、眉庇(マビサシ)無き帽子。フランシテン・臘虎などにて造る。

**をけはさま** 桶狹間【名】［地］『小丘相連なれる間に狹まりて、地勢桶の如くなるよりいふ』尾張國知多郡有松村の大字。その一部なる屋形狹間(田樂窪ともいふ)は、永祿三年九月、織田信長の、今川義元を襲ひ、奇捷を博せし地として有名なり。

**をけばん** 麻笥盤【名】形、麻笥に似たる盤ならん。延喜式「麻笥盤十三口」

**をけび** 桶火【名】火桶の火。和泉式部集「むかひゐて見るにも悲し烟りにし人を桶火の灰によそへて」

**をけぶせ** 桶伏【名】㊀桶を伏せて、その中に人を入るること。㊁昔、遊里にて、揚錢の支拂の出來ぬ客に、入浴用の桶をかぶせて、支拂を承諾せしめしこと。浮世物語「揚錢(アガリ)につまりて、桶伏となり」

**をけぶね** 桶船【名】肥桶(コヤシ)を積みたる船。どをけぶね。［攝津國・河內國等の方言］

**をけぶろ** 桶風呂【名】楕圓形にて、桶の如くなる据風呂(ヅヱ)。

**をけむしん** 桶無盡【名】徳川時代に、江戸の湯屋にて、留桶(ヅケ)の新調費として、留湯の客より、寄付を請ひしこと。毎年十月二十日前に、その意を記したる紙を、水槽の上に張り、寄付を得るごとに、金額・氏名を記して、貼り出し、二十日より新調の桶を用ふる習なりき。

**をけもの** 牡【名】『牡獸の義』男性のけもの。獸類のをす。(牝(メケ)に對して)和名「牡、乎介毛乃」

**をけや** 桶屋【名】桶・井戸側などを造り、又、桶の箍(カ)を掛け直すなどのことを業とする人、又その家。をけだいく。をけゆひ。

**をけややく** 桶屋役【名】徳川時代に、桶屋に課せし役錢。

**をけゆひ** 桶結【名】『桶の箍(カ)を結ふ人の義』をけや(桶屋)に同じ。醒睡笑「桶結のありしが」

**をけら** 朮【名】［植］㊀菊科に屬する多年生の草。莖は、下部木質をなし、春、宿根より出でたる嫩芽は、多く白軟毛を被り、高さ二三尺に達す。葉は、概ね、楕圓形、鋭尖頭にして、微鋸齒を具ふる、無柄の小葉三箇乃至五箇より成る複葉なれども、又、楕圓形、鋭尖頭の單葉なるもあり。秋の頃、枝梢ごとに、薊(アザミ)のに似たる、淡黃色・薄紫又は紅色の頭狀花を開く。山野に自生し、根は、藥用に供し、又、乾かしたるものを火中に投じて、濕氣拂・蚊遣或は殺菌に用ふ。うけら。えやみぐさ。さきくさ。さうぢゆつ。［蒼朮］和名「朮、乎介良」㊁ひやくぢゆつ(白朮)に同じ。字鏡「白朮、乎介良」

(㊀ をけら)

**をけら** 朮の餅(モチ)【句】古、節分の夜、神に供へし餅。草餅の類にて、朮の葉を交ぜて搗きたるものなるべし。四季物語「追儺(ツイナ)の夜は、朮のもちひ、鵜(ウ)の鳥など燒きてたてまつり」

**をけわう** 弘計王【名】［人］『をけは、御兄仁賢天皇の御名億計(オケ)王と相對するものにて、大別(オホワケ)・小(ヲ)別の義ならんとも、大筒・小筒の義ならんともいふ』顯宗天皇の御即位以前の御名。

**をこ** 烏滸・嗚呼・尾籠【名】『ひろう(尾籠)參照』笑ふべき程に愚かなること。枕「よき人などを、さ申す者は、さるはをこにて、いと憎し」源氏「かの仲人(ナカドカ)にはかられて言ふも、いとをこなり」

**をこえる** 【動下一自】『小(ヲ)肥えるの義なるべしといふ』次第に茂りゆく。

**をこがまし** 烏滸がまし・嗚呼がまし・尾籠がまし【形二】『をこ(烏滸)を見よ』㊀ばからし。愚かめきたり。たはけなり。しれがまし。源氏「御心おごりのいとほしき事と、いとをこがましげに思ひて」徒然「うるはしき人も、忽ちに、犯人(ボンニン)となりて、をこがましく」㊁身の程知らずなり。ですぎてあり。こしやくなり。

**をこがる** 烏滸がる・嗚呼がる・尾籠がる【動四自】をこなりと思ふ。宇治「聞く男ども、をこがり嘲りて」

**をごく** 動く【動四自】うごく(動く)の轉。
蠱之集「笹蟹の蜘のはたてのをごくかな風を命に思ふなるべし」

**をーごけ** 麻桶・亭桶・績桶【名】『ごけは小筒の義』をけ(麻筒)に同じ。五人女「古き苧桶の底より、紅の繊紐附きし紫の革足袋一足」卯月の紅葉「丸い績桶に角(カク)の盞」

**をーごご** 小供御【名】『ごごは、くご(供)の轉』天皇の、一日三度の、内内の御食膳。

**をーごと** 烏滸言・嗚呼言・尾籠言【名】をこなる言葉。ざれごと。じゃうだん。痴言。源氏「かのあえ者にしけん法(ノリ)の師だに遠くはと、をごとにのたまひなすをも知らず」

**をーごころ** 雄心【名】雄雄しき心。勇しき心。ゆうしん。萬葉「天地(アメツチ)に少し至らぬますらをと思ひし我や雄心も無き」

**をーさ** 【名】愚かにて、あさましきこと。〔尾張國の方言〕

**をこじ** 朦・虎魚【名】〔動〕をこぜ(朦)に同じ。

**をーじし** 峰越【名】山の峯を越すこと。みねごし。やまごし。夫木「伊駒山あたりの雲と見るまでにをごしの櫻花咲きにけり」曾我「獵師多き山なれば、をごしの矢にやあたりたまひけん」

**をこぜ** 朦・虎魚【名】〔動〕硬鱗類に屬する魚。全長二三寸、楕圓に近き形をなし、背上、尾に達するまでの間に長き刺あり、頭大にして、肉、甚だ美味なり。近海の、岩礁起伏し、海草繁茂せる所に棲息す。をこじ。

**をこたる** 怠る・惰る【動四自】おこたる(怠る)の轉。

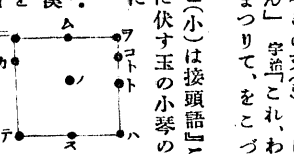
**をこっけい** 烏骨雞【名】〔動〕雞の一品種。羽毛整正ならず、恰も絹絲を附けたる如く、冠、紫黑色にして低く、簇生し、皮肉は黑色に近き紺桔梗色をなし、骨も同色を呈す。古くより、我國各地に飼養せらる。産卵の數少く、且つ小形なり。うこっけい。をけっこう。

**をこづりーざを** 誘竿【名】『誘(ヲコ)を、釣竿に言ひかけ、魚を誘ひ寄せて釣るに譬へていふ』他ををこづる計略。誘惑。〔古語〕六帖「あだ人のをこづりざをの危きにうけひく事の難くもあるかな」

**をこづる** 誘る【動四他】『招(ヲ)き釣る義かといふ』すかし欺く。だましてさそひだす。誘惑す。源氏「この文(ブミ)を、けしきなくをこづり取らん」宇治「これ、わが司(ツカ)のかみにたてまつりて、をこづりたてまつらん」

**をーごと** 小琴【名】『を(小)は接頭語』ごと(琴)に同じ。萬葉「膝に伏す玉の小琴の事無くばいとここだくにわが戀ひめやも」

**をこと-てん** 乎古止點・袁古刀點【名】古漢文を訓むに、送假名を附けず、字の處處に、點を打ちて、その讀方の記號としたるもの。てんつ(點圖)參照。




**をこぶ** 烏滸ぶ・嗚呼ぶ・尾籠ぶ【動上二自】をこめく(烏滸めく)に同じ。十訓「世の常ならずをこびたる者なりけり」

**をごぼり** 小郡【名】〔地〕■周防國吉敷(ヨシキ)郡にある町。鐵道山陽線と山口支線との接續地たり。■東成・西成は、古、東生・西生とも書き、難波津の埼の東西に生成したる地の義にて、西成の方、面積狹少なりしよりいふ』攝津國西成(ナニシ)郡の古稱。

**をごぼりーのーみや** 小郡宮【名】『前條■を見よ』古、難波西成(ナニシ)郡に在りし、孝德天皇の別宮。今の天滿(テンマ)川の南なるべしといふ。

**をこめく** 烏滸めく・嗚呼めく・尾籠めく【動四自】をこなる樣に見ゆ。ばかげる。をこぶ。源氏「昔物語などに、殊更に、をこめきて作り出でたるもののたとひにこそはなりぬべかめれ」

**をごめく** 蠢く【動四自】うごめく(蠢く)に同じ。源氏「鼻のあたりをごめきて語りなせり」徒然「人のいひしままに、鼻の程をごめきて言ふは」

**をごる** 奢る・驕る【動四他】おごる(奢る)に同じ。枕「七つ・八つばかりなるをのこ兒の、愛敬づき、をごりたる聲にて、さぶらひの人呼びつけ」

**をこ-ゑ** 烏滸繪・嗚呼繪・尾籠繪【名】滑稽なる狀態を書きたる繪畫。おどけゑ。とばゑ。戲畫。痴繪。今昔「この人、繪を好みて、嗚呼繪の上手なり」

**をこゑかき** 烏滸繪書・嗚呼繪書・尾籠繪書【名】をこ繪を書く人、又それに巧なる人。今昔「嗚呼繪書とのみなん知りたりし」

**をこ-をこし** 烏滸烏滸し・嗚呼嗚呼し・尾籠尾籠し【形二】いかにもをこなり。甚だ愚かなり。ばかばかし。盛衰記「義盛は、三千騎を從へんとて、十七騎の勢(セイ)を具して、一日路(ヒトヒチニ)下(クダ)りて向ひけり。人人嗚呼嗚呼しく思ひける」

**をさ** 長【名】■一團の人の中にて、頭立てる人。統御の地位に立つ人。かしら。首長。頭領。首領。土佐「船のをさ」■多くの中の、最もすぐれたるもの。

**をさ** 筬【名】■經絲を修め整ふる具の義なるべし。梭・杼の字を充てたる例もあれど、實は誤なり。ひ(梭)參照』機(ハタ)の具。竹の薄き小片を、櫛の齒の如くに列ね、横に長き方形の框に取り附けたるもの。經(タテ)絲を、その竹片の間隙ごとに通して、その位置を整へ、杼(ヒ)を、左右より交互に往來せしめて、經絲に交はらせたる緯(ヨコ)絲を、前方へ押し固めて、織目を密ならしむるに用ふ。現今の西洋式の機にては、鋼鐵製又は眞鍮製の針金を用ふ。をさは(筬羽)參照。和名「筬、乎佐。織具也」■『形、前項の機の具に似たるよりいふ』籤(ヤジリ)の矢配(ハイク)に、竹片を櫛形に横たへ列ね、插したる矢の配置を亂れぬやうにするもの。をさたけ。■『これも、機の具に似たるよりいふ』くぢらひげ(鯨鬚)の異稱。

**をさ** 譯・譯語・曰佐【名】外國語の通譯、ヲサヲカサネテ。通事。〔古語〕記「重譯、

**をさーあい** 幼い・稚い【形】をさなし(幼し)の轉訛。長門平家「をさあい人をおほしたてまゐらせて」

**をさーいれ** 筬入【名】をさざほし(筬通)に同じ。新六「まどほなる賤(ヤツ)が績麻(ウミ)の筬いれに心と薄き麻のころも手」

**をさーえぼし** 長烏帽子【名】『をさは長の義にて、立烏帽子は、烏帽子の中の第一のものなるよりの名なるべしといふ』たてえぼし(立烏帽子)に同じからんといふ。

**をさーかき** 筬掻【名】筬■の製造に從事する人。

**をさかき-だこ** 筬掻胼胝【名】前條の人の、手に生ずる胼胝。繊萬「をさかきだこの手せし人にはあらねば」「す框(ワク)。

**をさーかまち** 筬框【名】筬■の周圍を成す。

**をさーざかり** 男盛【名】をさござかり(男盛)に同じ。萬葉「橋立の倉椅(ハシタテ)川の石(イ)のはしはも壯子時(ワカサ)に我(ア)が渡せりし石のはしはも」

**をさーさき** 尾先【名】尾■の先端。尾端。

**をさぎ** 兎・兎【名】〔動〕うさぎ(兎)に同じ。〔古語〕萬葉「とやの野(ヌ)にをさぎ狙(ネラ)はりをさをさも寢なへ子ゆゑに母にころはえ」

**をーざき** 尾崎【名】峯(ヲ)の、麓にかけて出張りたる所。太平記「飯盛山にうち上りて、南の尾崎に控へたり」貝原益軒大和めぐり「三輪が崎、三輪山の南の尾崎なり」

**をさぎーきつね** をさき狐【名】『尾端二つに裂けてあるより、尾裂狐の義にていふとも、又、村名大崎に本づくともいふ。後者ならば。おの假名なり』俗に、狐に似、飼ひ馴す時は、よく飼主の命を聽きて、種種の神變不思議なる作用をなすといふ怪物。二十日(カ)鼠ほどの大さにて、白色を呈し、飼養者は、京都伏見の稲荷より受け來るといふ。群馬・埼玉・栃木等の縣に、最も多く行はる。

**をさぎーこうえふ** 尾崎紅葉【名】〔人〕小說家。江戸の人。名は德太郎。東京大學文科を中途にて退學し、爾來、同志と硯友社を立て、幸田露伴と並び稱せられしが、胃癌を病みて、明治三十六年歿す。年三十八。氏、又、檀林風の俳諧に長じ、俳名

を、十千萬(ヨロヅ)堂と號し、秋聲會・紫吟社などを組織せり。

**をぎき-まさよし** 尾崎雅嘉【名】〔人〕國學者。大阪の人。通稱は春藏、字は有魚。華湯・春陽軒、又、春の屋と號す。初、書賈を業とし、和漢の書、殆んど渉獵せざるなし。群書一覽を著はし、諸書の搜索に便す。文政十年歿す。年七十三。

**をぎき-りう** 尾崎流【名】書道の一派。尾崎銀岡敬孝(安永の頃の江戸の人)を祖とす。御家流より出づ。

**をさ-ご** 篋子【名】**をさは**(篋羽)に同じ。

**を-ざさ** 小篠【名】〔植〕『**を**(小)は接頭語』**さ**(篠)[1]に同じ。風雅「浮きて立つ雲吹き拂ふ山風の小篠に過ぐる音のはげしさ」

**をざさ-はら** 小篠原【名】一面に小篠の生ひ茂れる地。新古今「小篠原風待つ露の消えやらでこの一ふしを思ひおくかな」

**をざさ-ふ** 小篠生【名】小篠の生ひ茂れる地。ささふ。夫木「印南(イナミ)野や武庫山もとのをささふに浦風さやぎ霰降るなり」

**をさし** 長し【形二】人の長たるものの如し。をさをさし。〔古語〕空穗「御心の賢く、まつりごとをさしくて、荒るるいくさ・けだものも、この主には靜まりぬ」

**を-ざし** 尾差【名】『ざし(差)は接尾語』尾[1]の樣子。宇治「馬……、尾ざし・足つき」

**を-ざし** 鰒【名】『魚(ヲ)刺の義』竹の串にて、魚を刺し貫きて乾したるもの。よちをざし。〔古語〕和名「鰒、乎佐之。一云、與知乎佐之。以竹貫魚、出復州界」

**をさす** 食さす【動四他】**をす**(食す)の敬語。〔古語〕萬葉「古の人のをさせる吉備の酒飲めばすべなし貫簀(スダレ)たばらむ」

**を-ざす** 建す【動四他】『尾指すの義』北斗星の斗柄が、十二支中の何れかの方向を指す。一年十二箇月に、順次十二支の方角に移りて指し、陰曆の正月は、寅の方角を指すより、建寅の月といひ、二月は卯、三月は辰、以下、これに準じて指す。**ほぐんせい**(破軍星)參照。



**をさ-だいみやう** 長大名【名】頭だちたる大名。盛衰記「國國の長大名」

**をさ-たけ** 篋竹【名】**をさ**(篋)[1]に同じ。

**をさだ-さきたま-の-みや** 譯語田幸玉宮【名】大和國磯城(キシ)郡纒向(マキムク)村の邊にありて、敏達天皇のおはせし宮。その址は、同村大字太田に鎭座せる天照御魂神社の邊にて、太田は譯語田の轉訛なるべしとも、又、今の城島(シマ)村大字戒重(カイヂウ)なりともいふ。

**をさだ-さくほん** 長田德本【名】〔人〕**ながたさくほん**(長田德本)を見よ。

**をさだ-の-みや** 譯語田宮【名】**をさださきたまのみや**(譯語田幸玉宮)に同じ。

**をさ-とほし** 篋通【名】經(ケイ)絲を、篋目に通すこと。をさぬき。をさいれ。

**をさ-どり** をさ鳥【名】〔動〕**かつをぎり**(鰹鳥)に同じ。

**をさなあそび** 幼遊・稚遊【名】をさな子の遊。兒戲。

**をさなおひ** 幼生・稚生【名】**をさなだち**(幼立)に同じ。住吉「をさなおひめでたく、二葉の小萩を見る心ち」

**をさなーがほ** 幼顏・稚顏【名】幼き時の顏つき。ちごがほ。

**をさなぎ** 幼氣・稚氣【名】**をさなごころ**(幼心)に同じ。

**をさなーご** 幼子・幼兒・稚子・稚兒【名】をさなき子。こども。ちご。

**をさなーごころ** 幼心・稚心【名】次條に同じ。源氏「をさなごころに、はかなき花・もみぢにつけても、心ざしを見え奉り」

**をさなーごころ** 幼心・稚心【名】をさな子の心。こどもごころ。をさなごころ。童心。源氏「あはれと見たてまつりし御をさな心も、只今のごとくにおぼゆるに」

**をさなーことば** 幼言葉・稚言葉【名】をさな子の言葉。續後紀「孩語、ヲサナコトバ」

**をさ-なし** 幼し・稚し【形一】『長(サ)無しの義』[1]年ゆかず。いとけなし。幼稚なり。幼少なり。源氏「をさなき人の、かかることいひ傳ふるは」[2]をさをさしからず。ひがひがしからず。才足らず。大人氣(オトナゲ)なし。おろかなり。未熟なり。わかし。源氏「姫君に琵琶、若君に箏(ソウ)の御ことを、まだ幼けれど、常に合はせつつ習ひたまへば」



**をさなーすがた** 幼姿・稚姿【名】幼き時の姿。ちごすがた。わらはすがた。「じ。

**をさなーそだち** 幼育・稚育【名】次條に同

**をさなーだち** 幼立・稚立【名】をさな子の生び立つこと、又その狀態。をさなおひ。をさなそだち。ちごおひ。ちごそだち。平治「家盛がをさな立に、少しも違はず」

**をさなーともだち** 幼友達・稚友達【名】幼き時の友達。わらはともだち。

**をさなな** 幼名・稚名【名】幼き時の假の名。元服前の名。わらはな。童名。小字。

**をさなーなじみ** 幼馴染・稚馴染【名】幼時より馴染むこと、又その馴染める人。

**をさなーびる** 幼びる・稚びる【動下二自】次條に同じ。〔古語〕今物語「心にくくをさなびれたる手にて、繰(クリ)のうすやうに書きたるを」

**をさなーぶ** 幼ぶ・稚ぶ【動上二自】幼きさまに見ゆ。をさなびる。山家「いとほしや更に心のをさなびてたまきれらるる戀もするかな」

**をさなーふるまひ** 幼振舞・稚振舞【名】をさな子らしき擧動。愚管抄「をさな振舞をもしてこそはおはしまさめ」

**をさなーめ** 幼目・稚目【名】幼き時に見たること。平家「稚目に見しかば、白髮の糟尾なつしぞかし」

**をさ-ぬき** 篋抜【名】**をさほし**(篋通)に同じ。

**をさ-は** 篋羽【名】篋[1]の主要部を占むる、薄き竹片、又は、鋼鐵製もしくは眞鍮製の針金。各篋羽の間隙を、篋目(ヲサ)又は目度(ヲサ)といひ、篋羽の厚さと篋目との割合は、織物の種類によりて、一樣ならず。をさぎ。

**をさば-ぐさ** 篋葉草【名】〔植〕『葉の形、篋[1]に似たるよりいふ』罌粟(ケシ)科に屬する多年生の草。高さ七八寸、葉は根生にして、簇り生じ、葉柄長く、葉片は深く羽狀に分裂す。根生葉の間より一花莖を抽き、上部に、白色の細花、穹總狀花序をなして開く。我國の特產にして、高山に自生し、又、觀賞用として栽培す。



**をざは-ろあん** 小澤蘆菴【名】〔人〕歌人。尾張國の人。名は玄中、通稱は帶刀(ハカセ)。觀荷堂とも號す。一たび某卿に仕へしが、仕を辭する後は、洛東岡崎に住む。冷泉爲村の門に學び、後、一家の見を立てて、眞心を虛飾なき用語に託すべきを主張し、名づけて「只言歌(ヒタゴト)」といふ。享和元年歿す。年七十九。伴蒿蹊・澄月・慈延と、平安の和歌の四天王と稱せらる。家集を六帖詠藻及び同拾遺といふ。

**をさ-びやくしやう** 長百姓【名】[1]**くみがしら**(組頭)[1]に同じ。[2]同じ村の百姓の內、高持(タカモチ)なる者、草分(クサワケ)の在住者、及び、零落してはあれど、頭と立てられてある者。〔德川時代の語〕

**をさふね** 長船【名】[1]〔地〕備前國邑久(オク)郡行幸(ユク)村の大字。[2]前項の長船の地に住せし刀工の打ちたる刀劍の總稱。一條天皇の御代の人正恆を祖とし、世世、名工多し。をさふねもの。備前刀。[3]昔の女の髮の結ひ方の一。丸髷と同じ形にて、左右に輪を出したるもの。二十歲前後の者の間に行はれたり。

**をさふね-うち** 長船打【名】刀劍・鏃などの、備前國長船の鍛工の打鍛へたるもの。太平記「長船打の鏃の、五分鑿ほどなるを」

**をさふね-もの** 長船物【名】**をさふね**(長船)[1]に同じ。

**をさまり** 治【名】おだやかに定まること。「鎭靜。

**をさまり** 納・收【名】[1]みいり。とりいれ。收納。領收。[2]かたづき。おちつき。まとまり。落著。終結。

**をさまる** 治まる・修まる【動四自】亂れたる所無くなる。正しく齊ふ。散亂せず。しづまる。鎭靜す

**をさまる** 收まる・納まる【動四自】『前條の語と、語源、相同じ』[1]入るべき所に入る。[2]事濟む。かたづく。おちつく。まとまる。落著す。[3]止(ヤ)む。無くなる。消ゆ。〔斂まる〕[4]**しぬ**(死ぬ)に同じ。[5]他より拘束せられず、自己の心のままにおちつく。少しも心をいらだてず。

とりします。「相纏らずをさまってゐる」

**をさむ** 治む・修む・脩む【動下二他】『をさ(長)に語尾の添ひたる語』一亂れぬやうになす。齊へ鎮む。まとむ。統御す。[理む] 源氏「年經ぬる人に後れて、心をさめん方なく、忘れがたきも」二政治を施す。まつりごつ。しろしめす。統治す。正統記「天下を治めたまふこと四年」三よくなるやうにす。つくろふ。修理す。治療す。四學び習ふ。攻修す。[攻む]

**をさむ** 收む・納む・藏む・斂む【動下二他】『前條の語と、語源相同じ』一受け入る。取り上ぐ。收受す。收領す。受納す。受領す。二入るべき所に入る。しまふ。かたづく。收納す。收藏す。三支拂ふべき金を支拂ふ。納付すべき金品を納付す。拂ひ込む。四跡片附をす。終ふ。仕舞ふ。五かくす。消す。「跡ををさむ」六葬る。斂葬す。[殮む] 源氏「ともし火などの消え入るやうにて果てたまひぬれば……、をさめたてまつるにも、世の中ひびきて、悲しと思はぬなし」七舞にて、手を、わが身の方へ曲げ縮む。ひく。(差すに對して) 謠曲(高砂)「萬歳の小忌衣(ヲミモノ)さす腕(カヒナ)には、惡魔を拂ひ、をさむる手には、壽福を抱き」八他の批評などに關せず、心をおちつかす。度胸を据う。御所學さあ取れ、さあ剝げと、身構しても、動かばこそ、やあ、をさめすぎた泥坊め」

**をさ-むし** 歩行蟲【名】[動]『筬蟲の義か』鞘翅類に屬する昆蟲。種類多けれど、體は多く暗色にて、屢ば金屬樣光澤を帶ぶ。觸角は絲狀にして、十一節に分れ、頭部は突出し、肢は細長、後翅を缺くことあり。雜草の間、石の下、などに多く、走ること疾く、食肉性にして、夜間出でて暴食し、農家に有益なるものもあり。

**をさむる-つかさ** 治部省【名】ぢぶしやう(治部省)に同じ。

**をさめ** 納【名】一とりいれ。收穫。[收] 正統記「未だ秋のをさめにも及ばぬに、世の中のなほりにける」二しまひ。最後。はて。終結。五人女「古人の申し傳へしは、五十年忌になれば、朝は精進して、……、これがをさめなれば、少し物入もいとはず」三次條の略。狂言(月見座頭)「いや、いやもはや飲むまい。それならば、納に致しませう」

納の盃【句】なふはい(納盃)に同じ。

納の手【句】おくのて。祕術。

納の枡【句】年貢米などを納入する時に用ふる枡。[古語]

**をさ-め** 長女【名】下女(ソンナモノ)の長たる者。[古語] 和名「專。日本紀私記云、專領二字讀、太宇女。乎佐女」枕「すまし。をさめなどして」

**をさ-め** 筬目【名】をさは(筬羽)を見よ。

**をさめ-がほ** 納顔【名】『をさむ(納む)七を見よ』とりすましたる顔。あわてぬ樣子。浦島年代記「ああ、納顔、見たらない」

**をさめつくる-つかさ** 修理職【名】一しゆりしき(修理職)に同じ。和名「修理職、乎佐女豆久留豆加佐」二しゆりのだいぶ(修理大夫)に同じ。玉葉「修理太夫、ヲサメツクルツカサ」

**をさめ-どの** 納殿【名】一金品・衣裳の類を納めおく處。古、禁中にては、宣陽殿の内にありたりといふ。紫式部日記「をさめ殿にある御衣(ウ)取り出でさせて」二かうしよてん(校書殿)を見よ。

**をさめどの-ぶぎやう** 納殿奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。幕府の納殿の衣服・什器の出納を管理せし奉行。

**をさめ-ふだ** 納札【名】一德川幕府の金藏に納めたる金に對して、金奉行より、又、その淺草の米廩に納めたる米に對して、藏奉行より交付せし受領書。二なふさつ(納札)に同じ。

**をさめ-もの** 納物【名】一稅。租稅。紀「歛ヲサメモノ」二社寺に奉納する物。

**をさめ-やど** 納宿【名】ふださし(札差)に同じ。

**をさ-ゆづる** 儲弦・設弦【名】うさゆづる(儲弦)に同じ。[古語] 紀「儲弦、ヲサユヅル」

**をさ-らんま** 筬欄間【名】[建]竪の桟を、密接して、繁くし、横の桟は、中央に三筋、上下に各一筋ほどにせる、上品なる欄間。

**をさるざは** 尾去澤【名】[地]陸中國鹿角(カヅノ)郡にある村。三菱合資會社經營の鑛山ありて、金・銀・銅・鉛・亞鉛等を產す。

**をさを** 小棹【名】『を(小)は接頭語』さを(竿)三に同じ。(主に歌にいふ) 萬葉「玉纏(タマキ)の小棹」

**をさ-をさ** 【副】あまり。大かた。よくは。(打消の語を伴なふが本來なれど、後世誤用せる例もあり) 源氏「大宮の御もとにも、をさをさまうでたまはず」八犬傳「八玉(タマ)・綱渡の技(ワザ)なんどにも、をさをさ長(タ)けたる者としいへば」

**をさ-をさし** 長長し【形二】熟練してあり。巧みなり。はかばかし。おとなし。伊勢「まだ若ければ、文(フミ)もをさをさしからず」六帖「外重(ソト)守(モ)る身の御垣守(モリヤ)をさをさしくもおもほえず」

**をし** 食【名】一みをし(御食)を見よ。二鷹の餌。

**をし** 鴛鴦【名】[動]をしざり(鴛鴦)に同じ。和名「鴛鴦、乎之。雌雄未二嘗相離一、人得二其一一、則一思而死、故名二匹鳥一也」紫花「をしや、鴨や、水鳥やなど」

**をし** 鴛鴦の片羽(ハタ)【句】『鴛鴦は、雌雄睦じきによりていふ』夫婦の、思ふまにならぬ身の上の譬。艶姿女舞衣「鴛鴦の片羽の、とぼとぼと、子に迷ひゆくさ夜千鳥」

**をし** 鴛鴦の沓(クツ)【句】『をしぐつ(鴛鴦沓)參照』鴛鴦の、雌雄並びて水に浮べるを、沓に譬へていふ語。俳諧藏時記「鴛鴦の姿の沓に似たるをいふなり。古歌「昆野(ケ)の池つがはぬをしの一つがひ誰が脫ぐ沓の形なるらん」「見よ。

**をし** 鴛鴦の褥(シト)【句】「鴛鴦(ヲシ)の衾」を見よ。

**をし** 鴛鴦の肌著【句】次條を見よ。

**をし** 鴛鴦の衾(フスマ)【句】『鴛鴦は雌雄睦じきものなるに因る』鴛鴦を縫物にし、又は畫きたる衾。その肌著なるを鴛鴦の肌著といふ。壬二集「霜もらぬをしの衾の思羽(オモハネ)も千世を重ぬる宿の池水」。







**をし** 愛し【形二】いつくし。愛(ウ)づべし。[古語] 後拾遺「よそながらをしき櫻の匂かな誰わが宿の花と見るらん」

**をし** 惜し【形二】『前條の語の轉義』愛(ウ)づるあまりに、手放し、除き去り、使ひ捨て、又は別れ離れなどするに忍びず。惜しい分に【句】量多くて、殘さんと思ひたる食物を、殘さずに强ひて食ひたる時などにいふ語。

**をし**【感】『「おお、しし」の略にて、おの假名なりとの說もあり』鳴(ナ)を靜むる聲。[古語] 源氏「御盃ささげて、をしとのたまへる聲づかひ・もてなしさへ」

**をし-しう** 汚臭・汙臭【名】むさくろしく、いやなるにほひ。惡臭。

**をし-じか** 牡鹿【名】をすの鹿。さをしか。

**をじか** 牡鹿【名】[地]陸前國十四郡の一。郡役所を石卷(イシマキ)町に置きたり。

**をしかい-どり** をしかい島【名】[動]にはさり(雞)を云ふ。[山城國山崎の方言]

**をじか-の-その** 牡鹿苑【名】[地]ろくやをん(鹿野苑)の譯語。心中二枚繪草紙「笛に誘はれ、妻戀ふる牡鹿のその法(ノ)の導」

**をしか-の-はら** 小鹿原・男鹿原【名】[地]駿河國靜岡市の東、有渡(ウド)山の麓にありし原。今、安倍郡豐田村の大字に小鹿あり。順集「時しもあれをしかの原を秋行けば東男さへぞ戀ひわたるべき」

**をし-かは** 韋【名】『をすを見よ』もみかは(揉皮)に同じ。[古語] 和名「韋、乎之賀波。柔皮也」

**をじかはんたう** 牡鹿半島【名】[地]陸前國にある半島。牡鹿郡の東南に斗出すること約七里、奥羽地方の、太平洋岸に於ける、最も著しき半島。頸部は、僅かに半里の地頸をなし、域内、概ね山地にして狹隘、人家は、海濱に沿ひて散在す。

**をし-がも** 鴛鴦鴨【名】[動]をしざり(鴛鴦)に同じ。夫木「心せよ襲を敷きてをしがものしばしまどろむ岸の白波」

**をし-がる** 惜しがる【動四自】惜しく思ふ。をしむ。

**をしき** 折敷【名】一幅狭き木を折りまはして、緣とし、食器を載するに用ふる盆。角(カド)なるも、隅切なるもあり。足を取り附けたるを、足打といひ、足は、左右二枚取り附け、下方を、凸の如くに刳る。源氏「をしき、手づから取りて」 二〔動〕次條の略。

**をしきうを** 折敷魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。長さ三四寸。側扁にして、鱗細かく、腹、すこし赤し。淡水に產し、近江國琵琶湖に多し。をしき。

**をしぐさ** 遠志草【名】〔植〕ひめはぎ(姫萩)一に同じ。

**をしぐつ** 鴛鴦沓【名】『形、鴛鴦の翡羽(ヒバネ)の如くなるよりいふ』びかうり(鼻高履)に同じ。

**をしげ** 惜氣【名】惜しきさま。
惜しげが無い【句】上品ならねど、堅固にて、惜しからず。

**をしけし** 惜しけし【形一】をし(惜し)に同じ。〔古語〕萬葉「吾妹子(モモ)に戀ふるにあればたまきはる短き命もをしけくもなし」

**をしだ** 雄齒朶・綿馬【名】〔植〕水龍骨(ハフ)科に屬する多年生の羊齒植物。葉は多數叢生し、羽狀複葉にして、長さ三四尺內外、大形の鱗毛を具へ、各小葉は披針形にして、羽狀に分裂し、葉の下面に、圓形にして、腎臟形の被包ある子囊群著生す。山地に自生し、地下莖は條蟲驅除劑に用ふ。みやまゐので。めんば。めんま。(雌齒朶に對して)

**をしどり** 鴛鴦【名】一〔動〕〔雌雄睦じく並びて離れぬ性ありとて、愛(ヲシ)鳥の義にていふとぞ』游禽類に屬する鳥。鴨に似て小く、雄は、嘴、紅色を呈し、頭より後頸にかけて、綠黑色の毛冠あり。羽毛は、部位に依りて、褐色・黑紫色等、相交はりて、文采あり。兩脇に生ずる一羽は、著大となり。一對の謂はゆる思羽(オモヒバネ)をなせども、雌は、形、やや小く、鮮美の羽色なく、冠毛も思羽も無し。東方亞細亞と北米とに產す。我國には、四時棲息し、山地の湖河等にて繁殖し、冬季、低地に下るものあり。をし。 二 睦じき夫婦の譬。 三 女の髮の結ひ方の一。髮を左右に分け、笄の上に、櫛に掛くるもの。 四 常磐津節の一曲。

(をしどり 三)

**をしね** 小稻【名】〔植〕『を(小)は接頭語一說に、食(ヲ)稻(ネ)の略なりと。又、奧(ヲ)稻の略にて、おの假名なりともいふ』いね(稻)に同じ。 續古今「秋の田のをしね色づく今よりか寢られぬ庵の夜寒なるらん」

**をしふ** 汚習・汙習【名】よからぬならはし。汚俗。弊習。

**をしふ** 教ふ・教ふ・敎ふ・訓ふ・誨ふ【動下二他】『愛(ヲ)しく思ひて導く義』 一 知れる事を告げ知らす。 古今「花散らす風のやどりは誰か知る我に教へよ行きて恨みん」 二 學術を授け導きて、覺えしむ。教授す。 三 いましむ。さとす。教誨す。教訓す。訓戒す。
教ふるは、學ぶの半(ハンカ)なり【句】『書經の說命篇に「惟斅學半、念二終始一、典二于學一、厥德修レ覺」とあるに本づく』人に教ふるは、我にも得る處半ばあり。一說に、自ら學ぶは學の體、他人を教ふるは學の用にて、各、學の一半を成し、兩者、相合して、始めて、聖學の全きを得との意なりと。

**をしへ** 教【名】一 教ふること。しつけ。教育。 二 一派の學問又は宗教の旨とする所。教旨。
教の庭【句】「學(ヒヤク)の庭」に同じ。

**をしへ**ーべ 雄蘂【名】〔植〕ゆうずゐ(雄蘂)に同じ。(雌蘂(ヒヤク)に對して)

**をしへ**ーがほ 教顏【名】教ふるらしき顏つき。告げんとする樣子。 俳諧新選(續免)「早梅や油斷の人にをしへ顏」

**をしへ**ーぐさ 教草【名】一 教の種。教ふる材料。 二 教ふる材料とするために作りたる書籍の題號に用ふる語。 三 鷹の、追ひ落したる鳥の在る草原を、羽を引きて教ふること。 新千載「狩り暮らす島立(ハナタ)の鷹の教草あすもや同じ跡を尋ねん」

**をしへぐさ**ーよしはらすずめ【名】よしはらすずめ(吉原雀)四を見よ。

**をしへ**ーど 教子【名】でし(弟子)に同じ。

**をしへ**ーどり 教鳥【名】〔動〕『こつぎをしへざり(嫁教鳥)・こひをしへざり(戀教鳥)の略』せきれい(鶺鴒)の異稱。 草根集「庭に來てさがなき事ををしへ鳥苔の筵の露な拂ひそ」

**をしほやま** 小鹽山【名】〔地〕おほほらの(大原野)を見よ。 古今「大原や小鹽の山もけふこそは神代の事も思ひ出づらめ」

**をしま** 渡島【名】〔地〕北海道十一國の一。函館區及び龜田・上磯(カミ)・松前・檜山(ヒヤ)・爾志(ニシ)・茅部(カヤ)の六郡あり。檜山・爾志の二郡は檜山支廳、その他は、函館支廳の管轄に屬したり。

**をしま** 小島【名】〔地〕駿河國庵原(アハラ)郡にある村。靜岡縣の管下。元祿以降、世良田(ヨラ)松平氏の一萬石の陣屋ありたり。

**をしま** 小島【名】こじま(小島)に同じ。

**をしま** 雄島【名】〔地〕陸前國松島灣の群島の一。灣の中央に位する松島村に屬し、陸岸小松崎との間に、渡月橋と呼ぶ長橋を架せり。千載「見せばやな雄島の海士の袖だにも濡れにぞ濡れし色は變らず」

**をしまだ** 小島田【名】小島にある田。重之集「名取川渡りて作る小島田を守(モ)るにつけつつ夜離(ヨガ)のみする」

**をしまつく** 噢く【動四自】悲み叫ぶ。〔古語〕字鏡集「噢、ヲシマツク」

**をしみ**ーづかひ 惜使【名】惜みて、少しづつ使用すること。 庭訓「齋藥錄「先祖の祖父(ヲヂ)より求めておかれたを、只今まで、少しづつ、をしみづかひにするは」

**をしみて** 惜手【名】物をしみする人。けちんぼう。 醒睡笑「をしみ手の方へ、明朝、齋(キ)を申さんといひやりぬ」

**をしむ** 愛む【動四他】いつくしむ。めづ。愛す。〔古語〕 古今「秋の夜ををしむ歌詠みけるついでに」

**をしむ** 惜む・吝む・悋む【動四他】『前條の語の轉義』惜しと思ふ。をしがる。愛惜す。

**をしん** 惡心【名】〔醫〕『獨 Ubelkeit』胸のむかつくこと。氣持惡しく、吐氣(ハキ)を催すこと。

**をしめ** 緒締【名】玉・石・角・象牙・珊瑚珠・煉物又は金屬などを材とし、多くは、球形に造り、中に孔を貫き、これに、巾著・煙草入・印籠などの二條の緒を通して束ね締むるに用ふるもの。をどめ。

**をしもの** 食物【名】くひもの。飲食物。〔古語〕 紀「飲食、ヲシモノ」

**をしやう** 和尙【名】『和尙の字の宋音の訛。北京官話の發音は hwo-shang にて、hwo-she(和闍)といふ語と共に、支那新疆省カシガル(Kashgar)邊の語 hwah-she(鶴社)の轉訛に出で、hwah-she は、又、敎師の義なる梵 Upādhyāya (烏波陀耶・鄔波馱耶・有波第耶夜)に對する方言なりといふ』 一〔佛〕修行を積みたる僧の尊稱。〔禪宗の語〕天台宗にては「くわしやう」、法相・律兩宗にては「わじやう」(なほ、律宗にては、「尙」を「上」と書く)といふ。 二〔佛〕ほふいんだいくわしやうゐ(法印大和尙位)の略。 三 僧。法師。坊主。 四『禪宗の流布に伴なひて、和尙の語、俗間に行はるること多きに至りしより語といふ』藝道に携はる者、又、藝娼妓などの、仲間の中に最も傑出し、又は頭だてる者を指して呼びし語。〔德川時代の語〕 そぞろ物語「彼等を、江戶に置くべからずと、女の數を改めらるるに、和尙と號する遊女三十餘人」かなをほ「この頃、茶の湯かたに功者にて、世に、この人ならで、又、上手はあらじといふやうの人を、和尙と押出して、誰も、誰も、宜ふは、いかなる事にや」

**をしやう**ーぜんじつ 和尙禪室【名】〔佛〕永平寺又は總持寺の住職を勸め了へたる後、上京し、勸修寺家の執奏によりて、綸旨を賜はりし人。

**をしやな**【名】おしやなを見よ。

**をしやはへ**【名】おしやはへを見よ。〔西國の方言〕

**をーじよく** 汚辱・汙辱【名】はぢ。はづかしめ。

**をしろ** 薺【名】〔植〕なづな(薺)に同じ。字鏡集「薺、ヲシロ・ナヅナ」

**をーしろ** 尾白・駙【名】尾[1]の色のみ白きこと。和名「駙、乎之路能字麻、馬尾白也」

**をしーをけ** 食桶【名】産棚に飾る飯器。

**をしーをし**【感】をしを重ねていふ語。〔古語拾遺〕枕「畫(ヒ)の御座(ヲシ)のかたに、おもの參る足音高し。けはひなど、をしをしといふ聲聞ゆ」

**をす** 牡【名】を(牡)に同じ。(牝(メ)に對し「て」)

**をーす** 小簾【名】『を(小)は接頭語』す(簾)[1]に同じ。萬葉「玉だれの小簾のすげきに入り通ひ來(キ)ね足乳根(タラチネ)の母が問はさば風と申さむ」

**をす** 食す【動四他】[1]くふ(食ふ)・のむ(飲む)・きる(著る)などの敬語。めす。〔古語拾遺〕紀「豐祝(ホトホ)ぎ祝(ホ)ぎもとほし獻(マヰ)り來(コ)し御酒(キ)ぞ淺(ア)さず食(ヲ)せ酒(サケ)」萬葉「うつせみの命を惜しみ浪に濡れ伊良子が島の玉藻刈りをす」[2]身に受けてたもつ。めす。しらす。萬葉「やすみししわが大君のきこしをす國のことごと」

**をす**【動四他】採みて、柔かならしむ。〔古語拾遺〕紀「熟、ヲス」

**をすくに** 食國【名】天皇の治むる國。〔古語拾遺〕萬葉「大君の御言(ミコト)長みをす國の事とりもちて」

**をすくにーのーまつりごとーまらずーきみ** 食國政申大夫【名】『食國の政を天皇に奏上する者の義』天皇の政治を輔け奉る臣。大臣。〔古語拾遺〕

**をーすげ** 小菅【名】『を(小)は接頭語』すげ(菅)に同じ。新後撰「夕暮は淺羽の野路の露ながら小菅亂れて秋風ぞ吹く」「毛。

**をすーげ** 尾末毛【名】鷹の尾の末の、白き

**をーすず** 小鈴【名】『を(小)は接頭語』すず(鈴)[1]に同じ。萬葉「をちこちに鳥踏みたて白鳥の小鈴もゆらに」

**をすはる** 敎はる【動四自】敎を受く。をそはる。



**をすふ** 敎ふ【動下二他】をしふ(敎ふ)の轉訛。狂言「ぎんじ聟」「こなたに、一つ習はうと思うて、參ってござる。……をすへてまっせう」

**をすめーどり** 護田鳥【名】〔動〕『兎をうさぎ・をさぎ、兎をうけら・をけらの兩樣にいふ等の例に依るに、この語、うすめどりともいへば、或はをの假名の方正しからん』おすめどり(護田鳥)を見よ。

**をーすね** 汚水・汙水【名】けがれたる水。

**をすねーだめ** 汚水溜・汙水溜【名】汚水を流れ込ましめて溜めおく處。

**をせーぐく**【名】おせぐくを見よ。

**をーせーぐむ**【動四自】『をは接頭語を(小)、せぐむは背屈(カ)むの義か。せぐくまる(蹋る)參照。一說に、押し平めたるさまの義にて、ぐむは接尾語かと。後者ならばおの假名なり』人の姿勢にて、背曲れるやうに見ゆ。〔古語拾遺〕宇治「丈(ヲ)高くをせぐみたる者」

**をーせーなが**【名】丈高くて、をせぐみてあること。背高くして、曲れるやうに見ゆること。〔古語拾遺〕源氏「居丈(ヰタケ)の高うをせながに見えたまふに」

**をせーほあん** 小瀬甫庵【名】〔人〕太閤記の作者。美濃國土岐氏の庶流。名は道喜、通稱は又四郎、又、長太夫。經術に長じ、易學に達し、又、兵法に精し。豐臣秀次に仕へ、秀次亡びて後、堀尾吉晴に出雲に仕へ、後、又、加賀の前田利常に聘せられて、その子光高に兵法を授く。寛永七年歿す。年七十七。著す所、太閤記の外、信長記(ノブナガキ)・天正軍記等あり。

**をーせん** 汚染・汙染【名】しみ。よごれ。汚點。

**をそ** 嘘【名】うそ(嘘)[1]に同じ。〔古語拾遺〕

**をそ** 獺【名】〔動〕かはうそ(河獺)に同じ。和名「獺、乎曾、水獸。恒居二水中一、食魚爲二糧者也」

**をーそ** 惡阻【名】つはり(惡阻)に同じ。

**をーぞく** 汚俗・汙俗【名】よからぬならはし。汚習。弊風。

**をそーごと** 嘘言【名】うそごと(嘘言)に同じ。奥義抄「或人云ふ、東(ヒガシ)の國は、空言(ソラゴト)を、をそごとといふなり」



**をーそね** 小磽确【名】『を(小)は接頭語』そね(磽确)に同じ。〔古語拾遺〕紀「淺茅原(ヤチ)をそねを過ぎ百傳(ツタモ)ふぬで搖(ユラ)ぐもよ置目(ヲキメ)來(ク)らしも」

**をそはる** 敎はる【動四自】をすはる(敎はる)の轉。

**をーそん** 汚損・汙損【名】けがれ損はること、又、けがし損ふこと。

**をそろ** 嘘ろ【名】『ろは接尾語』をそ(嘘)に同じ。〔古語拾遺〕萬葉「あひ見ては月も經なくに戀ふといはばをそろとわれを思ほさむかも」

**をそーをそ**【感】『獺獺の意にて、獺が喰ひつくぞと嚇す意なりといふ』幼き兒の、這ひまはりて、いたづらするを制止するにいふ語。

**をーだ** 小田【名】『を(小)は接頭語』た(田)に同じ。新古今「をりにあへばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕ぐれの聲」小田の丈夫(マスラヲ)【句】田にて働く男。農夫。新古今「雨降れば小田のますらを暇あれや苗代水を空にまかせて」

**をだ** 小田【名】〔地〕[1]明治の初年設置の縣の一。ふくやま(福山)[2]參照。[3]備中國八郡の一。郡役所を、笠岡町に置きたり。[4]奥州五十四郡の一。今の陸前國遠田(トホ)郡の南部ならんといふ。萬葉「鶏が鳴く東(アヅマ)の國のみちのくの小田なる山に」

**をーだうか** 男蹈歌【名】をどだうか(男蹈歌)に同じ。四季物語「今は、やや、その事そぎゆきて、ただ、めだうか・をだうかのまねびなどばかりあり」

**をーだえ** 緒絶【名】緒の絶ゆること。萬葉「白玉の緒絶はまことゆれどもその緒また貫(ヌ)き人持ていにけり」

**をだえーのーはし** 緒絶橋【名】陸前國志田郡古川(カワベ)町にある橋。和歌の名所の一。奥の細道「平泉(ヒライヅミ)と心ざし、姉羽(アネ)の松・緒絶の橋など聞傳へ」

**をだーおろへんーりう** 小田應變流【名】劍道の流儀の一。小田流の開祖なる小田孝朝(タカトモ)の裔小田東太郎義久(享保中の人にて、本江戸所に住したり)を祖とす。

**をーだか** 雄鷹【名】をすの鷹。(雌(メ)に對して)

**をーたからかう** 雄たからかう【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。葉は心臟狀楕圓形にして、やや蕗(フキ)のに類し、殆ど平滑にして、齒牙狀の鋸齒あり。黄色の頭狀花相集まり、總狀花序をなして開き、各頭狀花の周圍の花は、舌狀花冠、中部のは、筒狀花冠を有す。深山に自生す。めたからかう(雌たからかう)參照。

**をだかりーづき** 小田刈月【名】陰曆九月の異稱。藏玉集「十二月異名。……九。小田刈月。淋しさは鳴立つ暮の露しげく袖うち拂ふ小田刈の月」

**をーだき** 雄瀧【名】二つある瀧の、大なる方。(雌瀧(ヤタ)に對して)

**をーだく** 汚濁・汙濁【名】けがれにごること。にごること。濁汚。

**をーだけ** 雄竹【名】〔植〕まだけ(苦竹)に同じ。(雌竹(メタ)に對して)

**をたけーしふ** 小竹集【名】〔書〕小唄を集めたるものなるべし。一代玄「小竹集を開きて、尻扣きて、拍子を取り」

**をーたけび** 雄詰・男建【名】ををしくたけぶこと。〔古語拾遺〕紀「雄詰、此云二烏多稽眉一」記「いつの男建蹈み建(タ)びて」

**をーたける** 雄詰る【動自】をたけびをなす。〔古語拾遺〕紀「雄詰、此云二烏多鶏盧一」(「盧」は「糜」の誤にて、「をたけび」なるべしとの說もあり)

**をだーごて** 小田籠手【名】鏁(クサリ)の間の所所に、花紋・筏(イカダ)[1]・篠金物(ヤシノモノ)などを附けたる鏁籠手。

**をだす**【動四他】しかる(叱る)に同じ。〔房總邊の方言〕

**をだーたかとも** 小田孝朝【名】〔人〕小田流劍法の祖。讃岐守と稱し、鎌倉管領足利氏滿に仕へ、晩に薙髮して、專尊と號す。劍を中條頼平に學びて、遂に一家を成す。應永二十一年歿す。

**をだち** 小太刀【名】短き太刀。こだち。萬葉「足ずりしさがみたけびてもころをに負けてはあらじとかきはきの小剣(ヲダチ)とりはき」

**をだて** 小楯【名】『を(小)は接頭語』たて(楯)【一】に同じ。記「強田(ヲダ)の道に逢はしし少女(ヲトメ)うしろ手はをだてろかも」

**をたなばた** 男七夕【名】『七夕に祭る二星の男の方なる意』ひこぼし(彦星)に同じ。芭蕉「月弓や婿の一藝男七夕」

**をだに** 小谷【名】『を(小)は接頭語』たに(谷)【一】に同じ。記「淺茅原(ツバラ)を谷を過ぎて百傳(ツタヒ)ふ鐸(ヌ)搖ぐも置目(ヲキ)來(ク)らしも」

**をたにじやう** 小谷城【名】近江國淺井郡小谷村小谷山の上にありし城。戰國時代の淺井氏の居りし所。永正十三年、淺井亮政の築造に係るといふ。天正元年、織田信長の攻圍を受けて、陷落し、城主長政父子自殺せり。

**をたにのかた** 小谷方【名】〔人〕柴田勝家の妻。信長の妹。初、淺井長政に嫁し、三女を生みしが、小谷城陷りし後、三女を連れて、勝家に嫁し、北莊(ヤウ)陷るや、勝家と共に自刃す。年三十七。三女の内、長女は豐臣秀吉の妾淀君、第二女は京極高次に配し、末女は德川秀忠に配す。

**をだはら** 小田原【名】【一】〔地〕相摸國足柄下郡にある町。神奈川縣の管下。箱根に通ずる小田原電氣鐵道あり、又、熱海(ヲ)への輕便鐵道の起點たり。大久保氏の舊藩地。【二】〔地〕明治の初年設置の縣の一。四年七月、相摸國舊小田原藩の地に立てしもの。同年十一月、同國荻野山中(ヤマナカ)縣及び伊豆國韮山縣と合はせて、小田原に足柄縣を置き、伊豆全國及び相摸國七郡を管せしめしが、九年四月、足柄縣を廢して、その地域を靜岡・神奈川二縣と東京府とに分屬せしむ。【三】をだはらぢやうちん(小田原提燈)の略。【四】をだはらひやうぢやう(小田原評定)の略。

**をだはらあしだ** 小田原足駄【名】寶永の頃より行はれし、擡の丸木の足駄。

**をだはらうねらら** 小田原外郎【名】相摸國小田原町にて賣る外郎藥(ウイラウ)。今も、同地の名產に數へらる。丹波與謝「小田原うねらら、大磯・平塚・藤澤の」

**をだはらきくこばんきん** 小田原菊小判銀【名】相摸國小田原にて鑄造せし小判銀の、表に菊の紋あるもの。六種あり。

**をだはらこばんきん** 小田原小判金【名】相摸國小田原にて鑄造せし小判金。表に小田原座の極印あり。

**をだはらささこばんぎん** 小田原笹小判銀【名】相摸國小田原にて鑄造せし小判銀の一。

**をだはらじやう** 小田原城【名】相摸國小田原にありし城。鎌倉管領足利持氏の頃、土肥黨在城し、應永中、大森頼顯入城し、相傳へて氏頼に至り、扇谷(オウギガヤツ)上杉氏に屬して、權威盛んなりしが、伊勢長氏、氏頼の嗣藤頼を欺きて、これを奪ひ、修築を加へてより、謂はゆる小田原北條(後北條)氏の居城となる。天正十八年、遂に豐臣秀吉のために、陷落す。その後、大久保忠世入城したれども、慶長十九年、忠隣(ツタ)改易せられて以來、城主を缺き、江戸より在番の諸士を置く。寛永十九年、稻葉正勝入城し、孫正通の時、貞享三年、大久保忠朝、これに代り、世襲して、明治維新に及べり。

**をだはらせいばつ** 小田原征伐【名】天正十八年、豐臣秀吉の、小田原城を包圍して、北條氏を降しし戰役。天正十七年十一月二十四日、秀吉、檄を諸將に傳へ、翌年二月軍を發し、長圍の陣を敷く。七月一日、氏直、開城し、氏直の父氏政は自殺せしめられ、氏直は紀伊國高野山に閉居を命ぜられたり。

**をだはらだんがふ** 小田原談合【名】をだはらひやうぢやう(小田原評定)に同じ。

**をだはらぢやうちん** 小田原提燈【名】【一】長き圓筒狀をなし、不用の時は、折り疊みて、携帶に便せる、紙製の提燈。享保の頃、相摸國小田原にて造り出ししものといふ。【二】老人の陰莖の譬。〔俚語〕



**をだはらつば** 小田原鐔【名】相摸國小田原の鐔師正次一派の作りし鐔。

**をだはらばち** 小田原鉢【名】相摸國小田原にて、明珍(ミヤウチン)信家の造りし冑。

**をだはらひしこばん** 小田原菱小判【名】相摸國小田原にて鑄造せし金銀小判の、表に、菱形の極印あるもの。銀小判に三種ありて、その一種を、小倉(ヲグラ)小判と もいへり。

**をだはらひやうぎ** 小田原評議【名】次「條に同じ。

**をだはらひやうぢやう** 小田原評定【名】【一】豐臣秀吉の小田原征伐の時、北條氏の勢、次第に蹙まり、城中和戰の評議、徒に長びきて、遂に決する所なかりしを、當時、關東の住民たちの呼びなしし語。小田原談合。小田原評議。貉(ムジナ)評定。【二】相談の長びきて、終に決定せぬこと。小田原談合。小田原評議。貉評定。

**をだはらぶき** 小田原葺【名】こけらぶき(柿葺)に同じ。

**をだはらほうでう** 小田原北條【名】ほうでう(北條)【五】を見よ。

**をだはらぼり** 小田原彫【名】鎌倉彫に似て、彫法やや淺し。小田原の北條氏繁榮し、その地、關東の都會となりし頃、集まり來れる工人が、鎌倉彫に擬して製出せしなるべしといふ。

**をだはらやう** 小田原樣【名】昔、小田原北條家の臣下たちの間に行はれし、衣裳の特有の風俗。平家の六波羅樣(ロクハラ)の類。北條五代記「上下(カミシモ)の襞の矯めやう、衣紋(エモン)のかきやうに至るまでも、小田原樣とて、皆人學べり」

**をだひ** 小鯛【名】こだひ(小鯛)に同じ。曾丹集「をだひ釣るかるもの蜑も春來れば浦浦ごとに眺をぞする」

**をだま** 苧玉・麻玉【名】績みたる苧を卷きて、圓く玉の如き形にせるもの。をだまき。好忠集「をだま繰りかけつつ引きし絲よりも長しや夏の暮るる待つ間は」

**をだまき** 苧環・緒環【名】【一】績みたる苧を、內部を空虛に卷きて、圓く玉の如き形にせるもの。〔小手卷〕伊勢「しづやしづしづの緒だまき繰りかへし昔を今になすよしもがな」【二】紋所の一。絲を卷きつけたる簑(ミノ)を、やや上方より、對角線的に見たる形を描けるもの。【三】『形、前項の苧環に似たるよりいふとぞ』枯木の、枝も葉も無くなりたるもの。一說には、ほこすぎ(鉾杉)に同じと。〔古語〕夫木「筑波山立つをだまきの繁けれど峰ゆく鹿の聲はさはらず」【四】〔動〕いとかけがひ(絲掛貝)に同じ。【五】『形、前項【一】の苧環に似たるよりいふ』蒸菓子の一。餡を包みたる牛皮餅の上に、蕎麥にて、數多の筋を、緒の如く附けたるもの。【六】をだまきむし(苧環蒸)の略。

**をだまき** 樓斗菜【名】〔植〕『前條の語の轉義。花の形によりていふ』毛茛(キンポウ)科に屬する多年生の草。春、舊根より生じて、高さ七寸乃至三尺に至り、叢生し、葉は互生し、二回三出複葉にして、根生葉は葉柄長く、上部のは無柄なり。各小葉は廣楔形又は楕圓形にして、二三片に裂く。夏の初、莖の頂に、一箇、又は分枝して、數箇の花を著く。萼は五片より成りて、花瓣樣をなし、紫色・碧色又は白色等を呈し、花瓣も五箇ありて、下端より距を生じ、その色、萼片と等しけれども、瓣の頂部は、普通黃色を呈す。果實は莢葵にして、僅かに毛あり。深山に自生し、又、栽培して觀賞用とす。いとくりさう。いとくり。

(きまだを)

**をだまきさう** 樓斗菜【名】〔植〕前條に同じ。

**をだまきづか** 小手卷塚・卷子塚【名】大和國三輪の街道の片傍にありきといふ塚。古事記の崇神天皇の卷に、活玉依(イクタマヨリ)姫の許に、男、夜半に來り通ひ、姫、遂に姙みたれども、男の名を知らざるより、父母の教のままに、卷子(ウミコ)の麻絲を針に貫きて、男の衣の裾に縫ひつけおき、翌朝、その絲を辿りゆきしに、三輪山なる三輪

神社に止まれるによりて、その祭神大物主神なることを知り得たりとある故事に本づきて設けしものといふ。妹背山婦女庭訓往來「思の玉の絲切れしをだ卷塚と、今の世まで鳴り響きたる横笛堂の因縁」

**をだまき-むし** 苧環蒸・緒環蒸【名】『麺類を苧に見立てていふ』蕎麥切又は饂飩などに、鴨・菜・海老・蒲鉾・椎茸など、加へたる茶碗蒸。をだまき。

**をだん-くわ** をだん花【名】〔植〕ぼんてんくわ(麼天花)に同じ。

**をだ-もり** 小田守【名】たもり(田守)に同じ。曾我「袁を催す小田守の庵淋しき木枯まで」

**を-だやみ** 小だやみ【名】『をだゆみ(小弛)とをやみ(小止)との混淆したる語なるべし』をだゆみ(小弛)に同じ。武家義理物語「折節の雨降りつづき、……、なかなかをだやみなく」

**を-だやむ** 小だやむ【動四自】『前條を見よ』をだゆむ(小弛む)に同じ。武家義理物語「神鳴も、落方知れずをさまり、雨もをだやみて」

**をだやもり** 小田屋守【名】田屋(ヤク)の番人。をだもり。異竹集「小田屋守とは、田の庵守(モリ)る人なり。引板(ヒキ)といふ物を鳴らして、鹿を追ふなり」

**を-だゆみ** 小弛【名】をだゆむこと。をやみ。

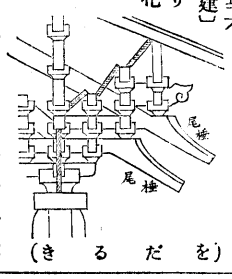
**を-だゆむ** 小弛む【動四自】をやむ(小止む)に同じ。曾我會稽山「五月雨の、一しきりをだゆみて」

**をだより-の-かね** 緒便金【名】兜の頬當に取り附け、忍緒(シノビ)を掛くる金物。

**をだ-りう** 小田流【名】劍道の流派の一。小田孝朝を祖とす。

**をたる** 小樽【名】〔地〕『石狩・小樽兩郡の間を流るる川のアイヌ名オタルナイ(砂川の義)に本づける名稱』■後志國七郡の一。後志支廳の所管。■後志國にある區。小樽・高島の二郡に跨り、東方は小樽灣に臨み、三方は山岳・丘陵に圍まる。小樽支廳の所在地。對露貿易の中心地として、繁盛、遙かに函館を凌ぐ。

**を-だるき** 尾垂木・尾捶【名】〔建〕肘組(ヒヂクミ)より粧突出する化木。



(きるだを)

**を-だれ** 尾垂【名】■はなかくし(鼻隱)■に同じ。堀河波の鼓「門に手を掛けて、柱を傳へ、門(クワン)ふまへ、尾垂より這上って」■ひさし(庇)を云ふ。〔京都・大阪邊の語〕

**をたねあがたじんじや** 小田井縣神社【名】但馬國城崎(キノサキ)郡豐岡町小田井に鎮座せる縣社。祭神は大巳貴(オホナヂ)神。式内の古社。

**をち** 復【名】復(フ)つること。元に返ること。初に戻ること。〔古語〕萬葉「わが宿に咲けるなでしこまひはせむゆめ花散るないやをちに咲け」「芸藝、乎知」

**をち**【名】〔植〕あぶらな(油菜)に同じ。和名

**を-ち** 彼方・遠【代】■遠く隔たれる處。古今「白雲の八重に重なるをちにても思はん人に心へだつな」■遠く隔たれる時。(過去にも未來にもいふ)昔。後代。をちつかた。をつかた。〔古語〕萬葉「この頃は戀ひつつもあらむ玉櫛笥(クシマケ)あけてをちよりすべなかるべし」

**をち** 越智【名】〔地〕■大和國高市(イチ)郡の古の地名。今の越智岡(オチガ)・新澤(ニヒ)・(ヌボ)の二村の地。■近江國の古の地名。坂田郡息長(オキナガ)莊の一部なるべし。〔越〕萬葉「息長の越智の小菅編まなくにい苅り持ち來(キ)」■伊豫國十二郡の一。郡役所を今治(ハイメ)町に置きたり。

**をち** 穩地【名】〔地〕隱岐國四郡の一。隱岐島廳の所管。島後(ユクワ)の西半を占む。

**を-ち** 汚池・汁池・洿池【名】くぼめる地に、水溜りて、池の如くなれるもの。

**を-ち** 小父【名】■父又は母の兄弟、及びをばの夫。〔伯父(父の兄)・叔父(父の弟)・大舅(母の兄)・小舅(母の弟)〕和名伯父、乎知」同「母之昆弟爲舅、母方乃乎知」■年老いたる男。おきな。おやぢ。ぢぢ。老翁。紀「老翁、此云二烏膩一」

小父が、甥の草を刈る【句】「甥の草を舅が刈る」に同じ。〔諺語〕

小父嫁・鬼千匹にむかふ【句】「小舅(ココト)一人は、鬼千匹にむかふ」に同じ。〔諺語〕

**を-ぢ-おや** 小父親・伯父親・叔父【名】小父は父と等しく尊ぶべきものなりとていふ語。國姓爺後日合戰「勿體なくも、叔父親を忠義に代へぬ不孝の劍」

**を-ぢか-じま** 小値賀島【名】〔地〕肥前國五島列島の北部にある島。周圍、八里半弱。北松浦郡に屬す。

**を-ち-かた** 彼方・遠方【名】をち(彼方)■に同じ。萬葉「こもりくの泊瀬(セ)の川のをち方に妹らは立たしこの方に吾(ア)は立ちて」

**を-ち-かた** 彼方【名】〔地〕山城國久世(ヒサ)郡宇治町の大字。宇治橋の東畔。

**を-ち-かた-ごゑ** 彼方聲・遠方聲【名】をち方に聞ゆる聲。夫木「大崎の荒磯(アラ)のわたり霧こめて遠方聲も船呼ばふなり」

**を-ち-かた-なみ** 彼方波・遠方波【名】をち方に立つ波。夫木「泉川涼むこの夜は明けぬらしをち方波の岩越ゆる見ゆ」

**を-ち-かた-ぬべ** 彼方野邊・遠方野邊【名】をち方にある野。萬葉「大名兒(オホナコ)ををち方野邊に刈る萱の束(カツ)のあひだも吾(ア)忘れめや」

**を-ち-かた-びと** 彼方人・遠方人【名】をち方に居る人。萬葉「わが待ちし秋萩咲きぬ今だにも匂ひて行かなをちかた人に」

**を-ち-かた-ぶね** 彼方船・遠方船【名】をち方にある船。

**を-ち-かた-め** 彼方目・遠方目【名】『をち方を見る時の如き目の義』すがめ(眇)に同じ。〔古語〕字鏡「眇、須加目。又、乎知加太目」

**を-ち-かへる** 復返る【動四自】をつ(復つ)に同じ。〔古語〕能宣集「曉の寢覺の千鳥誰がためか佐保の河原にをち返り鳴く」

**を-ぢ-き** 小父君・伯父貴・叔父貴【名】『きはきみ(君)の略、貴は假借の文字』次條に同じ。

**を-ぢ-ご** 小父御・伯父御・叔父御【名】をぢ(小父)■の敬稱。

**を-ぢ-ごく** 男地獄【名】をとこぢごく(男地獄)に同じ。

**を-ち-こち** 彼方此方・遠近【名】■をちと、こちと。遠き所と近き所と。あちら。こちら。ゑんきん。萬葉「妹も脊も若き子どもはをちこちに騒ぎ泣くらむ」蕪村「をちこちをちこちと打つ砧かな」■遠き時と今と。過去又は未來と現在と。〔古語〕萬葉「眞玉づくをちこち兼ねて結びつるわが下紐の解くる日あらめや」

**を-ち-こち-びと** 彼方此方人・遠近人【名】をちこちの人。遠地の人と近邊の人と。伊勢「信濃なる淺間の嶽に立つ烟をちこち人の見やは咎めぬ」

**を-ぢ-さま** 小父様・伯父様・叔父様【名】をぢ(小父)■の敬稱。

**を-ぢ-さん** 小父様【名】■前條の音便。■他家の年長なる男を親しみて呼ぶ稱。〔主に小兒の語〕

**を-ち-じや-びと** 小父者人・伯父者人・叔父者人【名】次條の誤。油地獄「やあ、森右衛門殿、伯父じや人。むむ、與兵衛めか」

**を-ぢ-ぢや-びと** 小父者人・伯父者人・叔父者人【名】『小父である人の訛』をぢ(小女)に同じ。狂言「女相撲」「いつぞや、をぢぢや人から來た相撲(スマ)の書が有らう」

**を-ち-つ-かた** 彼方方【名】をち(彼方)■に同じ。續紀「以後、ヲチツカタ」

**を-ち-ど** 越度【名】■『支那唐の法律にて、冒度(他人の名を假り、その切手を持ちて通ること)・私度(切手無くして、私かに通ること)と共に關門の禁三度の一なる越度(ヱド)に倣へるなり』大寶律にて、關所又は渡場などに依らずして、密かに間道より通り越す罪。德川時代の關所破の類。■あやまち。やりそこなひ。ておち。過失。をつど。十訓「越度もさる

ことにて、さし過ぎたる振舞」 ㊁しくじり。失敗。 甲陽軍鑑「その君越度の時も、心を離さず」

**をちーな** をち栄 【名】〔植〕 **をち**に同じ。

**をちーなく** 復鳴く 【動四自】 復(マタ)ちて鳴く。をち返りて鳴く。〔古語〕 撰集抄「をちなく子規(ホトトギス)」

**をぢーなし** 【形二】 鈍くして弱し。劣れり。〔古語〕 紀「懦弱、ヲヂナク」 竹取「さるわざする舟もなしと答ふるに、をぢなき事する舟人にもあるかな」 〔じ。

**をちーにん** 越任 【名】 **をつにん**(越任)に同

**をちーぬ** 越智野・越野 【名】〔地〕大和國高市郡越智の野。 萬葉「敷妙(クシキ)の袖易へし君玉垂の越野に過ぎぬ又も逢はめやも」

**をちーの-へーの-みささぎ** 越智岡上陵・小市岡上陵 【名】 齊明天皇の御陵。大和國高市郡越智岡村大字車木の東峯にあり。

**をちーみづ** 復水 【名】 飲めば、若返るといふ水。〔古語〕 萬葉「月夜見(ツクヨミ)の持てるをち水い取り來て君に奉(マツ)りてをちえしむもの」

**をーぢん** 汚塵・汙塵 【名】 ちり。ほこり。

**をぢや** 小千谷 【名】 ㊀〔地〕越後國北魚沼郡にある町。信濃川西岸の臺地。同川河港の一。鐵道北越線來迎寺驛より分岐せる魚沼線によりて、水陸交通の便に富む。 ㊁すまし汁に、芋・大根・葱などを加へて、飯を煮たる雜炊(ヌキヅク)。

**をぢや-ちぢみ** 小千谷縮 【名】『南・北魚沼及び中魚沼三郡の地より織り出し、前條㊀の地を市場として賣るよりいふ』 **ちぢちぢみ**(越後縮)に同じ。

**をーぢよく** 汚濁・汙濁 【名】 **をだく**(汚濁)に同じ。

**をぢーやーひと** 小父や人・伯父や人・叔父や人 【名】 **をぢびと**(小父者人)に同じ。大蔵流狂言(文蔵)「伯父や人に、言傳なりともせうものを」

**をちーゑつじん** 越智越人 【名】〔人〕俳人。肥後國熊本の藩士島某の第二子。名は氏恒、通稱は七兵衛、又、平太夫。佐分利流の槍術家佐分利氏の養子。尾張國名古屋に移りて、紺屋を業とし、菱屋重藏と稱し、芭蕉の門人となる。後、赦されて歸國し、復び、藩士の列に入り、號を蕉碩(蕉碩、又、蕉夕とも書く)と改む。師翁の歿後、各務(カガミ)支考の、師の名を藉りて、世を欺くを排擊せり。元祿十五年歿す。年齢かならず。



**をぢーをぢ** 條條 【名】『**をぢなし**參照』くだりくだり。かどかど。條條(デウデウ)。件件。〔古語〕 紀「條條、ヲヂヲヂ」

**をつ** 復つ 【動上二自】 初に返る。元に戻る。復す。〔古語〕 萬葉「わが盛(サカリ)いたくだちぬ雲に飛ぶ藥はむともまたをちめやも」

**をっーかい** 越階 【名】 順序を蹈まず、位階の進むこと。位を、一二階隔て越えて、進め敍すること。亂階。 平家「前(サキ)兵衛佐頼朝の朝臣、從二位したまふ。越階として、二階をするだに有難き朝恩なるに、これは、既に三階なり」

越階晴れて 〔句〕 おもてむきに。誰にも憚る所なく。公然と。をつけはれて。

**をつーかた** 彼方 【名】 **をちつかた**(彼方方)の約。〔古語〕 名義抄「以往、ヲツカタ」

**をーづかひ** 尾使 【名】 鳥・獸などの、尾を振り動かすこと、又その狀態。 日本振袖始「鳥、その尾使のせはしなさ」

**をーづかみ** 小摑 【名】 頭髪の、摑み得る程に延びてあること、又その頭。をつつかみ。古事談「頭、をづかみといふ程に生ひたる法師」 今物語「法師の、まことにあやしげなるが、頭は、をづかみに生ひて」

**をつき** 小槻 【名】 姓氏の一。垂仁天皇の皇子、池速別命より出づ。近江國栗太郡小槻邑に居す。壬生(ミブ)氏とも稱し、官務を世襲せしより、壬生官務の稱あり。

**をっーつき** 小續 【名】 **めしつぎ**(飯繼)に同じ かるべしといふ。 東鑑「御儲事……侍所(小續五十前、菜五種、汁二)、酒肴一具」

**をっーきやう** 越境 【名】 地境を越えて、隣を侵すこと。 庭訓往來「所領安堵・遺跡相論・越境違亂之際、欲ノ致二參訴一之處」 運歩色葉集「越境、ヲッキャウ」

**をつきーやき** 小月燒 【名】 長門國豐浦(フラウ)郡小月村より產出する陶器。慶應二年、清末(スエ)の藩主が、京都より陶工を招き、同村字宮尾(ハツヤ)にて創始せしめしもの。製品は、主として、花瓶・茶器等の日用品なれども、諸種の釉法を用ひたる點に特色あり。

**をーづく** 躍く 【動四自】 **うぐつく**に同じ。〔古語〕 名義抄「躍、ウクヅク・ヲヅク・ヲドル」

**をーつくば** 小筑波 【名】〔地〕『**を**(小)は接頭語』 次條に同じ。 萬葉「小筑波の繁き木の間ゆ立つ鳥の目ゆか汝(ナ)を見むさ寢ざらなくに」

**をーつくばねーろ** 小筑波嶺ろ 【名】〔地〕『**を**(小)は接頭語、**ろ**は接尾語』 **つくばね**(筑波嶺)に同じ。 萬葉「狹衣(サモモ)の小筑波嶺ろの山の崎忘らえ來(コ)ばこそ汝(ナ)を懸けなはめ」

**をーつけ** 緒附 【名】 釣的(マツト)の、釣緒を取り附くる所。 著聞「緒附を射切りて、的、土に落ちにけり」

**をっけはれーて** 越階晴れて 〔句〕「越階(カイ)晴れて」の訛。 「じ。

**をっーけん** 越權 【名】 **をっけん**(越權)に同

**をつーど** 越期 【名】 或期間を越して、長く續くこと。 狂歌咄「秋の初つ方より、瘧(ヲコリ)といふ事を仕出し、さまざま藥を用ふれども、後には越期になり、日毎に重りしかば」 「じ。

**をつーどく** 越獄 【名】 **らうやぶり**(牢破)に同

**をっーせき** 越關 【名】 **せきしやぶり**(關所破)に同じ。 折焚く柴の記「越關の事、……、速かに告げ訴ふべきに」 「よ。

**をっーそ** 越祖 【名】「超佛(テウブツ)・越祖」を見

**をっーそ** 越訴 【名】 ㊀訴訟の順序を越えて、直ちに、その上官に訴へ出づること。 ㊁鎌倉・室町兩時代に、引付頭人(ヒキツケニン)の裁判に遲滯・偏頗・寃枉ある場合に、訴人又は論人が、申狀を以て、越訴奉行に訴へ出でしこと。



**をっそーがら** 越訴頭 【名】 次條に同じ。

**をっそーぶぎやう** 越訴奉行 【名】 鎌倉・室町兩時代に、越訴を引き受けて、吟味することを掌りし奉行。

**をつつ** 現 【名】 **うつつ**(現)に同じ。〔古語〕 萬葉「いにしへゆ今のをつつに斯くしこそ見る人ごとにかけて偲(シノ)ばめ」

**をーづつ** 尾筒 【名】 ㊀馬の尾にかぶらする布の袋。をぶくろ。 ㊁獸類の尾の附根(ネ)の、圓く脹れたる部分。 曾我「駒の尾筒を、手綱に取り」

**をっーつかみ** 小摑 【名】 **をつかみ**(小摑)の音便。 教心集「頭は、をっつかみといふ程生ひたる法師」

**をっつかみーがら** 小摑頭 【名】 をっつかみなる頭。 義經記「法師なれども、頭は剃らねば、をっつかみ頭に生ひたる」

**をーっと** 夫・良人 【名】『**をひと**(夫)の音便』妻の配偶者。有婦の男。亭主。りやうじん。(妻に對して)

夫す 〔句〕「男(コト)す」㊁に同じ。 十訓「人、あまた懸想しけれども、夫などもせで」

夫に對して、唾を返すな 〔句〕 夫の言葉に對して口ごたへすな。〔諺語〕

夫の前の見麻桶 〔句〕「亭主の前の見麻桶」に同じ。〔諺語〕

夫は神 〔句〕 夫は大切にして敬ふべし。〔諺語〕 松風村雨東帶鑑「夫は神にも譬へしものを、いかなる過去の因果ぞと思へば」

**をっと** 【名】〔動〕 **おっと**に同じ。

**をつーど** 越度 【名】 **をちど**(越度)に同じ。運歩色葉集「越度、ヲッド」

**をっとーおもひ** 夫思 【名】 夫を大切にすること。をとこおもひ。

**をっーとせい** 腦胲・腦胲獸 【名】〔動〕 **おっとせい**(腦胲)に同じ。

**をーづな** 麻綱・苧綱 【名】 **をなは**(麻繩)に同じ。 東鑑「東大寺苧綱事」

**をつーにん** 越任 【名】 順序を蹈まず、官職の進むこと。官を、一二階隔て越えて昇

進せしむること。**をっかい**(越階)参照。

**をつ-ねん** 越年【名】年を越すこと。舊年を送りて新年を迎ふること。てうねん。太平記「淀・八幡(ヤハタ)に越年して、なほ、諸國の勢(ケセイ)を待ち調へて」

**をつねん-せい** 越年生【名】〔植〕**にねんせい**(二年生)に同じ。

**をつねんせい-さうほん** 越年生草本【名】〔植〕**にねんせいさうほん**(二年生草本)に同じ。

**をつ-の-さき** 尾津崎【名】〔地〕伊勢國桑名郡尾津郷、即ち今の多度村・古濱村の地の古稱。式内の尾津神社の所在地。尾張國よりの通路に當り、古は海上に斗出して崎をなしたるべしといふ。記「尾張にただに向へる尾津の崎なる一松(ヒトツマツ)」

**をつぼ** 小壺【名】**つぼさら**(壺皿)に同じ。

**をづめ** 小づめ【名】『**つめはあつまり**(集)の轉訛ならんといふ』田舍にて、附近の村落の人人の相集まりて遊ぶことならんといふ。〔古語〕萬葉「靈江(エスバノ)のをづめに出でてまさめにも己妻(オノヅマ)すらを鏡と見つも」(「をづめ」を、萬葉集の原歌に「小集樂」の文字を用ひたるを、仙覺は、或抄に見ゆとて「をべら」と訓み、意義は、前俤と同一なるやうに記せり)

**をつふ** 雄蝶【名】一雄性の蝶。をすの蝶。(雌蝶(メテフ)に對して) 二折形(オリカタ)の一。蝶花形の、雌性の蝶に擬したる方のもの。(雌蝶に對して)

**をつ-てん** 汚點・汙點【名】一 聊かなる汚染。しみ。よごれ。 二 聊かなる惡しき事件又は品行。きず。 缺點。

**をても** 彼方面【名】『彼方面(ヲチモ)の約轉』次條を見よ。

彼方面・此面【句】「此面(コチモ)・彼面」に同じ。〔古語〕萬葉「二上(ガミ)のをてもこのもに網さしてあが待つ鷹を夢(イメ)に告げつも」

**をて** 【名】**をとり**(囮)の略。

**をて-ど** 小門【名】狹き水門(ミナト)。(大門(オホ)に對して)〔古語〕記「日向の橘の小門のあはぎが原に出でまして」



**をとか** 【名】**うおとか**を見よ。

**をと-どく** 汚瀆・汙瀆【名】一にごれるみぞ。どぶ。 二けがすこと。けがるること。

**をと-こ** 男【名】『小(ヲ)つ子(コ)の轉。小つ子の子は、**ひこ**(彦)・**むすこ**(息子)などのこに同じく、男性の意を示す』血氣さかりなる男子。青年又は壯年の男子。(少女(ヲトメ)に對して) 紀「少男、此云二烏等孤一」 二老幼に關せず、すべて男性の人。をのこ。男子。(女に對して) 三元服せる男子。一人前の男子。 四男の子、むすこ。子息。 源氏「大きおとどの御をとこの、十ばかりなる」 五鳥獸などの、男性のもの。をす。をん。 六をっと(夫)に同じ。「夫、乎字度。一云、乎度古」 落窪「中の君の御をとこの左少辨」 七まをとこ。情夫。(女に對して) 高野萬年草「娘にも疵が附く。さあ、男のある證據を出せ」 八男たる氣前のある男。氣概ある男子。丈夫。假名手本忠臣藏「天川屋の儀兵衛は男でござるぞ」 九男たる體面。男子の面目。狂言(胸突)「胸板などを折られたなどといへば、男もならぬ。そなたのを折返(カヘ)さねば、きかぬ」 十召使の男。しもべ。下男。僕。(女に對して) 十一出家せぬ男子。俗人。 著聞「豐前國の住人、太郎入道といふ者ありけり。男なりける時」 增鏡「男も、法師も、暇なく」 十二をとこぶり(男振)の略。 一代男「男もすぐれて、女の好くべき風なり」 十三なんしよく(男色)に同じ。三代男「男色……、男修行の君」

男一匹【句】たとひ賤しくとも、一人前男子として、引(ヒケ)を取らぬこと。男が立つ【句】男たる面目を全うし得る。 伊賀越道中雙六「この親仁(オヤヂ)を殺したれば、頼まれた此方(ヲナ)の男は立つ」

男じ物【句】男にてはあれども。〔古語〕萬葉「腋(ワキ)挾む兒の泣くごとに男じもの負ひみ抱(ウ)きみ」

男す【句】一夫(トヲ)を持つ。夫す。 大和「この筑紫の女、忍びて男したりけり」 二男らしく振舞ふ。男の一分が立つ。甲陽軍鑑「本人の歸れといふとて、戻りて、侍が、何方にて男せんや」



男でも杙(ヒク)でも無い『杙は、棒杙同樣に價値なき義』男子たる價値なし。女殺油地獄「お二人の葬禮に、立派な乘物に乘せうといふ氣が無ければ、男でも杙でも無い」

男になす【句】元服して、一人前の男にならしむ。 平家「汝、七歳にならば、男になして、君に參らせん」

男になる【句】一僧、俗人となる。還俗(ゲンゾク)す。 水鏡「この大師も、男になりて、頭をつつみて歸りたまひしなり」 義經記「きのふまでは空(ウ)山伏、けふはいつしか男になりて」 二元服して、一人前の男になる。(「女になる」に對して) 三歌舞伎若衆、普通の男子になる。若風俗「人より早く若衆姿を止めて、男になりしと、昔を語れば」 四女子、年老いて、月經閉止す。

男の我(ガ)には、居糞(ソク)を垂れる【句】男子たる者は、善・惡共に飽くまで意氣地を貫くべし。〔諺語〕

男の切【句】男子たる一人。相當に男の面目を立つる者。 用明天皇職人鑑「軍に立ってこそ、男のきれともいふべけれ」

男の記錄【句】漢字にて書ける日記。(「女の日記」に對して) 增鏡「御門(ドモカ)・新院御對面の儀式など、定めて、男の記錄に侍らんかし」

男の子【句】一むすこ。子息。 二男の子供。をのこご。男兒。 薩摩歌「銀(ネカ)持って來る男の子を養うて」

男の心と秋の空【句】「男心と秋の空」に同じ。〔諺語〕

男の魂【句】昔、刀劍を、男子の魂の宿る物としていひし語。(「女の魂」に對して)

男の中の男【句】普通以上に氣概ある男。

男の丸太(マルタ)【句】頭巾をかぶりたる男の顏の形を嘲りていふ語。 傾城禁殺氣「いつもの醫者ほん、黑き頭巾を隅折にかづき、男の丸太見るやうな顏つき」

男の目には絲を引け、女の目には鈴を張れ【句】男の目は、きりりと眞直なるがよく、女の目は、ぱっちりと明かなるがよし。〔諺語〕

男は氣で食へ【句】男子は、意氣によりて世に立つ。〔諺語〕

男は氣で持て【句】前條に同じ。〔諺語〕

男は辭儀に餘れ【句】男子は、努めて謙遜にせよ。(「女は會釋に餘れ」に對して)〔諺語〕 狂言「千切木」「とかく男は、辭儀に餘れといふ事がある」

男は、閾を跨げば、七人の敵あり【句】「男子、家を出づれば、七人の敵あり」に同じ。〔諺語〕

男は七人あてがひひ【句】男は、七人までは、妻を持ちても可なり。〔諺語〕 世間用心記「男は七人あてがひと云はんか」

男は裸百貫【句】男子は、無一物なりとも、働きて富を作ることを得。〔諺語〕 五人女「男は裸百貫、たとへてらしても世は渡る」

男は松、女子(ヲナ)は藤【句】次條に同じ。〔諺語〕 薩摩歌「男は松、女子は藤と、元から譬にあるげな」

男は松、女は藤【句】『藤の、松の木に絡まりて、花咲くに譬へていふ』男子は、女子のたより縋る者なる譬。〔諺語〕

男は妻柄(メカラ)【句】男の幸・不幸は、妻の善惡によりて分る。〔諺語〕 蒙求「男は妻柄なり。いとやんごとなきあたりに參りぬべきなめり」

男を上ぐ【句】男子たるに恥ぢぬ行爲をなして、面目を施す。「を立つ。

男を賣る【句】評判を得るために、男を拵ふ【句】情夫を持つ。 一代女「脇に男を拵へ、腹がむづかしうなりなば」

男を下ぐ【句】男子として恥づべき行爲をなし、面目を損ふ。

男を作る【句】裝ひて、男振を善く見せかく。 浮世身持談義「男を作り、衣裳ごのみして」

男を斷つ【句】女、祈願などに障ありとして、男に接することを止む。

男を立つ【句】男氣を示すを、己が任

とす。男子の面目を保つ。若風傳「危き命を惜まず、男を達てられしに」

男を磨く【句】前條に同じ。大悲千錄本「さすがは男を磨く神田の與吉」

男を持つ【句】夫を設く。情夫を持つ。世間娘氣質「異なる病も、男持たせば、大方は直るものと」

**をどこ** 小床【名】『を(小)は接頭語』とこ(床)に同じ。萬葉「麻苧(アサ)らを麻笥(ケ)にふすさに績まずとも明日來(キ)せざめやいざせ小床に」

**をどこあふぎ** 男扇【名】男持の扇。(女扇に對して)

**をどこあるじ** 男主人【名】一家の主人たる男。をとこしゆう。亭主。(女主人に對して) 宇治「男あるじは無くて、妻ばかりありけるが」

**をどこいぬ** 男犬【名】をすの犬。(女犬に對して)

**をどこうま** 男馬【名】をうま(牡馬)に同じ。(女馬に對して)

**をどこえらみ** 男選【名】多くの男の中より、己の好む者を選ぶこと。日本武尊吾妻鑑「男選に年長けて、今日まで親のふところ娘」

**をどこおび** 男帶【名】男の用ふる角帶(カクヒ)。明治の中頃より兵兒帶(ヘコヒ)をも、一般に用ふ。(女帶に對して)

**をどこおもひ** 男思【名】をつとおもひ(夫思)に同じ。淀鯉出世瀧徳「男思の女房」

**をどこおや** 男親【名】ちちおや(父親)に同じ。(女親に對して) 狹衣「男親に從ひたるぞよ」

**をどこかうぶり** 男冠【名】男の敍位。(女かうぶりに對して)「古語」榮花「一品にならせ給ひて、男かうぶり・女かうぶり、つづきなどえさせ給ふ」

**をどこかげ** 男影【名】男の姿。「古語」蜻蛉「そればかりを、男かげには見給ひつつ」

**をどこがさ** 男笠【名】男の用ふる笠。(女笠に對して)

**をどこかざり** 男飾【名】男子の、盛裝に用ふるもの。天の網島「男かざりの小袖まで、さらへて、物數十五色」

**をどこがた** 男形【名】芝居にて、專ら男子の姿にいでたつこと、又その俳優。をとこやく。(女形に對して)

**をどこかた** 男方【名】男と女とに組を分けたる場合の、男の方。(女方に對して) 源氏「御前などにても、男がたの遊に交りなどして」 ㊁夫の緣家。(女方に對して)

**をどこかたひら** 男帷子【名】男の著用する帷子。(女帷子に對して) 三代女「男帷子・羽織」

**をどこかな** 男假名・男假字【名】『をとこもじ(男文)㊁參照』漢字の音を假りて、假名としたるもの。まんえふがな。(女假名に對して)

**をどこがはら** 男瓦【名】をがはら(牡瓦)に同じ。(女瓦に對して)

**をどこがほ** 男顏【名】㊀男の顏。(女顏に對して) ㊁女なれども、男の如くに見ゆる顏つき。(女顏に對して) 俳諧新選「太祇「春駒や男顏なる女の子」

**をどこがみ** 男神【名】をがみ(男神)に同じ。女神(ガミ)に對して)

**をどこがみゆひ** 男髮結【名】昔、男にて男の髻を結ふを業とせし人。(女髮結に對して)

**をどこがら** 男柄【名】㊀男としての人がら。 曾我「禮儀正しく、男がら尋常なりければ」 ㊁布帛の、男の著用に適するがら。(女柄に對して)

**をどこぎ** 男氣【名】男らしき氣性。男だての心。俠氣。(女氣に對して) 薩摩歌「源五は男氣、うち笑ひ」

**をどこぎみ** 男君【名】㊀をとこ(男)㊃の敬稱。貴族の子息。(女君に對して) 大鏡「その御腹に、男君三人、女君のかがやく如くなる、おはせし」 ㊁をとこ(男)㊄の敬稱。(女君に對して) 落窪「男君の臥したまへる程に申す」

**をどこぎんだち** 男公達【名】前條㊀の複數。きんだち。(女公達に對して) 空穗「男きんだち、著き並(ナ)みたまひぬ」

**をどこきやく** 男客【名】男の客人。をとこまらうど。(女客に對して)

**をどこぎらひ** 男嫌【名】㊀女の、男と接することを嫌ふこと、又その女。(男好に對して) ㊁女が、男に對して選擇(ヱラビ)をすること。一代女「男嫌をするは、人もてはやして流行る時こそ」

**をどこぎれ** 男切【名】男のはしくれ。男の片はし。をとこけ。をとこっきれ。(女切に對して) 一代女「勝手見れども、男ぎれの無いこそうたてけれ」

**をどこぐさ** 男草【名】〔植〕はぎ(萩)㊀の異稱。「古語」藏玉集「男草。萩 忘られずまた音づれよ男ぐさ風のたよりの絶えぬなさけに」

**をどこくさし** 男臭し【形一】㊀男の用ひ馴らしたる物に、男特有の臭染みてあり。(女臭しに對して) 曠野(香雨)「男臭き羽織を星のたむけかな」 ㊁女にてありながら、男めきてあり。(女臭しに對して)

**をどこぐじ** 男公事【名】男の訴へ出でたる公事。(女公事に對して) 沙石集「女公事ばかりして、男公事は許され」

**をどこくび** 男首【名】男の首。(女首に對して) 雪女五紋羽子板「命かぎり、腕かぎり、三つ四つの男首」

**をどこぐるひ** 男狂【名】女が、情夫などと戲るること。(女狂に對して) 五人女「奥樣に、男ぐるひなどしたと思はれましてはいかがと出て行く」

**をどこぐるま** 男車【名】男の乘る牛車(ギツ)。(女車に對して) 落窪「男車のまじらひも、疎くはあらで」

**をどこけ** 男氣【名】男のけはひ。をとこきれ。をとこっけ。(女氣に對して) 浦島年代記「男氣の無い所と知って」

**をどこけいこや** 男藝者【名】太鼓持㊁の類。昔、遊興の席にて、絃歌の技を爲したり。(女藝者に對して) 鹽旅漫錄「祇園は、べして率頭(ソツイ)もち行はれず、又、男藝者といふ者なし。皆、悉く幇間なり」

**をどこげいせい** 男傾城【名】俳優などの、密かに一婬を、女に賣るもの。をとこちごく。 千紅萬紫「ある人、役者を、男傾城と名づけて、老年の樂みとせり」

**をどこげた** 男下駄【名】男の穿く下駄。(女下駄に對して)

**をどこごころ** 男心【名】㊀男子の心。をとこしき心。(女心に對して) ㊁男の浮氣(キウ)なる心。天の網島「外(ホカ)には、はつと聞驚く、思ひがけなき男心」

男心有り【句】次條に同じ。(女心有り」に對して) 五人女「など、りんが男心はあるまじきと思ひしに、我先に、いかなる人か物せしと」

男心を知る【句】女、男と關係を結びたる經驗あり。一代女「未だ男心を知ったる子ではなし。まるでござる」

男心と秋の空【句】變りやすく賴まれぬ物を並べ擧げていふ語。「諺語」

**をどこごんぜつ** 男ごんぜつ【名】〔植〕こしあぶらのき(金漆樹)に同じ。

**をどここんりやう** 男今良【名】男の今良。(女今良に對して)

**をどこごろし** 男殺【名】㊀男を殺すこと。(女殺に對して) ㊁女の、男子をして、死をも辭せざらしむるほどに美貌なること、又その女。(女殺に對して)

**をどこごゑ** 男聲【名】㊀男の物言ふ聲。(女聲に對して) 今昔「東人(アヅマ)の娘どもの物見るにやあらんと思へども、聲・けはひ、大きにて男聲なり」 ㊁女の聲の、男のに似たるもの。(女聲に對して)

**をどこざか** 男坂【名】坂の二つある場合の、勾配急なる方。(女坂に對して)

**をどこざかり** 男盛【名】男子の、血氣最もさかんなる年齡、又その人。(女盛に對して) 紀「既壯、ヲトコザカリニシテ」 一代女「男ざかりの座敷へは」

**をどこさじき** 男棧敷【名】男のみ居るべき棧敷。(女棧敷に對して) 可笑記「舞臺……、左は男棧敷、右の方は女中と定め」

**をどこざしき** 男座敷【名】男のみ居る座敷。 二代男「男座敷を取持つも、馴るれば、固うも思はず」

**をどこさび** 男さび【名】『接尾語のさびを見よ』ますます男らしく勇氣の出づること。(少女(ヲトメ)さびに對して)「古語」

萬葉「ますらをの男さびすと劍太刀(ツルギ)腰に取りはき」

**をとこ-しばゐ** 男芝居【名】男役者のする芝居。(女芝居に對して)

**をとこ-じまん** 男自慢【名】㊀男が、己の腕前・容貌などを自慢すること。(女自慢に對して) 三代男「男自慢に惚れられて」 ㊁女が、己の夫を譽むること。

**をとこ-じむ** 男染む【動四自】男らしくなる。最明寺百人上臈「男じみたる摺足」

**をとこ-じ-もの** 男自物【句】をとこ(男)の條下を見よ。

**をとこ-しゆ** 男衆【名】次條に同じ。

**をとこ-しゆう** 男衆【名】㊀をとこ(男)の複數。(女子(ヲナ)衆に對して) ㊁をとこ(男)㊂の複數。(女子(ヲナ)衆に對して)

**をとこ-しゆう** 男主【名】をとこあるじ(男主人)に同じ。 枕「人の家の男しゆう」

**をとこ-じよたい** 男所帶・男世帶【名】男のみが、寄りあひて、家を構ふること。をとこずまひ。(女所帶に對して)

**をとこ-すがた** 男姿【名】㊀男の姿。をとこつき。をとこぶり。(女姿に對して) 三代男「すぐれたる男姿」 ㊁女の姿の、男に似たるもの。(女姿に對して)

**をとこ-すき** 男好【名】㊀女の、色めきて男を好むこと、又その女。多情の女。(女好に對して) ㊁男のすき好むこと。男の嗜好に適すること。(女ずきに對して)

**をとこ-すはう** 男蘇枋【名】〔植〕にんじんぼく(人參木)㊀に同じ。

**をとこ-ずまひ** 男住【名】男のみにて住ふこと、又その家。をとこじよたい。 一代男「男ずまひの宿」

**をとこ-ずみ** 男住【名】前條に同じ。 大鏡「北の方もおはしまさざりければ、男ずみにて」

**をとこ-ぜたい** 男世帶【名】をとこじよたい(男所帶)の訛。 五人女「男世帶も氣散じなるものなるが」

**をとこ-たい** 男體【名】男らしき姿。

**をとこ-だう** 男道【名】男たる體面を全うする道。丈夫の取るべき道。我衣「男道の强を表にして、義を守り、節を失はず」

**をとこ-だうか** 男蹈歌【名】たうか(蹈歌)㊀を見よ。 源氏「男蹈歌あるべければ」

**をとこ-だて** 男立【名】『だて(立)は接尾語』男の意氣地を見せて振舞ふこと。 丹波與作「やい、男だては置いてくれ」

**をとこ-だて** 男達・男伊達【名】『達・伊達は假借の文字』義に富みて、男子の面目を重んずること。强きを挫き、弱きを扶けて、俠氣あること、又その人。任俠。俠客。まちやっこ。 元亨間記「御旗本の內、男達といふ者出で」

**をとこ-だてら** 男だてら【名】『だてらは接尾語』男たるに似合はず振舞ふこと。(女だてらに對して)

**をとこ-だんす** 男簞笥【名】男の用ふる衣裳簞笥。女のは、重(カサ)簞笥なれども、これは、一棹にて、四つの抽出(ヒキシ)あり。

**をとこ-だより** 男便【名】男よりのおとづれ。男よりの音信。

**をとこ-ぢごく** 男地獄【名】『ぢごく(地獄)㊀を見よ』をとこげいせい(男傾城)を一層卑めていふ語。

**をとこ-づか** 男塚【名】男の死骸を埋めたる塚。(女塚に對して) 謠曲「女郎花」「これなるは男塚、又、此方(コナ)なるは女塚」

**をとこ-づかひ** 男便【名】古、陰曆四月上の申の日、山城國平野・春日の祭に遣されし勅使。(女使に對して) 拾遺 始めて、平野祭に男づかひ立ちし時」

**をとこ-つき** 男付【名】をとこすがた(男姿)に同じ。(女付に對して) 若鳳奮白蠻(シビ)

**をとこ-っ-きれ** 男切【名】をとこぎれ(男切)の音便。(女っきれに對して)

**をとこ-づく** 男盡【名】『づく(盡)は接尾語』男の本分を缺かじとすること。男子の面目にかけて行ふこと。 曾根崎心中「男づくで貸したぞよ」

**をとこ-っ-け** 男氣【名】をとこけ(男氣)の音便。

**をとこ-つ-ぷり** 男振【名】をとこぶり(男「振」)の訛。

**をとこ-づれ** 男連【名】男のみにて連立つこと、又その人人。(女連に對して)

**をとこ-で** 男手【名】㊀をとこもじ(男文字)㊁に同じ。(女手に對して)〔古語〕 空穗「男手、放ち書きて、同じ文字を、さまざまに變へて書けり」 ㊁女のすべき業を、男がすること。(女手に對して)

**をとこ-でたち** 男出立【名】男のいでたち。男の衣裳。(女出立に對して) 井筒業平通「男出立の姿」

**をとこ-な** 男名【名】えぼしな(烏帽子名)に同じ。 醒睡笑「この松千代は、何とぞ男名を附けてたび候へ」

**をとこ-なき** 男泣【名】男は泣くこと稀なるに、感情極まりて、泣くこと。 五人女「五兵衛……、男泣にどよめば」

**をとこ-なづな** 男薺【名】〔植〕いぬがらし(犬芥)に同じ。

**をとこ-にくみ** 男憎【名】男を憎み嫌ふこと。 世間娘氣質「娘は、芝居に思ひ入り、相手の男にくみなれば」

**をとこ-ぬすびと** 男盜人【名】男を盜み取ること。 嫗山姥「男盜人・生(キ)傾城」

**をとこ-ねこ** 男猫【名】をねこ(牡猫)に同じ。(女猫に對して)

**をとこ-のぞみ** 男望【名】美貌の男を夫に迎へんとすること、又その女。 浮世風呂「私の姉が、……、男望でございましてね」

**をとこ-ばおり** 男羽織【名】男の著る羽織。

**をとこ-ばしより** 男端折【名】男らしく高くまくり上げて端折ること。 續膝栗毛「男ばしよりに引っばしよって駈出して」

**をとこ-ばしら** 男柱【名】橋・階(キザ)などの端の、大なる柱。 散木「きざはしの男柱」 平家「宇治橋の男柱を、小楯に取って」

**をとこ-ばら** 牡荊子【名】〔植〕にんじんぼく(人參木)㊀に同じ。 延喜式「牡荊子、乎止古波良」

**をとこ-はらから** 男腹【名】男兒を多く生むこと。(女腹に對して) 「女。

**をとこ-びいきだい** 男同胞【名】きやうだい(兄弟)㊀に同じ。 源氏「男はらからはとて、近くも寄せぬに、まして、いかでか、君たちには御覽ぜさせん」

**をとこ-びし** 男菱・男菱【名】〔植〕おにびし(鬼菱)に同じ。

**をとこ-ひじり** 男聖【名】『をとこ(男)㊁を見よ』出家せざれども、聖僧の如き行ある男。妻帶せぬ男。 盛衰記「今は、男聖して、二人の者を育てんずれば」

**をとこ-ひでり** 男日照・男旱【名】女の意に適する男の乏しきこと。(女日照に對して) 一代女「この廣き都の町に、男日照はせまじ」

**をとこ-ぶ** 男ぶ【動上二自】男らしくなる。(女ぶに對して)〔古語〕

**をとこ-ぶみ** 男文【名】男の書きたる書狀。(女文に對して) 三代男「百二と番附したる男文」

**をとこ-ぶり** 男振【名】をとこすがた(男姿)に同じ。 五人女「女の好ける男振」

**をとこ-ぶる** 男振る【動四自】女が、氣强く、男めきて振舞ふ。 一代女「男ぶる程の女郎呼べ」

**をとこ-へし** 男郎花【名】〔植〕敗醬(ヲミナ)科に屬する多年生の草。高さ四五尺、莖にも、葉にも、毛あり。葉は對生し、羽狀に分裂す。白色の小花、聚繖花序に排列して開く。山野に自生す。おほつち。おほつち。おほつな。おほどち。おほどちな。をとこめし。(女郎花(ヲミナ)に對して)

**をとこ-へびいちご** 男蛇苺【名】〔植〕をへびいちご(男蛇苺)に同じ。

**をとこ-べや** 男部屋【名】下男の部屋。(女部屋に對して) 續猿蓑俗水「餅搗や火を掻いて行く男部屋」 「に同じ。

**をとこ-ぼし** 男星【名】だんせい(男星)㊀

**をとこ-まさり** 男勝【名】女にして、男にもまさるほどの、氣性あること、又その女。女丈夫。

**をとこ-まつ** 男松【名】〔植〕をまつ(男松)に同じ。 續俳家奇人談(不日)「秀てるや雪の朝や男松」

**をとこ-まひ** 男舞【名】㊀女が、男の姿をなして演ずる舞。鳥羽天皇の御代に、白拍子の創めしものといふ。 平家「始は、水

干に立烏帽子、白鞘巻をさいて舞ひければ、男舞とぞ申しける」 ㊁能樂にて、長絹(ケンナウ)・素袍(スハウ)・直垂(ヒタレ)・法被(ヒッピ)などを著たる、現在の武將・武士、又は、篠懸(スズ)を著けたる山伏などの、直面(ヒタメン)のまま、太鼓を用ひずに演ずる舞。「小督(コガ)」・「七騎落」・「安宅(アタカ)」などの曲にあり。 ㊂歌舞伎にて、男の演ずる舞。

**をとこ-まへ** 男前【名】**をとこぶり**(男振)に同じ。

**をとこ-まゆ** 男眉【名】女が、男の如く裝ふ作眉。 雪女五枚羽子板「小枕捨てて、丈長(ナガ)も、捻元結(トヨリモ)に大髻(オホホク)、眉の引黛(ヒキ)も、男眉、鐵漿(クロロ)落す磨砂」

**をとこ-まらうど** 男客人【名】男の客。(女客人に對して)中務集「男まらうど來れり」

**をとこ-みこ** 男御子【名】男のみこ。皇子。をのこみこ。をとこみや。をのこみや。(女御子に對して) 榮花「男御子生れたまへり」 增鏡「この御腹にも、男みこおはします」

**をとこ-みこ** 男神子【名】男の神子(ミコ)。謠曲(歌占)「男御子の來り候が」

**をとこ-みや** 男宮【名】**をとこみこ**(男御子)に同じ。(女宮に對して) 源氏「男宮おはします程なりけり」

**をとこ-みやうが** 男冥加【名】男子に生れたる添さ。 後萬載「ふき自在ならぬ女子の身の上に、男みやうがのあらせ給へや」

**をとこ-みやうり** 男冥利【名】前條に同じ。 博多小女郎浪枕「男冥利・商(アナキ)冥利、虛言(コキヨ)ござらぬ」

**をとこ-むき** 男向【名】男の使用に適すること、又その品。(女向に對して)

**をとこ-むすび** 男結【名】諸結(ムスビ)の一。右の端を、左の下にまはし、又、右に返して作りたる輪に、左の端をまはして、引き通せるもの。垣・矢來(ヒヤラ)などに用ふ。(女結に對して)

**をとこ-めかけ** 男妾【名】男子にして、婦人に雇はれ、寢間の伽をするもの。だんせふ。 「(男郎花)に同じ。

**をとこ-めし** 男郎花【名】〔植〕**をとこへし**



**をとこ-めん** 男面・男假面【名】男の顏にかたどりたる假面。(女面に對して)

**をとこ-もじ** 男文字【名】㊀古は、男は、漢字を主として用ひしよりいふ。**をとこがな**(男假名)參照』漢字。まりいふ。をとこで。(女文字に對して) 土佐「事の心を、男文字に、さまを書き出して」 曾我會稽山「男文字に、和訓を附け」 ㊁男の筆跡。(女文字に對して)

**をとこ-もち** 男持【名】持物の、男の持つに適せること、又その品。(女持に對して)

**をとこ-もやう** 男模樣【名】男むきの模樣。(女模樣に對して) 三代男「男模樣の古衣」

**をとこ-やく** 男役【名】㊀男の務むべき役。(女役に對して) ㊁男としての面目の立つ役。ををしき役。 ㊂**をとこがた**(男形)に同じ。(女役に對して)

**をとこ-やくしや** 男役者【名】男の役者。男優。(女役者に對して)

**をとこ-やま** 男山【名】㊀或山を人に擬へ、男性と見なしていふ語。(女山(ヤマ)に對して) ㊁**やうざん**(陽山)に同じ。(女山に對して) ㊂岩代國會津より產する酒。 ㊃〔地〕山城國綴喜(キツ)郡の北部にある山。山脈、南に走りて、洞峠(ホラガ)・甘南備(カンナビ)山となり、大和國生駒(イコマ)山に連なり、京師の西關を阨す。麓より頂上まで十五町。頂上に石清水(イハシミ)八幡あり。別稱、鳩の峯・八幡(ヤハ)山・香爐山。 雄德山・丈夫山」 古今「今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを」

**をとこやま-じんじや** 男山神社【名】次條に同じ。

**をとこやまはちまんぐう** 男山八幡宮【名】山城國綴喜(キツ)郡八幡(ヤハ)町の男山に鎭座せる官幣大社。祭神は應仁天皇・神功皇后・玉依(ヨリ)姫。貞觀元年、僧行敎の、宇佐八幡宮を勸請せし所。歷代の崇敬厚く、伊勢神宮と併せて、二社宗廟の稱あり。又、賀茂神社と併せて、三社の名あり。東門より坂路七八町の下、攝社石清水の在る所に、清泉あるによりて、石清水八



幡宮とも稱せしが、大正七年、專ら本稱を用ふることに改められたり。毎年三月中の午の日に行ふ。石清水臨時祭は、加茂祭を北祭と呼びしに對して、南祭の稱ありたり。

**をとこやま-しゆご** 男山守護【名】鎌倉幕府の職制の一。前條の警衛を掌りしもの。後、石清水八幡宮奉行これに代れり。

**をとこ-やまめ** 男鰥【名】**をとこやもめ**(男鰥)に同じ。 字鏡集「鰥、ヲトコヤマメ・ヒトリウド」

**をとこやまやき** 男山燒【名】紀伊國有田郡廣(ヒロ)莊の男山より燒きて出す陶器。

**をとこ-やもめ** 男鰥・鰥【名】**やもを**(鰥夫)に同じ。(女寡(ヤンモメ)に對して) 字鏡「鰥・鰥、男也毛女」

男鰥に蛆が沸く【句】男鰥は、身邊の世話する者なき故、むさくろし。〔女寡(ヤンモメ)に花が咲く」に對して〕〔諺語〕

男鰥に雜魚(ザコ)たかる【句】前條に同じ。〔諺語〕

**をとこ-ゆ** 男湯【名】錢湯にて、男の入浴する方の湯。(女湯に對して)

**をとこ-よばはり** 男呼【名】男の面目にかけても負けじと、言ひ張ること。 壽の門松「や、生臭い男よばはり、おけ、おけ」

**をとこ-よもぎ** 男艾・牡蒿【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺。葉は互生、楔形、上部に缺刻あり。夏・秋の交、艾のに似て、小き花を著く。山野に自生す。からよもぎ。ははけぐさ。はまな。

**をとこ-らし** 男らし【形一】㊀男の男たるべき氣象を備へてあり。ををし。(女らしに對して) ㊁女なれども、姿又は性質、男に似たり。(女らしに對して)

**をとこ-ろくしやく** 男六尺・男陸尺【名】男の六尺。(女六尺に對して)

**をとこ-ゑ** 男繪【名】男子の姿をかきたる繪。(女繪に對して) 〔古語〕 榮花「男繪など、繪師はづかしう書かせたまふ」

**をとこ-をさと** 男男【名】男と男との間がら。男どうし。 重井筒「男の恥よりも、隱しても隱したい女どうしに、恥を見せ」



**をとこ-をさこし** 男男し【形二】**をさし**(雄雄し)に同じ。 四季物語「廳の下部の、をとこをとこしき裝(ヨソヒ)」

**を-どし** 縅・威【名】『緒通(ホドシ)の略なりとも、又嚇(ヒ)す意にて、威の字を用ふるは、その證との說あり。然らば、**おの**の假名なり』縅すこと、卽ち、鎧の札(サネ)を、絲又は細く截ちたる革・絹などにて綴ること、又その絲・革・絹などの色目。その絲・革・絹を、縅毛(ガミ)又は單に毛と呼び、縅毛の種類によりて、絲縅・革縅・綾縅・練貫(スネキ)縅などの名あり。又、縅す方法に、荒目(アラ)・大荒目・毛引(ケビ)・素懸(ケカ)・敗目(ネ)などの種類あり。色目によりて、緋縅・黑絲縅・黑革縅・卯花(ウノハナ)縅・澤瀉(オモカ)縅・肩白(シロ)・櫨匂(ハジニ)など、種種の名目あり。 續陸奥の細道「小華山人」「卯の花やをどしもゆゆし女武者」

**をどし-ぎぬ** 縅衣【名】鎧の裏面を包む布帛又は革。

**をどし-げ** 縅毛・威毛【名】**をどし**(縅)を見よ。 太平記「威毛こそよくも候はねども」

**をどし-たつ** 縅立つ・威立つ【動下二他】立派に縅す。 平治「威し立てたる鎧」

**を-どす** 縅す・威す【動四他】鎧の札(サネ)を、絲又は、細く截ちたる革・絹などにて綴る。 平治「惡と鎧を威し、……、袖には、藤の花の咲き掛りたるを威せるなり」

**をと-つはたて** 彼方つ鰭手【名】『**をとはきち**(彼方)の轉』先の方に差し出でてある鰭手。 〔古語〕 記「大宮のをとつはた手隅(スミ)傾(カタブ)けり」

**をと-つ-ひ** 一昨日【名】『遠(ヲト)つ日の轉』一日隔たりてある前の日。をとひ。去去日。いさくじつ。 萬葉「菫鴨のすだくふる江にをとつひも昨日(フキ)もありつつ」

**をと-とし** 一昨年【名】『遠(ヲト)年の轉』一年隔たりてある前の年。前前年。去去年。いさくねん。 空穗「をととしの秋」

**をと-と-ひ** 一昨日【名】**をとつひ**(一昨日)の轉。 後撰「をとひなん歸りまうで來(コ)しかど」 一昨日お出で【句】次條に同じ。

一昨日來(こ)い【句】『既に過ぎ去りたる一昨日の、更に來るは、不可能の事なるよりいふ』今日限り、汝に用は無しとて、逐ひ拂ふ時にいふ語。

**をとーひめ** 少姫【名】をとめ(少女)に同じ。

**をどみ** 淀・澱【名】よどみ(淀)に同じ。祝詞「をどみの水」

**をどむ** 淀む・澱む【動四自】よどむ(淀む)

**をーとーめ** 少女・乙女【名】『小(ヲ)っ女(ー)の轉。乙はおつの假名なれば、乙女と書くは、實は正しからず』一年若く、盛りなる女。むすめ。せうぢよ。(男一に對して)二未婚の少女。きむすめ。[處女・未通女]

**をとーめ** 夫妻・夫婦【名】めをと(夫妻)に同じ。[古語] 紀「夫婦、ヲトメ」

**をーどめ** 緒止・緒留【名】一とじめ(緒締)に同じ。二りんろく(林麓)に同じ。

**をとめーぐさ** 少女草・乙女草【名】[植]『乙の字につきては、をとめ(少女)を見よ』きく(菊)一に同じ。

**をとめーこ** 少女子・乙女子【名】『乙の字につきては、をとめ(少女)を見よ』一をとめ(少女)に同じ。萬葉「人の親のをとめ子君が來(こ)ねばかなしも」二みこ(神子)三に同じ。紐鐙編卯月紅葉「拜み納むる袖神樂、乙女子ならぬ御子町(ごちまち)に」

**をとめーさう** 少女草・乙女草【名】[植]『乙の字につきては、をとめ(少女)を見よ』一きく(菊)一に同じ。二やはたさう(八幡草)に同じ。

**をとめーさび** 少女さび【名】ますます少女らしくなること。(男さびに對して)[古語] 萬葉「少女らが少女さびすとから玉を袂に巻かし」

**をとめーたうげ** 乙女峠【名】[地]『乙の字につきては、をとめ(少女)を見よ』相摸國と駿河國との界にある峠。箱根の旱川を溯り、この峠を越ゆれば、駿河國御殿場(ごてんば)に出づ。箱根・足柄二道の中間なる間道にして、德川時代には、小田原藩より、仙石原(せんごくはら)に番所を置きて警固したり。

**をとめーづか** 處女塚【名】もがづか(求塚)を見よ。

**をとめーのーかしら** 少女頭・乙女頭【名】[植]『乙の字につきては、をとめ(少女)を見よ』かやものり(茅藻海苔)に同じ。

**をとめーばな** 少女花・乙女花【名】[植]『乙の字につきては、をとめ(少女)を見よ』秋の草の異稱なりといふ。

**をとめーまつばら** 童子女松原【名】[地]古、常陸國鹿島郡東下(しもつけ)村にありし松原。古、那賀寒田郎子(なかのさむたのいらつこ)といふ少男と、海上安是嬢子(うなかみのやすのいらつめ)といふ少女と相愛し、嬢會(かが)の夜、その場を避け、この松原に來りて、歡語盡きず、夜明けしかば、人の見んことを愧ぢて、化して松樹となり、男は奈美(なみ)松といひ、女は古津(こつ)松といひし由の傳說、常陸風土記に見えて、松原の名、これに本づくといふ。

**をとめーみこ** 少女神子・乙女巫【名】『乙の字につきては、をとめ(少女)を見よ』をとめこ(少女子)一に同じ。日本武尊吾妻鑑「天照る神の少女巫女」

**をとめらーが** 少女等が【枕】思ふ少女の、袖を振りて、われを招くといふ意より、そでふるやま(袖振山)にかけていふ。萬葉「をとめらが袖振山の瑞垣(みづがき)の久しき時ゆ思ひきわれは」

**をとめらーに** 少女等に【枕】少女たちに往き會ふといふ意にて、ゆきあひ(行逢)にかけていふ。萬葉「をとめらにゆきあひの早稻(せ)を苅る時になりにけらしも萩の花咲く」

**をどーやき** 尾戸燒・尾土燒【名】土佐國土佐郡尾戸より燒きて出す陶器。承應二年、藩主山内忠義、大阪高津(たかつ)の陶工久野正伯(野野村仁清の門人)を召して造らしめしに始まる。その松竹梅を描ける茶器は、茶家の珍重する所なり。

**をーとり** 雄鳥【名】をすの鳥。をんどり。(雌鳥(めとり)に對して) 和名「雄、乎度利」

**をーとり** 飛・媒鳥【名】『招(をき)鳥の略』一他の鳥を捕ふる誘とする鳥。塵藝「雲雀のほし鳥、これらを生けて、をとりに捕らん」二他を誘ふためのをとり。



**をどり** 踊躍【名】一をどること。飛びはねること。[躍・跳] 二やや烈しく搖れ動くこと。おちつかぬこと。[躍] 三俗曲に合はせて、足を踏み鳴らしなどして舞ふもの。舞蹈。舞踊。四ひよめき(顚門)に同じ。[門・囟門・顚門] 五金の貸借にて、利息の重なること。返濟期が月の途中にある時、切り替へて、二箇月分の利息を拂ふこと。

踊を懸く【句】懸踊(かけをど)りを爲す。

**をどりーあがる** 躍上る・跳上る【動四自】とびあがる。はねあがる。飛び立つ。平家「踊りあがり、踊りあがりてぞ申しける」

**をどりーあし** 躍足【名】馬の、足つき善からずして、躍るやうに見ゆるもの。

**をどりーいしやう** 踊衣裳【名】踊三をなす時に著る衣裳。

**をどりーうた** 踊歌・踊唄【名】踊りながら歌ふ俗謠。踊三に伴なふ唄。

**をどりーかかる** 躍懸る【動四自】躍り上りながら飛びかかる。字治「躍りかかりて喰ひ殺す」

**をどりーがらす** 踊烏・踊烏【名】踊三に馴れ、又は精通せる人。

**をどりーぐさ** 踊草・踊草・野之麻・續斷【名】[植]をどりさう(踊子草)に同じ。

**をどりーこ** 踊子・踊子【名】一踊三を演ずる少女。まひこ。をどりっこ。舞妓。二寶曆以前に、江戸にて、宴席に招かれ、踊三をなしなどして、酒興を添へし女。後には、密淫竇をなすに至り、禁止せられたれども、遂に、後世の町藝者の基をなせり。一代男「未だ踊子・舞子といふ者を見ず」三をざり(踊)四に同じ。四[動]ごちやう(泥鰌)の異稱。[もと僧侶の隱語] 丹波奥作「妓(ぎ)が餅、一口・二口、みな口どぢやう、をどりこえ、坂へ越すのも、賽次第」五[動]ぼうふり(棒振)三を云ふ。[羽前國の方言]

**をどりこえーもの** 躍越物【名】高き物を躍り越ゆる遊戯。異本曾我「馬上、徒立(かち)・打物、腕取(とりで)、をどりこえ物は、武士のしわざなり」

**をどりこ・さう** 踊子草・踊子草・野芝麻・續斷【名】[植]脣形科に屬する多年生の草。莖は方柱形にて、高さ一二尺。葉は對生し、鋭頂の卵形又は心臟形にて、粗鋸齒あり。春・夏の交、莖頂附近の葉腋に、白色又は帶紅白色の脣形花、叢り開く。原野に自生す。こもそうぐさ。こもそうばな。はみ。をどりぐさ。

(うさこりどを)

**をどりこ・じる** 踊子汁・踊子汁【名】ごちやうじる(泥鰌汁)に同じ。

**をどりこ・てふ** 踊子蝶・踊子蝶【名】[動]ひどりむし(火取蟲)に同じ。

**をどりーことば** 踊言葉・踊言葉・躍言葉【名】物事の狀態を、同音の語を二度繰り返す形にてあらはす語。即ち貌詞の一部にて、「ざらざら」・「ばちばち」の類。

**をどりーこみ** 踊込・踊込・躍込【名】おしこみ。强盜。

**をどりーこむ** 踊込む・踊込む【動四自】踊三をしながら、家の内に入込む。

**をどりーこむ** 躍込む【動四自】一躍りて勢よく、内に入る。あばれこむ。闖入す。二身をふるはせて、水中に飛び入る。

**をどりーごゑ** 踊聲・踊聲【名】踊三をしながら歌ふ聲。俳諧新選銀獅「薄月や門に稚き踊聲」

**をどりーじ** 踊字・踊字・躍字【名】熟語にて、同じ文字を重ねて記すもの。例へば、「やや」・「かさねがさね」・「滾滾」・「明明白白」など。略して「やゝ」・「滾々」・「滾〻」・「明々白々」・「明〻白〻」など記すを、常とす。おくりじ。かさねじ。疊字。

**をどりーだいこ** 踊太鼓・踊太鼓【名】踊三に合はせて打ち鳴らす太鼓、又その音。五人女「踊太鼓、戀きわたりて」

**をどりーだいもく** 踊題目・踊題目【名】踊三に合はせて、題目を唱ふること。だいもくをどり。

**をどり-だう** 踊堂・踴堂【名】踊を演ずる堂。狂言踊堂が見たくば、北嵯峨へおぢやれの」

**をどり-つく** 躍附く【動四自】躍り上りながら飛びつく。宇治「今一丈ばかりを踊りつかで、海に落ち入りぬ」

**をどり-っこ** 踊子・踴子【名】**をどりこ**(躍子)三の音便。「人。

**をどり-て** 踊手・踴手【名】踊三をなす

**をどり-てぶり** 踊手振・踴手振【名】踊三の手振。狂言笠下「踊てぶりを見せ参らせう」

**をどり-ねんぶつ** 踊念佛・踴念佛【名】一**ねんぶつをどり**(念佛踊)を見よ。狂言宗論「一遍上人の踊念佛」二彼岸の中日に、攝津國天王寺の念佛堂にて、大和・河内の道心者集まりて、各、十徳を著、鉦に紐を附けて持ち、打ちながら、念佛すること。

**をどり-ば** 踊場・踴場【名】一踊三を演ずる場所。二(建)階段の中途の、踏板を、特に幅廣く造りて、足休とする設備。

**をどり-ば** 雄鳥羽【名】雄鳥の翼。右より左へ向けておほへりといふ。

**をどり-ばな** 踊花【名】(植)**おにのやがら**(鬼矢幹)に同じ。

**をどり-ぶ** 踊歩・踴歩【名】『踊三なる歩合(アヒ)の義』二重の利息。

**をどり-ぶし** 踊節・踴節【名】踊三の調子。踊りながら歌ふ節まはし。俳諧新選「嘯山」「題目や感に堪へたる踊節」

**をどり-ぶね** 踊船・踴船【名】花見などに、乘りて踊三をする船。「踊る姿。

**をどり-ぶり** 踊振・踴振【名】踊三のふり。

**をどり-ぼこ** 踊鉾・踴鉾・跳鉾【名】京都の祇園祭の鉾の一。尺素往來「祇園御靈會……處處跳鉾」

**をどり-やたい** 踊屋臺・踴屋臺【名】昔、祭禮に挽き巡りし、車輪の附ける屋臺。臺の上にて、踊を演じ、三味線を彈く者も同乘し、町内の各要所に止めて踊り、踊終れば、花笠を冠り、揃の浴衣を著などせる多くの若者、綱を取りて、屋臺を挽き出し、次の場處に至るまでの間、踊手は、屋臺の正面に構へたる腰掛にて休息する例なりき。

**をどり-ゆかた** 踊浴衣・踴浴衣【名】盆踊などの時に著る、揃の浴衣。丹波與作「踊子寄する笛鼓、馬も、太鼓を美しき踊浴衣の上から下まで、色めき、悅び賑へり」

**をどる** 踊る・踴る【動四自】一足を上げて跳(ハ)ぬ。飛びあがる。「躍る・跳る」二魚・鳥など、勢よく、水又は地を離れて跳ぬ。萬葉「佐保川にさ躍る千鳥夜くだちて汝(ナ)が聲聞けば寢ねがてなくに」三やや烈しく搖れ動く。おちつかず。「躍る」四踊三を演ず。舞蹈す。五踊五の利息となる。

人の踊る時は踊れ【句】「鄕(ガウ)に入っては鄕に從へ」に同じ。「諺語」

**をとるん** 【名】**おとろん**を見よ。

**をとー-をとし** 赤箭【名】(植)**おにのやがら**(鬼矢幹)に同じ。和名「赤箭、乎止乎止之、一云、加美乃夜加良」

**を-なか** 尾長【名】一尾二の長きこと。二(動)**りうきん**(琉金)に同じ。

**をなが-うじ** 尾長蛆【名】(動)**かみさげむし**(紙下蟲)に同じ。

**をなが-かも** 尾長鴨【名】(動)游禽類に屬する鳥。鴨類の一。大さ眞鴨に似、尾羽の中、中央なる二枚、著しく長く、嘴と脚とは灰色、羽色に少しく白色を交へ、風切の羽軸も白く、東西兩半球共に、極北の地方に產し、我國には、秋季渡來し、冬期に於て甚だ多く見る所なり。さぎかも。

**をなが-ざめ** 尾長鮫【名】(動)軟骨類に屬する魚。體、紡錘形にして、長さ八尺前後。背部は濃青色、腹部は灰白色を呈し、口大なれども、口吻短く、尾の上片の長さは、殆ど體長に同じ。八九月の頃、子を產む。胎生なり。なでぶか。

**をなか-ざる** 尾長猿【名】(動)尾の長き種類の猿の汎稱。尾を樹枝に纏絡して、身を垂下し得る特性あり。たうざる。

**をなが-どり** 尾長鳥【名】(動)一**ちやうびけい**(長尾雞)に同じ。「尾長雞」二**ふうてう**(風鳥)に同じ。三蕪雀類に屬する鳥。形、鵲(カサギ)に似て小く、頭上及び嘴と脚とは黑く、背は灰色、下面は白く、翼は藍色、尾も藍色にして、末端白く、甚だ長し。我國には、冬季に於て殊に多し。

**をなが-むし** 尾長蟲【名】(動)**をながうじ**(尾長蛆)を云ふ。「大阪の語」

**をなぎ-がは** 小名木川【名】(地)東京市深川區を東西に通じ、鴨田川と中川とを連絡する運河。長さ一里十町。下總國行德(ギヤウトク)との往復最も多きより、行德川の別稱あり。

**をなご** 女子【名】『をなはをみな(女)の略』一女のこと。をんなご。女兒。「京都・大阪邊の語」二**をんな**(女)一を云ふ。三**げぢよ**(下女)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

女子は惡性者(アクシヤウ)【句】女は、性質のよからぬものなり。「諺語」 俗曲 娘道成寺「どうでも、女子は惡性者」

女子は藤【句】「男は松、女子は藤」を見よ。

**をなご-あぶぎ** 女子扇【名】**をんなあふぎ**(女扇)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-うし** 女牛【名】**をんなうし**(女牛)を云ふ。「京都・大阪邊の語」 天神記「をなご牛とて、けなものや」

**をなご-おび** 女子帶【名】**をんなおび**(女帶)に同じ。「京都・大阪邊の語」 心中刃は氷の朔日「紺繻子の女子帶、五十六匁」

**をなご-ぎ** 女子氣【名】**をんなぎ**(女氣)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-ごころ** 女子心【名】**をんなごころ**(女心)一を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-ざかり** 女子盛【名】**をんなざかり**(女盛)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-しゆ** 女子衆【名】一**をなご**(女子)二の複數。「京都・大阪邊の語」 三**げぢよ**(下女)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-じよたい** 女子所帶・女子世帶【名】**をんなじよたい**(女所帶)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-ずき** 女子好【名】**をんなずき**(女好)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-だけ** 女子竹【名】(植)**をんなだけ**(女竹)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-たつ** 女子立【名】**みおし**(水押)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-だて** 女子達・女子伊達【名】**をんなだて**(女達)を云ふ。「京都・大阪邊の語」

**をなご-ていしゆ** 女子亭主【名】**をんなあるじ**(女主人)を云ふ。「京都・大阪邊の語」 心中刃は氷の朔日「女子亭主の譯よしが」

**をなご-ぶみ** 女子文【名】**をんなぶみ**(女文)を云ふ。「京都・大阪邊の語」 心中萬年草「小舌たるい女子文」

**をなご-むすび** 女子結【名】**をんなむすび**(女結)を云ふ。「京都・大阪邊の語」 小町踊「春來ては女子結か朝氷」

**をなご-らし** 女子らし【形二】**をんならし**(女らし)に同じ。「じ。

**をなさかもり** 【名】(植)**あせび**(椒木)に同

**をなっ-ぱし** 女端【名】**をんなきれ**(女切)に同じ。

**を-なは** 麻繩・亭繩【名】麻絲を綯ひて作りたる繩。をづな。**ひちをなは**參照。

**をなはけ-ばら** 女化原【名】(地)常陸國稻敢(イナバ)郡水海道(イバツカイ)芝宿の東にある原。東西四里、南北三里。昔、筑波郡栗原村の大德覺右衞門といふ者、この原にて、一美女に逢ひ、伴なひ歸りて、妻とせしが、その子、二三歲に至りし時、ふと母の面貌狐なるを見て、父に告ぐ。母恥ぢて、跡を晦ましし後、一首の歌の遺れるを見れば、「綠子の母はと問はばをなはけの原に泣く泣く臥すと答へよ」とあり、その子孫、代代、覺右衞門を名とし、原頭に小祠を建てて、その狐を祀り、女化稻荷と呼ぶとの俗說を傳ふ。近年漸く開墾に就けり。

**をなはま** 小名濱【名】(地)磐城國石城(イハキ)郡にある町、福島縣下第一の漁場。但し、灣水淺くして、碇泊に便ならず。平(ヒラ)町の東南三里餘。鐵道常磐線の湯本・泉兩驛より馬車鐵道の便あり。

**をなびそ** 【名】(植)**やくちなは**を云ふ。「攝津國の方言」

**をなぶそ** 【名】(植)前條に同じ。「播磨國

**をーなみ** 男波・雄浪【名】波だつに、こもごも高低ある中の、高き方。(女波(ヲナ)に對して)

**をなめ** 妾【名】**をむなめ**(妾)に同じ。〔古語〕

**をーなもみ** 蓁耳【名】〔菊〕菊科に屬する、一年生の草。莖は高さ四五尺、葉は卵形にして尖り、缺刻及び鋸齒を有す。花は單性・雌雄同株にして、雄花は、花軸の上部に小形の頭狀花序をなし、雌花は、全面に硬刺密生せる總苞内に隱れて、頭狀花序に排列す。花期は夏。原野に自生し、その浸出液は收斂藥に用ふ。なもみ。なみたけ。めなもみ(稀發)參照。

**をならし-へび** 尾鳴蛇・響尾蛇【名】〔動〕

**きやうびだ**(響尾蛇)に同じ。

**をなり** 養【名】煮炊(キ)のまかなひ。をなれ。〔古語〕

**をなれ** 養【名】前條に同じ。〔古語〕字鏡「養、ヲナレス・ヲナリ」

**をーに** 雄虹・虹【名】虹の、二重に現るる時の、外部の大なる方。(雌虹に對して)

**をーにひたやま** 小新田山【名】〔地〕『を(小)は接頭語』『にひたやま(新田山)』に同じ。(歌にいふ) 萬葉「白栲(トヂ)掘(ホ)ふ小新田山の守(モ)る山の末枯(ウラガレ)せなな常葉(ハヒ)にもがも」

**をにふ** 遠敷【名】〔地〕若狹國三郡の一。郡役所を雲濱(ヒンバ)村に置きたり。

**をにふじんじや** 遠敷神社【名】**わかさひこじんじや**(若狹彦神社)に同じ。

**をにふやき** 遠敷燒【名】若狹國遠敷郡三宅村より燒きて出す陶器。嘉永元年、小西藤兵衛の、伊勢の萬古燒に擬し、手づくねにて製せるに創まり、製品は、酒器・諸雜器等なり。

**をーぬ** 小野【名】**をの**(小野)に同じ。〔古語〕記「さねさし相摸(ムサガ)のをぬに燃ゆる火の火中(ホナカ)に立ちて問ひし君はも」

**をーね** 尾根【名】**を**(峰)に同じ。「一尾根は時雨るる雲か富士の雪」

**をーねこ** 男猫・牡猫【名】をすの猫。をとこねこ。(女猫(ヨメ)に對して)



**をーねぢ** 雄螺旋【名】**ねぢ**(螺旋)㊁を見よ。(雌螺旋に對して)

**をーねつ** 悪熱【名】悪寒(ヲカ)の後に發する熱氣。

**をの** 斧【名】鉞(カリザ)に似て小く、木を伐るに用ふる具。よき。

斧の柄朽つ【句】『述異記に「晉王質伐レ木、至二信安郡石室山一、見二數童子圍レ碁、與二質一物一。如二棗核一。含レ之不レ飢。局未レ終、斧柯爛盡。既歸、無二復時人一」とあるに本づく』仙郷に暫時の滯留と思ひし間に、隔世の長年月を經過す。古今、古里は見し如(ヒ)もあらず斧の柄の朽ちし處ぞ戀しかりける」

斧の柄を朽(ク)す【句】『前條を見よ』面白さに、時の經過するを忘る。 源氏「お前の方(カ)、はるばると見遣られて、……、まことに斧の柄もくたいつべう思ひつつ、日を暮す」

斧の蹟(ツヅキ)【句】工事の過失。 水鏡「たとひ、よき佛師に逢ひたまふとも、なほ斧のつまづきあるべし」

斧を入る【句】斧にて、木を伐る。 蕪村「斧入れて香(カ)に驚くや冬木立」

斧を揭げて、淵に入る【句】『淮南子に「以二其所レ修、而游二不用之鄉一、猶下樹二荷山上一、蓄二火井中一、操レ釣上レ山、揭レ斧入レ淵」とあるに本づく』物を用ふる場所の不適當なる譬。〔諺語〕

**をーの** 小野【名】『を(小)は接頭語』**の**(野)に同じ。 續古今「過ぎゆかば散りもこそすれ卯の花の枝さしかはす小野の細道」

**をの** 小野【名】㊀〔地〕山城國宇治郡山科(ヤマシナ)村の大字。和名抄に見ゆる小野郷の遺稱。 續千「栗栖野・小野の荻柴折りくべて」 ㊁〔地〕山城國愛宕(オタギ)郡にありし郷(ガ)。今の修學院村大字修學院高野(ノタカ)より北、八瀬(ヤセ)・大原二村の地に當り、小野朝臣の領邑たりし所。 伊勢「惟喬(コレタカ)のみこ、……、小野といふ所に住みたまひけり」 ㊂〔地〕山城國小野郷(ヲノ)村の大字。葛野(カド)郡鷹峰(タカガネ)村の西。清瀧(ヲチタキ)川の上流の地にて、西に越ゆれば、丹波國に出づ。鷹峰を經、又は水運により、下嵯峨を經て、木材・薪炭類を、京都に出す。 ㊃〔地〕播磨國加東郡にある村。兵庫縣の管下。一柳(ヤナギ)氏の舊藩地。 ㊄〔地〕明治の初年設置の縣の一。**ひめぢ**(姫路) ㊅參照。 ㊆姓氏の一。孝昭天皇の皇子天帶彦國押人(アメタラシヒコクニオシヒト)命の裔小野妹子、近江國滋賀郡眞野(マノ)郷小野、即ち今の和邇(ワニ)村大字小野の地に居り、地名を取りて、姓とせしに始まる。篁・好古(ヨシフル)・道風など皆、この一族なり。

小野の山莊【句】前條㊂の地にあり。大納言南淵(ミナブチ)年名の別莊。尙齒會の、貞觀十九年三月、初めてここにて行はれしによりて、特に有名なり。

小野の三流【句】〔佛〕次條の六流の内、寛信を祖とする勸修寺(クワンジユウジ)流、宗意を祖とする安祥寺流、增俊を祖とする隨心院流の總稱。(「醍醐の三流」に對して)

小野の六流【句】〔佛〕眞言宗の小野流に屬する六流。即ち前條の三流と醍醐の三流との總稱。各條を見よ。(「廣澤の六流」に對して)

**をーのーうら** 亨生浦・麻生浦【名】〔地〕志摩國志摩郡鏡浦(カガミ)村の海濱。海上、岩嶼散布し、古松、これを點綴し、風景、畫の如し。古は、「をふの浦」といへり。

**をのーおつつ** 小野お通【名】〔人〕織田信長の侍女。父を正秀といひ、美濃國北方(ガタ)莊を領して、信長に屬し、永祿二年、京都六條河原の戰に死せりといふ。信長の死後、お通、京師に出で、豐臣秀次の臣鹽川志摩に嫁せしが、後、德川家康に召され、駿河に下りて、千姫(セン)の介添となり、東福門院の入内に當りても、又、介添を命ぜらる。尋いで、眞田信之の子信政に愛せられて、一子を生み、寛永中歿すといふ。千姫に仕へし時、淀君の請により、淨瑠璃十二段草子を作れりと傳へ、又、信長の病を慰むるために執筆せりとも傳ふ。されども、淨瑠璃の名は、この草子の文句を語るより出でし名稱なるに、荒木田守武の守武千句及び柴屋軒宗長の宗長日記に、既に淨瑠璃を語ること見えたるに依れば、かの說信ずべからず。



**をのがはきさぶらう** 小野川喜三郎【名】〔人〕大阪の力士。近江國大津の人。小野山才助の養子。谷風梶之助に次ぐ第二代横綱なり。文化九年、廢業して大阪片原町に小野川と呼ぶ水茶屋を出せりといふ。歿年詳かならず。

**をーのーかみ** 男神【句】**を**(男)の條下を見よ。

**をーのーかむなぎ** 男巫【句】**を**(男)の條下を見よ。

**をのぎ-がさ** 小野木笠【名】丹波國龜山の小野木縫殿助といふ人の、足輕以下の者に冠らせたる鐵の笠。當時、畿内に、鐵の笠無かりしより、特に斯の稱を得。

**をーのーこ** 男子・男【名】㊀をとこ。だんし。男兒。(女子(ヨメ)に對して) 源氏「をのこの、おほやけにつかうまつり」 ㊁召使はるる男子。(朝臣にも、貴族の下部(モノ)にもいへり) 枕「をのこども召せば、藏人忠隆參りたるに」 源氏「この宿守(ヤドリ)なるをのこども呼びて問ひ聞く」

**をーのーこ** 男【接尾】賤しき男子を呼ぶ時、名に添へていふ語。 東鑑「行光良從藤五郎愚息泰村をのこ」 徒然「又五郎をのこ」

**をのこ-かむなぎ** 男子巫・男巫・覡【名】「男(ヲ)の巫」に同じ。 和名「覡、乎乃古加牟奈岐」

**をのこ-ご** 男子子・男子【名】をとこの子。むすこ。男兒。(女子(ヲミナ)に對して) 枕「七つ・八つばかりなるをのこ子」 源氏「をのこ子三人ありけるに」

**をのこご-もち** 男子子持・男子持【名】をのこの子を、子に持てること、又その人。女殺油地獄「蓬・菖浦は、家ごとに、幟の音のざわめくは、をのこ子の印(シルシ)かや」

**をのこ-みこ** 男子御子・男御子【名】**をさこみこ**(男御子)に同じ。 源氏「玉のをのこ御子さへ生れたまひぬ」

**をのこ-みや** 男子宮・男宮【名】前條に同じ。 續世繼「玉のをのこ宮、生れさせたまひぬれば」

**をのこ-やつこ** 男子奴・男奴【名】男のや

つこ。しもべ。下男。(女子奴(ヤツコ)に對して) 紀「奴、ヲノコヤツコ」

**をのこ-やもめ** 男子鰥・男鰥 【名】をとこやもめ(男鰥)に同じ。 名義抄「鰥、ヲノコヤモメ」

**をのこ-わらは** 男子童 【名】をのわらは(男童)に同じ。 空穂「をのこわらは使ひて」

**をの-ずみ** 小野炭 【名】丹波國多紀郡小野細川より燒きて出す炭なりといへど、小野㊀㊁も薪炭を出す地なれば、或はそれか。 庭訓往來「大原薪・小野炭」

**をのでら-じふない** 小野寺十内 【名】〔人〕次條に同じ。

**をのでら-ひでかず** 小野寺秀和 【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。通稱は十内。淺野長矩に仕へて、留守役となる。伊藤仁齋に學びて、經書に通ず。又、和歌をよくす。元祿十六年二月四日、死を賜はる。年六十一。

**をのでら-ひでさみ** 小野寺秀富 【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。通稱は幸右衞門。秀和の義子。父に從ひて、吉良氏を襲ひ、元祿十六年二月四日、死を賜はる。年二十八。

**をの-なかやま** 雄中山 【名】〔地〕をのやま(雄山)に同じ。 平治「和泉と紀伊國との境なる雄中山にて」

**をの-ね** 【名】〔植〕まを(眞苧)に同じ。

**をのの-く** 戰く・戰慄く 【動四自】わなゝく(戰く)に同じ。 著聞「顏色變り、怖れをのきたるけしきなり」

**をの-の-くわらたいごう** 小野皇太后 【名】〔人〕『山城國小野に居たまひしよりいふ』ふぢはらよしこ(藤原歡子)を申す。

**をの-の-こまち** 小野小町 【名】〔人〕女歌人。六歌仙の一人。出羽郡司の女とも、出羽守小野良實(篁の子)の女ともいふ。又、同名數人ありきともふ。美人にして、和歌を巧みにす。仁明・文德兩天皇の後宮に奉仕し、清和天皇の貞觀八九年の頃には仕を辭して、佗しき月日を送りしが如し。

**をの-の-たうふう** 小野道風 【名】〔人〕をのみちかぜ(小野道風)に同じ。



**をの-の-たかむら** 小野篁 【名】〔人〕朝臣。參議岑守(モリヰ)の子。弘仁十三年、文章生の試に及第し、東宮學士を經て、正五位下・刑部大輔に進み、承和の初、遣唐副使となりしが、乘船の事によりて、大使藤原常嗣と爭ひ、嵯峨上皇の怒に觸れて、隱岐國に流さる。數年にして召還せられ、諸官に歷任して、從三位に陞敍せられ、仁壽二年薨ず。年五十一。博學にして、詩文、當時に冠絕し、兼ねて、和歌を巧みにす。嘗て、清原夏野等と、令義解を撰む。世に野相(ヤサウ)公と稱す。

**をの-の-みかど** 小野帝 【名】〔人〕『山陵、山城國宇治郡山科村大字小野に在るより申す。だいごてんわう(醍醐天皇)を申す。

**をの-の-みさざき** 小野陵 【名】宇多天皇の皇后藤原胤子の御陵。山城國宇治郡山科村大字勸修寺(クワシウジ)の西大日山にあり。

**をの-の-みちかぜ** 小野道風 【名】〔人〕朝臣。太宰大貳葛弦の子、好古(ヨシフル)の弟、醍醐・朱雀・村上の三朝に歷事し、正四位下・內藏權頭に陞る。書を善くし、藤原佐理・藤原行成と共に、世に三蹟と稱せらる。康保三年歿す。年七十一。「道風」。又、「たうふう」とも讀み、晩年中風を患へ、手顫ひて、筆蹟奇體を生ぜしより、「道風(ダウフウ)のふるひ筆」の語、又、後世に喧傳せり。

**をの-の-みや** 小野宮 【名】㊀〔人〕『山城國愛宕(オタギ)郡小野に住みたまひしよりいふ』これたかしんわう(惟喬親王)に同じ。㊁古、京都の大炊御門(オホヒ)の南、烏丸の西にありし第宅。もと惟喬(コレタカ)親王の居所。後、藤原實賴、これに居り、世に小野宮殿といへり。

**をの-の-みや-どの** 小野宮殿 【名】〔人〕ふぢはらさねより(藤原實賴)に同じ。

**をの-の-みやゝ-りう** 小野宮流 【名】公家(クゲ)の有職家の一派。小野宮實賴の傳へし禮式・故實に依るもの。

**をの-の-よしふる** 小野好古 【名】〔人〕武將。太宰大貳葛弦の子。道風の兄。藤原純友の叛するや、山陽道追捕使となり、これを筑前博多に破り、逃ぐるを追ひて討平す。官、遂に太宰大貳に至り、從三位に進む。安和元年卒す。年八十八。

**をの-はじめ** 斧始 【名】てうなはじめ(手斧始)㊀に同じ。

**をのはま** 小野濱 【名】〔地〕攝津國神戸市の海濱。舊生田(イクタ)川の川尻の地嘗て、造船所の設ありしが、明治二十八年に閉鎖す。

**をの-ふえ** をの笛 【名】せう(簫)に同じ。 〔古語〕字鏡「簫、乎乃不江」

**をの-ふるみち** 小野古道 【名】〔人〕國學者。通稱は長谷川謙益。壯歲、明を失ひ、鍼術及び按腹を學びて、妙を得、名聲、都下に鳴る。加茂眞淵の、江戸に來るや、第一にその門人となり、古學を究め、和歌をよくす。明和中歿す。

**をの-へ** 尾上 【名】『峰(ヲ)の上(ヘ)の義』山の高き所。いただき。山巔。 萬葉「たゆらぎの山のをのへの櫻花咲かむ春べは君をしぬばむ」

尾上の調(ベシラ) 【句】尾上の松を風の吹く音。 後拾遺「高砂と高くな言ひそ昔聞きし尾上のしらべまつぞ戀しき」

**をの-へ** 尾上 【名】㊀〔地〕播磨國加古郡にある村。高砂(タカサゴ)町と加古川を隔てて、東に在り。附近一帶、砂白く、水清く、老松蓊鬱、風景佳絕なり。㊁俳優の家柄の一。初代菊五郎を祖とし、その門下の名優も亦許されて稱へたり。

尾上の鐘 【句】をのへじんじや(尾上神社)を見よ。 千載「高砂や尾上の鐘の音すなり曉かけて霜や置くらん」

尾上の松 【句】をのへじんじや(尾上神社)を見よ。

**をの-へ-きくごらう** 尾上菊五郎 【名】〔人〕俳優。㊀(初代)京都の都萬太夫座の出方宮川町晉羽屋半平の子。女方尾上左門の弟子。初は若衆方、後、女方に轉じ、遂に立役(ヤク)となる。三都の劇場に名聲を博し、二世團十郎と同座せしこと多し。家名は晉羽屋、俳號梅幸。天明三年江戸にて歿す。年六十七。㊁(三代目)江戸小傳馬町なる建具屋仙次郎の子。初、尾上松助に褒はれ、文化十二年、菊五郎の名を襲ぐ。怪談狂言の鼻祖。家名は晉羽屋、俳號梅幸。嘉永二年遠州掛川にて歿す。年六十六。㊂(四代目)大阪に生れ、中村歌六の門に入り、天保二年、先代の次女の婿となり、江戸に出で、安政元年、菊五郎の名を襲ぐ。女方專門。萬延元年死す。家名は尾上、俳號梅幸。年五十三。㊃(五代目)十二代目市村羽左衞門の子。母は三代目菊五郎の長女。明治元年、菊五郎の名を襲ぐ。世話狂言を善くし、史劇に長じたる九代目團十郎と一對の名優として、「團・菊」の稱、一世に響けり。明治三十六年歿す。年六十。



**をのへ-じんじや** 尾上神社 【名】播磨國加古郡尾上村の松林中に鎭座せる村社。祭神は住吉神社のに同じ。創始年代詳かならず。社前の一屋舍に、國寶の一に指定せられたる尾上の鐘と呼ぶものあり。高さ三尺二寸、周圍七尺七寸、厚さ一寸九分、俗に神功皇后の將來と傳ふ。又、境內に、相生(アヒオ)の松、片枝の松あり。前者は、尾上の松ともいひ、雌雄一根より生じ、後者は、その枝、悉く東に向ふ。

**をの-まつ** 小野松 【名】『まつ(松)㊃を見よ』古、小野㊀又は㊁の地より出しし松明(アカシ)の材なるべし。 新六「小車の道の小野松はやともせ轍(ワダ)も見えず日は暮れにけり」

**をの-まんねんぐさ** 雄萬年草 【名】〔植〕景天(ケイテン)科に屬する多年生の草。高さ六七寸。莖も、葉も、肉質・多汁。葉は細長くして尖り、淡綠色を呈し、花は小形・黃色なり。山野に自生す。たかのつめ。ほそばのまんねんぐさ。(佛甲草(ブツカフサウ)に對して)

**をの-みっぱ** 小野密派 【名】〔佛〕をのりう(小野流)に同じ。

**をのみち** 尾道 【名】〔地〕備後國にある市。國內第一の都邑、又、瀨戸內海樞要の良港。南は向(ムカ)島と相對して、尾道海峽を作る。港は、水深く、波靜かなれば、

中國航路のもののみならず、四國方面の船舶も來りて、連絡を取る。西部に鐵道山陽線の停車場あり。

**を-の-みなと** 男水門・雄水門【名】〔地〕五瀬(セヲ)命薨去の地たる水門。古事記には、紀の國の内、日本書紀には茅渟(ヂ)の内なる由記せり。後者、眞に近く、和泉國舊目根郡呼吸(ヲ)郷、即ち次條の雄山の附近なるべし。古事記に依りて、和歌山市の西北部なる小野町・湊町等の地ならんといふ説もあれど、失當ならん。

**を-の-やま** 雄山。男山【名】〔地〕和泉國と紀伊國との堺にある山。葛城(カヅラギ)山脈の末にして、今は、專ら中山(ナカヤマ)の一峯を呼ぶ。中山は、大阪・和歌山間の官道にして、坂路、甚だ險峻ならず。をのなかやま。紬中抄「雄の山の關守」

**を-の-やま** 小野山【名】〔地〕山城國愛宕(オタギ)郡小野の邊の山。大原村上野の東方に峙つ。古、惟喬(コレカル)親王の小野宮、藤原敏行・紀貫之等の別莊などありたり。拾玉「小野山も大原山も炭がまの烟は同じあはれなるらん」

**を-の-らんざん** 小野蘭山【名】〔人〕本草家。本姓は佐伯(サヘキ)名は職博、字は以文、通稱は喜内(記内とも書けり)。京都の人。少時、松岡恕庵に本草學を學び、後、意を仕進に絶ち、採藥の傍ら、帷を下して、本草を講じ、寛政十一年、七十一歳にして、幕府の徴召に應じて、江戸に赴き、醫學館に教授す。文化七年歿す。年八十二。終身娶らず、性强記にして、大著本草綱目啓蒙の外、數種の作あり。

**を-の-りう** 小野流【名】一〔佛〕眞言宗古義派の二流の一。空海より三傳したる聖寶(ショウホウ)を流祖とし、更に五傳して、仁海(ジンカイ)の時、山城國宇治郡小野に曼荼羅寺を開きて、盛んにこれを弘布せるもの。小野密派。「小野の三流」「小野の六流」參照。(廣澤流に對して) 二 劍道の流儀の一。小野二郎右衛門忠常を祖とするもの。

**を-の-わらは** 男童【名】男なる子供。をのわらべ。(女童(メワラハ)に對して) 土佐「年九つばかりなるをのわらは」



**を-の-わらべ** 男童【名】前條に同じ。和名「男童、乎乃和良倍」

**を-の-をれ** 斧折【名】〔植〕『材堅くして、斧も折るほどなりとの義』みねばり(峰榛)に同じ。

**をのをれ-かんば** 斧折樺【名】〔植〕前條に同じ。

**を-は** 尾羽【名】鳥の尾と翼と。萬葉「うち靡く春さりくれば笹の末(ウレ)に尾羽打振りて鶯鳴くも」

尾羽打枯す【名】次條に同じ。

尾羽を枯す【句】落ちぶれて、姿見すぼらしくなる形容。尾も羽(ハ)も無し。「羽根(ネ)を垂る」參照。武家義理物語「尾羽を枯して、逢ふべき便(リヨウ)なきを」

尾羽打枯る【句】前條に同じ。最明寺殿百人上蘆「尾羽打枯れし修行(シユウギヤウ)の旅」

**を-ば** 小母【名】父又は母の姉妹及び、小父(オヂ)の妻。(小父(オヂ)に對して)〔伯母、(父の姉)・叔母(父の妹)・姑(父の姉妹)・姨(母の姉妹)〕字鏡「姨母、乎婆」

**をば-が-さけ** 伯母酒【名】能(ノウ)の狂言の一。或者、酒屋を營める伯父の許に赴き、酒を請ひしに、度度の事なるより、謝絶せられ、辭し去る途中より、鬼の假面を被りて立ち戻り、伯母を嚇しながら飲酒の目的を達し、遂に甥なることを發見せらるといふ筋のもの。

**を-はぎ** 【名】〔植〕おはぎに同じかるべし。〔古語〕新六「今はまた野べのをはぎの春深み時過ぎぬれや摘む人のなき」

**をば-き** 小母貴・伯母貴・叔母貴【名】『をはきみ(君)の略、貴は假借の文字』次條に同じ。(小父貴(オヂキ)に對して)

**をば-ぎみ** 小母君・伯母君・叔母君【名】をば(小母)の敬稱。(小父君に對して)

**をば-ご** 小母御・伯母御・叔母御【名】前條に同じ。(小父御に對して)

**を-はこべ** 雄繁縷・雄繁縷【名】〔植〕みみなぐさ(耳菜草)に同じ。

**をば-さま** 小母様・伯母様・叔母様【名】一をば(小母)の敬稱。(小父(オヂ)様に對して) 二 女の頭髮の毛の、鬢(ビン)の内よりはみ出してあるもの。

**を-ばさみ** 尾挾【名】鞦(シリガイ)の一部。馬の尾に當る所。

**をば-さん** 小母様・伯母様・叔母様【名】一をばさま(小母様)の音便。(小父(オヂ)様に對して) 二 他人の妻女の年長なる者を親み呼ぶ稱。(小父様に對して)

**を-はし** 小橋【名】一 小き橋。こばし。二『を(小)は接頭語』はし(橋)(一)に同じ。さをはし(真小橋)參照。

**を-はし** 玉莖・男莖【名】をはせ(玉莖)の轉。〔古語〕

**をばし-え** 小椅江【名】〔地〕上古、今の大阪市東成(ナリヅリ)區鶴橋町小橋(オバセ)にありし江灣。當時、この地は沼澤にて、河内國よりの諸川會注せり。古事記「難波の堀江を掘りて、海に通し、又、小椅の江を掘り」

**をはしがた** 玉莖形・男莖形【名】をはせがた(玉莖形)に同じ。

**をばし-ぎ** 姥鷸【名】〔動〕うばしぎ(姥鷸)に同じ。〔語〕

**を-はしし** 斷【名】はじし(斷)に同じ。〔古

**をばしや-ひと** 小母者人・伯母者人・叔母者人【名】をばちやひと(小母ちや人)の誤。

**を-ばしら** 男柱【名】一『をこばしら(男柱)に同じ。二『を(男)は、大・小の別の大の意を示す接頭語』櫛の齒の、左右兩端にある、大なるもの。おやば。ほとりば。〔雄柱〕〔古語〕記「ゆつ爪櫛(ツマクシ)の男柱一つ取闕きて」

**を-ばしり** 小走・蹶【名】こばしり(小走)に同じ。字鏡「蹶、蹻也、躍也。乎波志利」

**をば-すて** 姨捨【名】一〔地〕次條の略。〔姥捨〕

二 謠曲の一。都よりの旅僧、信濃國姨捨山に、中秋の月を賞せんとて來りし處に、古捨てられし姨の亡靈の、月にあくがれ出でて、過去を語るといふ筋のもの。「關寺小町」「檜垣(ヒギリ)」と併せて、三老女と呼び、重きものとす。

**をばすて-やま** 姨捨山・姥捨山【名】〔地〕『小泊瀬(ヲハセ)山の轉にて、泊瀬は、古、多く葬地に用ひし名なるより、姨捨の傳説も生ずるに至りしならんといふ』信濃國更級(サラシナ)郡の南部にある山。冠著(カムリキ)山北麓の地にして、千曲(チクマ)川を隔てて、埴科(ハニシナ)郡なる鏡臺山と相對し、古來、觀月の名所たり。附近に鐵道篠井(シノヰ)線の姨捨停車場あり。古、或男、親の如く奉養せし姨を、妻の勸によりてこの山に捨てしが、月の山上より出づるを見て、悔恨の情に堪へず、又往きて迎へ來れりとの話説、大和物語に見えたり。この説話は、次に掲ぐる古今集の歌に、列子湯問篇孝子傳中の説話、又、礫實藏經の棄老國の故事(ありごしみやうじん(蟻通明神)參照)などを取り合はせたる物語なるべしといふ。たご(田毎月)參照。古今「わが心慰めかねつこのつき更科や姨捨山に照る月を見て」

**を-はせ** 玉莖・男莖【名】男の陰部。をはし。陰莖。男根。はせ。〔古語〕

**をばせ** 小橋【名】〔地〕『をばしえ(小橋江)の約か』大阪市東成(ナリヅリ)區鶴橋町の一部。上古、藤原鎌足の祖なる大小橋命の館舍あり、その址、後世、藤原殿の地といふ。紀「仁德天皇、……、十四年冬十一月、爲二橋於猪甘津(ヰカヒ)一、即號二其處一曰二小橋一」繊縮細卯月の紅葉「晝は生(ウブ)天王寺・天滿・小橋に河口を」

**をはせ-がた** 玉莖形・男莖形【名】をはせに擬へたる形。男根の形。をはしがた。〔古語〕古語拾遺「男莖形、ヲハセガタ」

**をばた** 小幡【名】一〔地〕一 上野國北甘樂(キタカラ)郡にある村。群馬縣の管下。松平氏の若藩地。二 明治の初年設置の縣の一。四年七月、舊小幡藩の地に立てしもの。後、群馬縣に入る。

**をばた-かげのり** 小幡景憲【名】〔人〕軍學者。通稱は勘兵衛。遠江國の人。武田氏の臣。武田氏滅びし時、年十一、德川家康、憫みて、秀忠の侍童となす。文祿四年、薙髮・出奔し、諸州を遊歷して、兵法の奥旨を探り、慶長・元和の間、或は井伊直政に屬し、或は前田氏に屬し、或は家康の麾下に參して、軍功、最も多し。昔て甲陽軍鑑の遺漏を補ひ、大いに武田氏の兵法を興し、甲州流軍學の祖と稱せらる。寛文

三年歿す。年九十一。

**をばたかんべゑ** 小幡勘兵衛【名】〔人〕前條に同じ。

**をばたじやう** 小幡城【名】尾張國春日井郡守山(ヤマ)町に在りし城。徳川家康の祖父清康の居りし所。

**をばたとくじらう** 小幡篤次郎【名】〔人〕豐前中津の藩士。福澤諭吉に英書を學び、その塾長となる。明治十二年、東京學士會院會員に選まれ、後、これを辭し、廿三年、再び慶應義塾長の囑託を受け、又、貴族院議員に勅任せられ、三十八年歿す。年六十三。著書多し。

**をはたふ**【動四自】『をはる(終る)に關係ある語か』しぬ(死ぬ)【一】に同じ。〔古語〕紀「死、ヲハタヒヌ」

**をばち** 雄蜂【名】〔動〕一群の蜜蜂の中、少數に存し、蜂王即ち一匹の雌蜂と共に、生殖に從事するもの。

**をばぢやひと** 小母ぢや人・伯母ぢや人・叔母ぢや人【名】『小母である人の訛』をば(小母)に同じ。天の網島「姑(トシウヘ)は伯母ぢや人、親同然」

**をはつせ** 小初瀬・小泊瀬【名】〔地〕をはつせやま(小初瀬山)の略。芭蕉「小初瀬や、花に暮れゆくばん袋」

**をはつせ-わかささぎ-の-みこと** 小泊瀬稚鷦鷯命・小長谷若雀命【名】〔人〕ぶれいてんわう(武烈天皇)の御名。

**をはつせやま** 小初瀬山・小泊瀬山【名】〔地〕『を(小)は接頭語』はつせやま(初瀬山)に同じ。蕉「事しあらば小泊瀬山の石城(キノ)にも隠(モ)らば共にな思ひわが背」

**をばな** 尾花【名】【一】『穂の形、獸などの尾に似たるよりいふ』薄(スヽキ)の穂。はなすすき。萬葉「萩が花尾花葛花(クズ)なでしこの花女郎花(オミナヘシ)また藤袴朝顔の花」【二】裏(ネカサ)の色目の一。表は白、裏は薄縹(ウスハナダ)。秋用ふ。

尾花が袖【句】尾花の、風に靡くさまを、人の手招する袖に見立てていふ語。伊勢集「人も著ぬ尾花が袖に招かれていとどあだなる名をや立てなん」



尾花の粥【句】をばながゆ(尾花粥)に同じ。

尾花波寄る【句】尾花、秋風に靡きて、浪の寄するが如く見ゆ。金葉「鶉鳴く眞野(ヲ)の入江の濱風に尾花波寄る秋の夕ぐれ」

尾花の波【句】前條を見よ。

**をばな** 雄花【名】〔植〕ゆうくわ(雄花)に同じ。(雌花(ヘバ)に對して)

**をばなあしげ** 尾花葦毛【名】あしはなげ(葦華毛)に同じ。堀太「關の戸に尾花葦毛の見ゆるかな穂坂(カサ)の駒を牽くにやあるらん」

**をばないろ** 尾花色【名】をばな(尾花)【二】に同じ。蜻蛉「尾花色の細長」

**をばながゆ** 尾花粥・小花粥【名】『色、白くして、薄黑味を帶びたるさま、尾花の色の如くなるよりいふ』昔、八朔に用ひし御粥。古は、薄の穂を黑燒にして交へ、内裏・仙洞以下、すべてこれを用ひ、江戸時代には、早稻を黑燒にし、又は、黑胡麻などを以て、代用せりといふ。斯くすれば、疫病を免れ得と信ぜしなり。

**をばなくりげ** 尾花栗毛【名】馬の毛色の一。差毛(ケサ)ある栗毛なるべし。

**をばなげ** 尾花毛【名】をばなあしげ(尾花葦毛)に同じ。

**をばなざは** 尾花澤【名】〔地〕羽前國北村山郡にある町。陸羽街道の一驛。東方國見峠を越えて、陸前國志太(シダ)地方に出づる街道あり。奥の細道「尾花澤に、清風といふ者を尋ね」

**をばなずり** 尾花摺【名】【一】野を分け行く時、衣の、尾花【一】と摺れあふこと。【二】鷹の、のり毛の落ちたる後の毛のさま、尾花【一】の如くに見ゆること。

**をばなつきげ** 尾花月毛・尾花桃葦毛【名】馬の毛色の一。差毛(ケサ)ある月毛なるべし。運歩色葉集「桃華馬、ヲバナツキゲ。蕪蘆毛」

**をばなやま** 尾花山【名】〔地〕山城國男山の別稱。

**をばなり** 小放【名】『を(小)は接頭語』はなり(放)に同じ。〔古語〕萬葉「葦屋(アシヤ)のうなひ處女(ヲトメ)が八歳兒(ヤヲ)の片生(カタヲ)の時ゆ小放に髪たくまでに」

**をばま** 小濱【名】〔地〕【一】若狹國遠敷(ヲニウ)郡にある町。國内第一の都會。福井縣の管下、南に山を負ひ港をなす。【二】明治の初年設置の縣の一。ふくゐ(福井)【三】參照。

**をばまじやう** 小濱城【名】若狹國遠敷(ヲニウ)郡小濱町の東北雲濱(ハクヒン)に在りし城。北川・南川の二川を引きて、濠とし、石壘、直ちに海際に峙ち、頗る形勝の地を占め、今なほ二三の城櫓を存す。慶長五年、京極高次築造す。子忠高、寛永十一年、出雲に轉じ、酒井忠勝、これに代り、明治維新に至る。

**をばまわん** 小濱灣【名】〔地〕若狹國にある灣。若狹灣の一支。灣口北に面し、深く彎入して、東・西二灣に分れ、東を小濱内港といひ、北川・南川合して、ここに注ぎ、後者は、青戸入江といひ、水深く好錨地なり。

**をばむこ** 小母婿・伯母婿・叔母婿【名】をばの夫。父又は母の姉妹の夫。

**をばやし** 小林【名】『を(小)は接頭語』ばやし(林)【一】に同じ。萬葉「をばやしに駒をばささげ心のみ妹がり遣りて我(ワ)はここにして」

**をばら** 小原【名】〔地〕おはら(大原)に同じ。

**をばらぎ** 小原木【名】おはらぎ(大原木)【一】に同じ。七一職人歌合「かこたるる身の程ならばをはら木のふすべらるるも嬉しからまし」

**をばらさかづき** 小原盃【名】『元祿の頃、小原權兵衛といふ者の造り出ししによりていふ』黑木にて製し、薄繪などを施したる、小形の盃。

**をばらめ** 小原女【名】おはらめ(大原女)に同じ。蕪村「小原女の五人揃うて給かな」

**をはり** 終【名】【一】をはること、又その處、又その時。はて。しまひ。終局。終末。【二】一生の最後。源氏「法務の僧都、年七十ばかりにて、今は終の行せんとて」【三】



みまかること。死ぬること。終焉。

終を取る【句】をはる(終る)【一】に同じ。新勅撰「伊駒山の麓にて、終取りはべりけるに」

終の宴【句】きやうえん(饗宴)に同じ。著聞「終の宴に擬へて、詩歌・管絃の興を催す」

終の烟(リヤウ)【句】火葬に付する時の烟。拾遺「惜しからぬ命や更に延びぬらん終の烟しむる野べにて」

終を慎む【句】【一】物事の結末に、念を入る。次條參照。【二】『論語の學而篇に「慎終追遠」とあり』父母の葬禮を鄭重にす。

終を慎むこと、始の如くす【句】『老子に「慎終如始、則無敗事」とあり』事は終局に際して敗るる事多きより、結末にも念を入ること、著手の時と、毫も異ならぬやうにす。

終を善くす【句】無事に天命を終ふ。壽を以て終る。

**をはり** 尾張【名】〔地〕東海道十五國の一。全國、愛知縣の管轄に屬し、もと、名古屋市以外を、愛知・東春日井(スカガイ)・西春日井・丹羽(ニ)・中島・海西(カイ)・葉栗(クリ)・知多の九郡に分ちたり。雅稱、尾州・張州。

**をはりあづき** 尾張赤小豆【名】〔植〕だいなごんあづき(大納言赤小豆)に同じ。

**をはりうど** 尾張人【名】尾張國の人。〔古語〕枕「尾張うどの種にぞありけるとうたふは、尾張の兼時が女の腹なりけり」

**をはりがき** 尾張柿【名】〔植〕はちやがき(蜂谷柿)に同じ。

**をはりがさ** 尾張笠【名】古、尾張國に產せし笠。康富記「尾張笠」

**をはりけ** 尾張家【名】びしうけ(尾州家)に同じ。

**をはりけつめい** 尾張決明【名】〔植〕かはらけつめい(山扁豆)に同じ。

**をはりげんじ** 尾張源氏【名】清和源氏の、尾張國に住著きたる一派。經基の子滿政より出で、子孫、浦野・山田・葦敷・小河・彦坂・高田・白川・小島等の諸苗氏に分

れ、その一流、三河國に移住せる者あり。

**みかはげんじ**(三河源氏)参照。

**をはり-ごめ** 尾張米 【名】尾張國より産する米。拾遺「をはりごめ、池をはりこめたる水の多かればいひの口より餘るなるべし」

**をはりだ** 小治田 【名】〔地〕『を(小)は接頭語。はりだ(墾田)を見よ』 ㊀大和國高市郡飛鳥(カスカ)の古の地名。今の飛鳥村大字豐浦(トヨ)及び白橿(カシラ)村大字和田の一部。推古天皇の宮址の地。〔小墾田〕 萬葉「小墾田の坂田の橋のくづれなば桁より行かむな戀ひそ吾妹(モヲギ)」 ㊁尾張國の古の地名。後世の愛知郡の一部なるべし。 萬葉「小治田のあゆちの水を間(マ)なくぞ人は挹(ク)むてふ」

**をはり-だいこ** 尾張大根 【名】〔植〕次條の轉。 芭蕉「三十里尾張大根の話かな」

**をはり-だいこん** 尾張大根 【名】〔植〕みやしげだいこん(宮重大根)に同じ。 傾城反魂香「尾張大根見るやうな」

**をはりだ-の-みや** 小治田宮・小墾田宮 【名】大和國高市郡小治田にありて、推古天皇のおはせし宮。飛鳥岡本(アスカモト)宮の所在地と同一。 續古今「小墾田の宮の古みちいかならん絶えにし後は夢の浮橋」

**をはりだ-の-をかもと-の-みや** 小治田岡本宮・小墾田岡本宮 【名】あすかのをかもとのみや(飛鳥岡本宮)に同じ。

**をはりだ-てら** 小治田寺・小墾田寺 【名】大和國飛鳥(アスカ)にありし寺。豐浦(トヨ)寺と同一かとも、草壁太子の岡宮を改めて寺となししものかともいふ。

**をはり-の-いへづと** 尾張家苞 【名】〔書〕しんこきんしふをはりのいへづと(新古今集尾張家苞)の略。

**をはり-はちぢやう** 尾張八丈 【名】はちぢやうぎぬ(八丈絹)㊀を見よ。 庭訓往來「尾張八丈・信濃布」

**をはり-はつもの** 終初物 【名】果物を、その時期の末に至り、初物(モノ)と同樣に珍重していふ語。 「に同じ。

**をはり-やき** 尾張燒 【名】せとやき(瀬戸燒)

**をはる** 終る 【動四自】㊀限となる。果つ。濟む。しまふ。終了す。「畢る・了る・卒る」 ㊁死ぬ。みまかる。 紀「死、ヲハリヌ」

**を-ひ** 甥 【名】『をは男(ヲ)の義』兄弟・姉妹のむすこ。從子。(姪(ヒ)に對して) 和名「甥。爾雅云、兄弟之子爲レ甥。乎比」

甥の草を舅が刈る 【句】㊀目上の者が、目下の者に使はる。伯父が甥の草を刈る。〔諺語〕 ㊁物事の順序の顚倒する譬。〔諺語〕

**を-びき** 尾引 【名】おびき(大引)に同じ。尾引の旋毛(ツムジ) 【句】へうび(豹尾)㊁に同じ。

**を-びき-いだす** 誘出す 【動四他】欺きてさそひ出す。

**を-びき-いる** 誘入る 【動下二他】欺きてさそひ入る。

**を-びき-だす** 誘出す 【動四他】をびきいだす(誘出す)の略。

**を-びき-よす** 誘寄す 【動下二他】をびきて寄り附かす。

**を-びく** 誘く 【動四他】『招(モ)引くの略』欺きいざなふ。迷はして引附く。 運歩色葉集「偽引、ヲビク」

**を-ひ-ご** 甥子 【名】をひ(甥)に同じ。 天の綱島「嶺(ヲ)の甥子に倒され」

**を-ひ-ご** 甥御 【名】をひ(甥)の敬稱。(姪御(ヒ)に對して)

**を-ひじは** 【名】〔植〕禾本科に屬する一年生の草。高さ一尺餘、葉は互生し、細長くして尖り、平行脈を有し、花は、小穗狀花序相集まりて、更に長き寢穗狀花序をなし、花蓋の頂端に、著生す。原野に自生し、家畜の飼料となる。ちからぐさ。もどりぐさ。(めひじはに對して)

**を-ひ-つ-こ** 甥子 【名】をひご(甥子)の音便。(めひつ子に對して)

**を-ひ-ど** 夫 【名】『夫(ヲ)人の音便』をっと(夫)に同じ。〔古語〕 紀「夫、ヲヒト」

**を-ひと-め** 夫婦 【名】ふうふ(夫婦)に同じ。〔古語〕 紀「夫婦、ヲヒトメ」

**を-ひも** 雄紐 【名】袍・直衣(ノウシ)・狩衣などの入紐(ヒモ)に於て、先端を結玉(タマ)にし、雌紐の輪に挿して、結び合はする紐。

**を-ひも** 小紐 【名】したひも(下紐)に同じ。小紐を解く 【句】「下紐(ヒモ)を解く」に同じ。〔古語〕 記「汝(ミマ)が固めしみづの小佩(モヒ)は誰かも解かむ」

**を-びやうし** 雄拍子 【名】雅樂にて、打物なる樂器を、雌拍子(ヒシ)に續けて、右の手にて打鳴らすこと。

**を-ひれ** 尾鰭 【名】魚の尾と鰭と。 續俳家奇人談「竹亭」「掛鯛に尾鰭持ちけり藁細工」

尾鰭が附く 【句】話が、事實以上に、大袈裟(オオサ)になる。おまけが附く。 薩摩歌「そ事が延びれば、尾鰭が附く」

尾鰭が見ゆ 【句】「鰭が有る」に同じ。 膝栗毛「青物の賣買ながら商人(シアキ)に尾鰭の見ゆる市の側(カワ)町」

尾鰭を附く 【句】大袈裟(オオサ)に言ひなす。おまけを附く。 女殺油地獄「まがまがしい、あの嘘はいの。まだ、尾鰭附けて言はしやんせ」

**を-びれ** 尾鰭 【名】魚類又は游水類に屬する動物の尾端に存する鰭。

**を-ふ** 麻生・亭生 【名】麻の生えてある地。 萬葉「櫻麻の亭原(ヲ)の下草露しあれば明かしてい行け母は知るとも」

**をふ** 終ふ・畢ふ・了ふ・卒ふ 【動下二他】『を(尾)に語尾の添ひたる語』をはるやうにす。果たす。遂ぐ。成す。濟ます。

終へない 【句】「始末(ツシ)に終へない」の略。 浮世風呂「まだ熱いから、うめや。をひねえ(をへないの訛)三助だなう」

**を-ぶくろ** 尾袋 【名】馬又は鷹の尾を包みおく、織物の袋。馬のは、布製にて、唐鞍(クラ)の時に用ひ、尾筒ともいひ、鷹のは、生絹(スガ)の袋ともいひたり。 和名「尾蕭。考聲切韻云、紛、俗云二尾袋一。所三以蕭二馬尾一也」

**を-ふさ** 【名】にじ(虹)に同じといふ。〔古語〕 夫木「更に又そり橋渡すここちしてをふさかかれる葛城の山」

**を-ふさ** 緒總・綬 【名】玉佩(ギヨ)の下に垂るる飾紐。

**を-ぶさ** 尾房・鞦 【名】『たぶさ(手房)参照』鳥獸の尾の一部。 和名「鞦、乎布佐。李善曰、鞦夾尾之間也」 俳諧新選(機川)「尾房にも馬ひやし場の螢かな」

**を-ぶさ** 小總 【名】〔地〕相摸國の古驛。今の足柄下(アシガラシモ)郡酒匂(サカ)驛なるべしといふ。 延喜式「小總」 大和「小總の驛(ウマヤ)といふ處は、海邊になんありける」

**を-ふし** 小柴 【名】こしば(小柴)㊀に同じ。 堀文「片岡のをふしまじりに生ひ繁る柞(ハ)のさ枝はつ紅葉せり」

**を-ぶし** 男節・雄節 【名】背部の肉にて作りたる鰹節。(女節(シブ)に對して)

**をぶすま** 男衾 【名】〔地〕武藏國の舊郡の一。明治二十九年、大里(オオサト)郡に合併せり。古は、「小被」、又、「小衾」とも書きたり。

**を-ぶち** 小駁・小斑 【名】『を(小)は接頭語』ぶち(駁)㊀に同じ。 後拾遺「逢坂の關の杉むら率く程はをぶちに見ゆる望月の駒」

**をぶち** 尾駁 【名】〔地〕陸奥國上北(カミキタ)郡にある地。尾駁沼ありて、餘水、太平洋に入る。 發撰「みちのくのをぶちの駒は野飼ふには荒れこそまされ靡くものかは」

**を-ぶつ** 汚物・汙物 【名】けがれたる物。きたなき物。よごれもの。

**を-ふと** 夫 【名】『をひと(夫)の轉』をっと(夫)に同じ。〔古語〕 字鏡「聟、乎不止。又、加太支」

**を-ぶと** 緒太 【名】㊀鼻緒の太きこと。㊁ぬこんがう(瞿金剛)に同じ。緒太の金剛 【句】ぬこんがう(瞿金剛)に同じ。 狂言「菊の花「緒太の金剛がござった」

**を-ぶね** 小舟・小船 【名】こぶね(小舟)に同じ。

**をふ-の-うら** 麻生浦・亭生浦 【名】〔地〕㊀越中國射水(イミ)郡の海濱の一部の古稱。萬葉「おろかにぞ我は思ひしをふの浦の荒磯(アリ)のめぐり見れど飽かずけり」 ㊁志摩國亭生浦(ヲフ)の古稱。古今「をふの浦に片枝さしおほひ生(ナ)る梨のなりもならずも寢て語らはん」

**をふのうらーなし** 苧生浦梨・麻生浦梨【名】古志摩國苧生浦の名產たりし梨。增鏡「はかなくもをふの浦梨君が代にならばと身をも頼みけるかな」

**をふのーさき** 麻生崎・苧生崎【名】〔地〕越中國射水(イミ)郡の海岸にある崎の古稱。萬葉「をふの崎漕ぎたもとほり目ねもすに見とも飽くべき浦にあらなくに」

**をーふぶき** 小ふぶき【名】『を(小)は接頭語』ふぶき(吹雪)に同じかるべしとも、ふぶき(蕗)なるべしともいふ。催馬樂「あふ路の篠のをふぶきはや、ひかず、こもりましやせぬらん篠のをふぶきや、さ公達(キミ)や」

**をーふり** 尾振【名】尾を振り動かすこと。新六「招くとやをち方人の思ふらん尾花葦毛の駒の尾振を」

**をーへーと**【名】『麻綜(ウミ)兒の義といふ』織屋に雇はるる女の織子。〔京都西陣(ニシ)の語〕

**をーべつ** 汚衊・汙衊【名】血を塗りてけがすこと。

**をへーない** 終へない【句】をふ(終ふ)の條下を見よ。

**をーへびいちご** 雄蛇苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。高さ五六寸。葉は互生、掌狀複葉。小葉は、上部のは三箇、下部のは五箇。各小葉、鋸齒を具ふ。初夏、枝端に、黃色・五瓣の小花開く。各地の田野・路傍に多し。うつまたぐさ。うつまめぐさ。きらんさう。つまめ。

**をーべら** 小べら【名】**をつめ**(小づめ)を見よ。〔古語〕

**をーほこる**【動四自】**ほこる**(誇る)に同じ。〔古語〕字鏡集「伐、ヲホコル・ホコル」

**をほす** 果す【動下二他】『この語、從來おの假名に用ひ來りたれども、をふ(終ふ)に關係ある語なるべければ、をの假名の方可なるが如し』**おほす**(果す)を見よ。紫式部日記「舟に乘りをほせたるを」

**をーぼそ** 尾細【名】〔動〕『その形によりていふ』**いわし**(鰯)を云ふ。〔女の語〕續山井「牛頭(ズ)馬頭(ズ)に負げぬ尾細の頭がち」

**をほどーのーみこと** 袁本杼命【名】〔人〕を**おほどのみこと**(男大迹命)に同じ。

**をほに** 紫苑【名】〔植〕**しをん**(紫苑)【一】に同じ。〔古語〕延喜式「紫苑。乃之。之乎爾。乎保爾」

**をーぼね** 尾骨【名】馬の尾の附根(ツケ)。

**をーま** 牡馬【名】**をうま**(牡馬)の略。(牝馬(メ)に對して) 和名「牡馬。一名、駿馬、乎萬」

**をーまぎ** 緒卷【名】【一】**ちぎり**(千切)【二】を云ふ。〔關東の方言〕【三】**つむ**(紡綞)を云ふ。〔關東の方言〕

**をーまく** 男幕【名】外幕(ソトマク)の、第一の幅(ノ)の上端と、右横の端とは、表へ、左横の端は裏へ折返して縫ひたるもの。陽の幕。(女幕(メマク)に對して)

**をーまつ** 男松・雄松【名】〔植〕**くろまつ**(黑松)に同じ。(女松(メマツ)に對して)

**をーみ** 小忌・小齋【名】『小忌(ミイ)の略』【一】新嘗會・大嘗會の時、官人中、卜定せられたる者の、齋戒を特に細密・嚴重にし、小忌衣を著けて、親しく神事に奉仕すること、又その官人。をみびと。(大忌(オホ)に對して) 江次第「小忌王卿」 枕「小忌のきんだちも、いとなまめかし」【二】**をみごろも**(小忌衣)の略。源氏「頭中將・藏人少將など、小忌にて、青摺の袴ども、清げに目やすくて」

小忌の御湯【句】大嘗會の時、天皇の、悠紀(ユキ)殿と主基(スキ)殿とへ進御あらせらるる前に、廻立殿(クワイリウデン)にて召したまふ御湯。初度の御湯濟みたる後、御齋衣(吊の御束帶)に召し替へられ、悠紀殿の御儀終了の上、更に廻立殿に立歸りて、再度の御湯を召したる上、主基殿に入らせたまふ。皇后宮には、頓宮に於ける大忌(オホ)の御湯のみにて、小忌の御湯を召したまふことなし。(「大忌の御湯」に對して)

小忌の衣【句】**をみごろも**(小忌衣)に同じ。

小忌の夜【句】『公卿等、前夜の大嘗宮にては、諸司の小忌、卽ち官給の小忌衣を著用せしに對して、この夜は、自費の美しき小忌衣を著用して列席するよりいふ』新嘗會・大嘗會の翌日、豐明節會(トヨノアカリノセチエ)の行はるる夜。榮花「小忌の夜は、宰相の五節(ゴセ)に、黃(ワウ)の汗衫(カザ)、おとなの唐衣(ギヌ)に、皆、青摺をして、赤紐をなんしたりける」

**をみがは** 小見川【名】〔地】【一】下總國香取(カト)郡にある町。千葉縣の管下。利根(ネ)川の西岸。內田氏の舊藩地。【二】明治の初年設置の縣の一。下總國小見川藩の地に立てしもの。**にひばり**(新治)【三】參照。

**をーみ** 苧績・麻績【名】麻を績むこと。〔古語〕萬葉「打麻(ウツヂ)やし麻績の兒らあり衣(ギ)の寶の子らが打つ栲(タ)延(ヘ)へて織る布」延喜式「麻績等機殿祭並雜用料」

**をみーごろも** 小忌衣【名】小忌【一】の人の、裝束の上、卽ち、男は袍の上、女は唐衣(カラギ)の上に著用する衣。形は狩衣(カリギ)の如くにて、白き布に、春の草木・小鳥などを、山藍にて摺り、右の肩に、赤紐とて、紗を疊みて、鮑結(アハビ)にし、泥繪(エディ)など書きたるを、二條、前方に垂れ、袖の中央に、紙捻(ヨリ)を垂る。赤紐は、古代に神を祭る者の襷を掛けし名殘なりといふ。諸司の小忌とて、朝廷にて調製せられ、當日出仕の大官・公卿等、大嘗宮に出入する諸司に配付し著用せしむるものは、身二幅(フク)、袖一幅、長さ帶に達するのみなれども、神祇の官人等の小忌とて、自費にて製し、布衣の如くにて、身一幅、袖二幅、丈、頗る長く、又、出納(スヰナ)の小忌或は形(カタ)の如き小忌といひて、祭儀に關與する小臣・女官の著用する略式のものもあり。

(もろごみを)

をみ

風雅「忘れずよ豐明(トヨカ)の小忌衣きつつなれしは昔なれども」

**をみな** 女【名】**をんな**(女)に同じ。 記「肩書(カキ)濃(コ)に書垂れ逢はししをみな」字鏡「嬢、美女也、良女也、乎美奈」

**をみなーがみ** 女神【名】照照坊主(テリテリ)の類。紙にて人形を作り、晴を祈るものなりといふ。〔古語〕蜻蛉「をみな神には、衣縫ひて奉ることよかなれ」

**をみなーかみながー** 女髮長【名】**あま**(尼)【一】に同じ。〔齋宮の忌詞〕

**をみなーこ** 女子【名】**をんなご**(女子)に同じ。〔古語〕紀「女子、ヲミナコ」 「じ。

**をみなーし** 女郎花【名】〔植〕次條【一】に同

**をみなーへし** 女郎花・敗醬【名】【一】〔植〕敗醬(ヘシ)科に屬する多年生の草。莖の高さ三四尺に至る。葉は、根生するものと、莖より生ずるものとあり。前者は、卵形又は長楕圓形にして、粗鋸齒あり、長き葉柄を有し、後者は、羽狀に深裂して、一乃至三對の裂片に分れ、各裂片は、通常線狀披針形にして、全緣又は粗鋸齒を有し、銳尖なり。枝對生し、八九月の頃、枝梢ごとに、淡黃色の小花、やや圓錐狀をなせる二出聚繖花序をなして開く。山野に自生し、又、栽培して、觀賞用に供す。嫩葉は食ふべし。秋の七草の一。ちめぐさ。をみなべし。をみなめし。和名「女郎花、和歌云、女倍之」【二】襲(カサ)の色目の一。表は、經(タテ)青、緯(ヨコ)黃、裏は青。女房の五衣(イツツ)にては、すべて、表は女郎花色、裏は青にて、單(ヒトヘ)は紅とす。秋季に用ふ。をみなへしいろ。榮花「女郎花の唐衣(カラ)」【三】**あはもち**(粟餅)を云ふ。〔女の語〕

**をみなーべし** 女郎花・敗醬【名】〔植〕前條【一】に同じ。

**をみなへしーあはせ** 女郎花合【名】女郎花を用ひて行ふ花合(ハナアハセ)。古今「朱雀院の女郎花あはせを詠みて奉りける」

**をみなへしーいろ** 女郎花色【名】**をみなへし**(女郎花)【一】に同じ。榮花「をみなへし色の汗衫(カザ)」

**ををみなへしーくわ** 敗醬科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。これに屬するものは概ね草本、稀に半灌木又は灌木。凡そ九屬・二百七十五種を含み、我國には、女郎花(ヘシ)・鹿子草(カノコ)の二屬・十種餘を產す。

**をみなへしーづき** 女郎花月【名】陰暦七月の異稱。藏主集「十二月異名。七。女郎花月。たなばたの契の色にたぐへてや

名を得し事もをみなへし月」

**をみなへし-ものがたり** 女郎花物語【名】〔書〕日本書紀を始とし、中古近世の勅撰集・草子類の中より、名高き女子の事實を選び、物語體に記せるもの。三卷(六册)。著者は藤原大貳と傳ふ。

**をみなめ** 妾【名】**をむなめ**(妾)を見よ。

**をみなめし** 女郎花・敗醤【名】Ⅰ〔植〕**をみなへし**(女郎花)Ⅱの轉。Ⅱ謠曲の一。平城天皇の御代に、男山に住める小野頼風といふ者、京の女と契りしが、その女、頼風の許を訪ひしに、頼風は、他の女の許に赴きて不在なりと、家人の答へしより、女、怨みて、水に投じて死せしに、その脱ぎ棄てたる山吹がさねの衣、その夜朽ちて女郎花生ひ出でし由、藻鹽草などに見えたる傳説に本づきて、九州の一僧の、都見物の途次、男山に參詣して、二人の亡靈に遭ふことを作れるもの。

**を-みね** 小峰【名】『**を**(小)は接頭語』**みね**(峰)に同じ。萬葉「相摸嶺(サガ)のをみね見過(グ)し忘れ來る妹が名呼びて吾(ア)を哭(ネ)し泣くな」

**をみ-びと** 小忌人【名】小忌Ⅱの人。公任集「をみ人のゆふかたかけて行く道を同じ心にたれ眺むらん」

**を-むかひ** 峰向・尾向【名】峰と峰と相對すること。〔古語〕萬葉「足引の山鳥こそは峰向に妻どひすとへ」

**をむな-め** 妾【名】妻の代りとして使ふ下女。てかけ。めかけ。をうなめ。〔古語〕和名「妾、乎无奈女。非二正嫡一故以接爲稱。一云、有二接嫡一之名也、小妻也」

**をん** 牡・雄【名】『**を**(牡)の音便』**をす**(牡)をいふ。(牝(ヒ)に對して)〔關西の方言〕

**をん** 溫【名】Ⅰあたたかきこと。溫暖。Ⅱ心のやさしきこと。溫厚。溫和。溫にして厲し【句】『論語の、述而篇に「子溫而厲、威而不レ猛」とあり』溫厚なる性質の中に、嚴肅なる所あり。

**をん-あんぱふ** 溫罨法【名】〔醫〕溫湯又は硼酸水等の溫水に浸したる布片を用ふる罨法。局所の榮養亢進、神經痛及び痙攣などに効あり。(冷(レイ)罨法に對して)

**をん-えき** 溫疫・瘟疫【名】はやりやまひ。やくびやう。疫癘。溫疾。

**をん-が** 溫雅【名】おとなしく上品なること。

**をん-が** 遠賀【名】〔地〕筑前國の九郡の一。郡役所を折尾(オリ)村に置きたり。

**をん-がい** 怨害【名】怨靈(ヤウリヤウ)の危害。太平記「七卒・怨靈どもの所爲なるべしとて、その怨害を止め」

**をん-がは** 遠賀川【名】〔地〕筑前國の東部及び豐前國の西部を正北に流れ、筑前國蘆屋(ヤシ)町にて響灘(ヒビキナダ)に注ぐ川。筑前國嘉穗(カホ)郡の嘉麻(カマ)山に發する嘉麻川と、豐前國の英彦(ヒコ)山に發する彦山(ヒコ)川との合流に係り、流程十五里二町、九里の間、舟楫を通ず。貨物運漕の頻繁なること、九州第一なり。

**をん-かく** 溫覺【名】〔醫〕觸覺の一。溫暖に對するもの。人體の溫度、即ち大略攝氏三十七度を標準として、溫覺と冷覺とを分つ。(冷覺に對して)

**をん-がん** 溫顏【名】溫和なる顏つき。やさしき顏いろ。

**をん-き** 遠忌【名】三年忌以上の正忌(キヤウ)。遠關日。

**をん-き** 溫氣【名】あたたかみ。暖氣。

**をん-き** 瘟鬼【名】**やくびやうがみ**(疫病神)に同じ。

**をん-ぎやう-ぢ** 遠行地【名】〔佛〕十地(ジフチ)の中の第七位。純無想觀に住して、世間と二乘との有相(ウサウ)の行(ギヤウ)を、遠く出過するもの。

**をん-きよう** 溫恭【名】おだやかにて、愼深きこと。

**をんきよう-ゐん** 溫恭院【名】〔人〕**さくがほいへさだ**(德川家定)の謚。

**をんくん-はふ** 溫燻法【名】燻製の方法の一。鹽を甘くし、高き溫度を用ひて、短時間にて製するもの。肉柔かに、味美なれども、鹽甘きが故に、永き貯藏に堪へず。(冷燻法に對して)

**をん-くわん** 溫官【名】役德(ヤクトク)ある官。「溫職。」

**をん-けつ** 溫血【名】〔動〕『英 Warm blood』あたたかき血液(冷血に對して)

**をんけつ-どうぶつ** 溫血動物【名】〔動〕體溫の、外圍の溫度に關係なく、殆ど一定不變に保續する動物。主として、內部の新陳代謝の旺盛なると、防寒・防熱の裝置の完備せるとに因る。哺乳類及び鳥類、これに屬す。(冷血動物に對して)

**をん-とう** 溫厚【名】やさしく篤實なること。

**をん-けん** 穩健【名】文章・言論の、穩當にして、健全なること。

**をん-げん** 溫言【名】溫和なる言語。

**をん-こ** 溫故【名】Ⅰ舊く聞く所、已に知る所を、常に、溫むる如く、尋繹すること。Ⅱ故き事がらを尋ね調ぶること。溫故・知新【句】「故(コ)きを溫(タ)ねて、新しき知るに同じ。

**をん-こ** 溫乎【貌】柔和なるさま。溫然。

**をんこう** 溫公【名】〔人〕**しばをんこう**(司馬溫公)を見よ。

**をん-ごく** 遠國【名】**ゑんごく**(遠國)に同じ。平家「遠國に流されたまふに」

**をんごく-がた** 遠國方【名】遠國の方。狂言「秀句大名」「遠國方の者」

**をんごく-ひにんてか** 遠國非人手下【名】德川時代に、庶人に科せし附加刑の一。非人手下の中にて、最も重し。即ち、遠國に遣して、非人手下とせしもの。

**をんごく-ぶぎやう** 遠國奉行【名】**ゑんごくぶぎやう**(遠國奉行)に同じ。

**をんこ-だう** 溫故堂【名】〔人〕**はなはほきいち**(塙保己一)の號。

**をんごく-やく** 遠國役【名】遠國にて執務する役、又その役人。

**をんこ-やき** 溫故燒【名】美濃國赤坂邊より燒きて出す磁器。萬古燒に似て、色白く、質硬からず。

**をんこ-りう** 溫故流【名】槍術の流儀の一。

**をん-ざ** 穩座【名】『穩は平穩の義』Ⅰ古、大饗などの時、規式の勸杯濟みたる上、別に集まりて、雜談を交へ、感興を擅にする場處。(宴座に對して)Ⅱ蔬菜・果物などの、季節過ぎて後、最後まで殘りてある物の譬。

穩座の饗【句】前條Ⅰに於ける饗應。林歌(ガウ)の饗。

穩座の初物(モノ)【句】『**をんざ**(穩座)Ⅱを見よ』**をはりはつもの**(終初物)に同じ。傾城色三昧線「七十に及んで分知(ワケシリ)といはるるは、をんざの初物なり」

**をん-ざ** 溫座【名】そのまま座席に居て、動かぬこと。東鑑「見二傍輩之所レ爭、難二溫座一歟」

**をん-し** 遠師【名】〔人〕**ゑをん**(慧遠)の敬稱。

**をん-し** 溫史【名】〔書〕『司馬溫公の著なるよりいふ』**しちつがん**(資治通鑑)の異稱。

**をん-じ** 遠志【名】〔植〕**ひめはぎ**(姫萩)を、藥用に供する時にいふ稱。

**をん-しう** 怨讐・怨讎【名】**ゑんしう**(怨讐)に同じ。太平記「父子・兄弟、怨讐を結び」

**をん-じう** 溫柔【名】Ⅰ溫かにして、柔かなること。Ⅱ『禮記の經解篇に「溫柔敦厚、詩敎也」とあり』溫和にして柔順なること。

**をんじう-きやう** 溫柔鄕【名】『飛燕外傳に「后進二合德一。帝大悅、以二輔屬體無レ所レ不レ靡、謂二之溫柔鄕一。曰吾老二是鄕一矣、不レ能下效二武帝一更求中白雲鄕上也」とあり』Ⅰねや。閨房。Ⅱいろざと。遊里。

**をんじ-しん** 遠志浸【名】遠志(ヒメハギ)を原料として作りたる浸劑。但し、遠志がセネガ根(コン)に類似せるため、誤用せらるるものにて、日本藥局方にては、決してセネガ根に代用するを許さず。

**をん-しつ** 溫室【名】Ⅰあたたかきへや。溫暖ならしむる設備ある室。Ⅱ『獨 Warmhaus』外氣以上の高溫度を要する植物を培養し、又、普通の時期以外に發芽・開花又は結實せしむるを目的として、その設備をなせる建物。大抵は、屋根及び側面の上部を、硝子にて覆ひて、日光を通過せしめ、熱帶の蘭科植物の如き、高溫を要するものに對しては、ストオブの助をも藉る。Ⅲ〔佛〕**よくしつ**(浴室)に同じ。

太平記「上人、温室に入りて、瘡(サウ)をたてられけるが」

**をん-しつ** 温疾・瘟疾【名】**をんえき**(温疫)に同じ。保元「温疾大切の間」

**をん-しふ** 温習【名】繰り返してさらふこと。復習。

**をん-しん** 温神【名】〔醫〕皮膚の神經の、温度の變化を感知する機能。「讀」

**をん-しや** 温藉【名】**うんしや**(温藉)の誤

**をん-しやう** 温床【名】〔農〕人工の熱を加へて造る苗床(ナハ)。をんどこ。

**をん-じやう** 温情【名】なさけ深くやさしき心情。

**をんじやう** 園城【名】次條㊁の略。平家「園城は、分限なきによって、南都へ赴かしめたまふ間」

**をんやう-じ** 園城寺【名】㊀近江國大津市の西方にある寺。天台宗寺門派の總本山。伽藍の西に井あり、天智・天武・持統の三天皇の御産湯(ユヅ)の水を汲みたるによりて、初、御井寺(ミヰデラ)ともいひ、後、又、三井寺(ミヰデラ)といふ。弘文天皇の皇子大友の興多王の創建にして、大友村主の氏寺たり。貞觀中、智證大師中興、延曆寺の別院に列したれど、智證大師の説く所は、眞言の旨を交へしかば、相合はずして、正曆四年以後、延曆寺と分離す。一に、寺門又は寺といふ。㊁名香の一。沈(ヂン)の一種。

**をんじやう-しゆぎ** 温情主義【名】資本家が、勞働者に對して、冷酷なる態度を取らず、情誼にもとづく協同・親和によりて、社會問題の解決を圖らんとする主義。

**をん-じやく** 温石【名】㊀昔、蛇紋石(モンジヤク)などを、火にて燒き、布片に包みて、懷中し、冬日、寒を凌ぎ、身を温むるに用ひしもの。やきいし。㊁次條の略。㊂〔前項㊁の温石は、懷中する時、襤褸などに裹みしよりいふ〕襤褸を纏へる人を嘲りていふ語。

夏の温石【句】〔温石は、夏は使用せぬよりいふ〕つめたき物の譬。

〔夏の温石と女郎の心は、つめたいがちの物なれば〕



**をんじやく-いし** 温石石【名】信濃國高遠(タカトヲ)の山中より産し、黑色にて、温石㊁として用ふるに適すといふ石。

**をん-じゆん** 温順【名】温和にして從順なること。すなほ。

**をん-しよ** 温書【名】書籍の温習をなすこと。さらへよみ。

**をん-しよく** 温職【名】役得(ヤクク)ある官職。温官。

**をん-しよく** 温色【名】㊀温和なる顏色。㊁〔美〕〔英 Warm colour〕見る人に温暖の感じを與ふる色。即ち、赤を中心として、それに近き色。(寒色に對して)

**をん-すゐ** 温水【名】あたたかき水。

**をん-せい** 温凄【名】㊀あたたかさと、すずしさと。燠涼。㊁〔禮記の曲禮篇に「凡爲二人子一之禮、冬温而夏凊」とあるに本づく〕父母に仕へて、冬はあたため、夏は涼しくすること。

**をん-せん** 温泉【名】㊀〔地〕地熱のため、熱くなりて湧き出づる泉。多少、鑛物の氣を含み、その質によりて、浴する時は、種種の病氣を治す。あたたかき鑛泉。いでゆ。(冷泉に對して)㊁**をんせんば**(温泉場)の略。

**をんせん** 温泉【名】〔地〕〔道後(ダウゴ)温泉あるによりていふ〕伊豫國十二郡の一。郡役所を松山市に置きたり。「乎。

**をん-ぜん** 温然【貌】温和なるさま。温

**をんせんば** 温泉場【名】温泉湧き出でて、病客などの來り浴する所。湯治場。

**をんせん-やど** 温泉宿【名】温泉場の宿屋。

**をん-ぞう** 怨憎【名】**ゑんぞう**(怨憎)に同じ。盛衰記「宿罪・怨憎の報とはいひながら」

**をんぞうゑ-く** 怨憎會苦【名】〔佛〕八苦の一。怨み憎む者に會する苦痛。十訓「人間の八苦の中には、怨憎會苦といへるは、物の恨めしきなり」

**をん-たい** 温帶【名】〔地〕〔英 Temperate zone〕地球上にて、南緯・北緯、二十三度半より、六十六度半までの間の、氣候温和なる地帶。南なるを南温帶、北なるを北温帶といふ。(熱帶・熱帶に對して)



**をんたい-しよくぶつ** 温帶植物【名】〔植〕温帶に繁殖するに適せる植物。温帶林の植物。

**をんたい-りん** 温帶林【名】〔地〕**ぶなたい**(椈帶)に同じ。

**をん-たう** 温湯【名】㊀あたたかき湯。體温に適したる湯。㊁〔漢書の高祖紀に「庚戌幸二温湯一、壬子獵二于驪山一」とあり〕

**をんせん**(温泉)㊁に同じ。

**をん-たう** 穩當【名】㊀理に適ひて、穩かなること。妥當。㊁**をんじゆん**(温順)に同じ。㊂**ちぢん**(遲鈍)に同じ。〔俚語〕

**をん-だん** 温暖【名】あたたかなること。

**をんだん-がひ** 温暖飼【名】火氣にて室内を煖めて、蠶を飼ふこと。飼育日數短縮の利あれども、蠶の體質を虛弱ならしめ、病原菌を繁殖せしむる缺點り。(清涼飼に對して)

**をん-ていゐん** 温庭筠【名】〔人〕支那晚唐の詩人。字は飛卿。その詩、李商隱と並び稱せられ、温李といふ。これを作るに、敏快、八たび手を叉して、立ろに八韻を成す。故に、又、温八叉の名あり。好んで、側體・艷曲を作る。

**をん-てき** 怨敵【名】うらみある敵。平家「平家の一類を滅ぼして、朝家の怨敵を退けよ」

**をん-てん** 温天【名】温暖なる天候。(寒天に對して)甲陽軍鑑「温天の時は、風ほど嬉しきものはなけれども」

**をん-ど** 雄鳥【名】**をんどり**(雄鳥)の略。(雌鳥(メンドリ)に對して)狂言(福渡)「をんどがうたうたら、起しませい」

**をん-ど** 温度【名】㊀暖さの程あひ。㊁寒暖計にて測れる、暖さの度數。**ぜったいをんど**(絕對温度)參照。

**をんど-かんかく** 温度感覺【名】〔醫〕**をんかく**(温覺)に同じ。

**をん-どこ** 温床【名】〔農〕**をんしやう**(温床)に同じ。

**をん-と-して** 温として【副】〔詩經の秦風小戎篇に「言念二君子一、温其如レ玉」とあり〕温然として。心やさしく。



**を-ん-どり** 雄鳥【名】**をどり**(雄鳥)の音便。(雌鳥(メンドリ)に對して)

**をん-どる** 温突【名】〔温突の字の朝鮮音〕朝鮮及び滿洲地方にて、床下に坑道を築き、火を焚けば、火氣、床下に籠りて、煖房の用をなすやうにしたるもの。

**をんどれ** 【名】**をろん**に同じ。

**をんな** 女【名】〔英 Woman〕㊀女性の人。をなご。女子。婦人。(男に對して)㊁かくし女。いろをんな。情婦。㊂しもべの女。下女。婢。

女禁制【句】〔女人(ニヨ)禁制〕に同じ。

女賢(サカ)しくて、牛賣られぬ【句】次條に同じ。出世樣「女賢しくて、牛賣れぬとは、御分(ヨブ)が事ぞ」

女賢(カ)しくて、牛賣り損ふ【句】女の賢しきは、大體に通ぜぬため、事を仕損ずる事多し。〔諺語〕

女三人寄れば姦(カシマ)しい【句】女はとかくに喋る者にて、三人も寄り合へば喧しき程なりとの意。〔諺語〕俳諧新選百萬「鬼灯(ノボホ)も女三人に姦しき」

女にて【句】その人を、假に女なりと見て。源氏「君は、……、直衣(ナホ)ばかりを、しどけなく著なしたまひて、紐なども打捨てて添ひ臥したまへる御火影(ホカ)、いとめでたく、女にて見奉らまほし」

女に白い齒は見せられぬ【句】女には、心を許しがたし。女には笑顏を見せがたし。〔諺語〕

女になる【句】㊀女、年頃になる。裳著(モ)などを行ふ年齡に達す。(男になる)に對して)源氏「をさなき女のありしが、年頃も、人知れず尋ね侍りしかども、聞き出でてなん、女になるまで過ぎにけるを」㊁月經通じて、一人前の女となる。(男になる)に對して)

女に三(ツ)の家無し【句】「女は三界に家無し」に同じ。〔諺語〕

女の足駄にて作れる笛には、秋の鹿

寄る【句】女の色香には、男の迷ひやすき形容。〔諺語〕 徒然「女の穿(ウ)ける下駄にて造れる笛には、秋の鹿、必ず寄るとぞいひ傳へはべる」

女の一念、岩をも通す【句】女は、弱きやうなれども、執念の深し。〔諺語〕

女の髪の毛には、大象も繋がる【句】『大威德陀羅尼經の卷十九に「一切女人爲レ不レ除レ欲、乃至以二女人髮一爲レ作二綱維一、香象能繫。況丈夫輩」とあり』「女の足駄にて作れる笛には、秋の鹿寄る」に同じ。〔諺語〕 徒然「女は、髪のめでたからんこそ、人の目立つべかめれ。……、されば、女の髪筋を縒れる綱には、大象もよく繋がれ」

女の腐ったやう【句】潔からぬ氣象の男子を罵りていふ語。「女郎の腐ったやう」參照。

女の子【句】一女の子ども。むすめ。をんなど。 俳諧新選(太祇)「春駒や男顔なる女の子」 二若き女。をんなど。 三特に、酒宴の席に侍して、その興を助くる、若き女。即ち、藝妓・酌婦など。

女の猿智慧【句】「女の智慧は鼻の先」に同じ。〔諺語〕

女の魂【句】鏡を、女の精神の宿るものとしていふ語。(「男の魂」に對して)

女の力と首の無い石佛【句】役に立たぬものを並べ擧げていへる語。〔諺語〕 曾我會稽山「女の力と首の無い石佛外の用に使はれぬ。何の役に立たぬ物」

女の智慧は後(アト)へ廻る【句】女の智慧は敏捷ならざるものなり。「下種(ダネ)の智慧は後から出る」參照。〔諺語〕

女の智慧は鼻の先【句】女は淺慮なる者なり。をんなふんべつ(女分別)參照。〔諺語〕

女の情(ナサケ)に蛇が棲む【句】女は執念ぶかきものなる形容。〔諺語〕

女の日記【句】女の書きたる日記。假名にて書きたる日記。(「男の記錄」に對して)

女の話は一里限【句】女の話題の範圍は、甚だ狹きものなり。〔諺語〕

女の目には、鈴を張れ【句】「男の目には絲を引け。女の目には鈴を張れ」を見よ。

女は相身互【句】女は、互に他を慈む心を持つやうにありたし。〔諺語〕

女は相身互事【句】前條に同じ。天の網島「女は相身互事、切られぬ所を思ひ切り、夫の命を賴む、賴む」

女は衣裳・髪形【句】女の美しさは、最も多く衣裳と頭髪の結ひぶりとに關係す。〔諺語〕

女は、氏無くて、玉の輿【句】次條の略。〔諺語〕

女は、氏無くて、玉の輿に乘る【句】「氏無くして玉の輿」に同じ。〔諺語〕

女は賣物【句】『「賣物には、花を飾れ」參照』女は、畢竟、美しく裝ひて、嫁入先を待つ者なるに過ぎず。〔諺語〕

女は、髪・頭・姿の上盛【句】次條に同じ。〔諺語〕 一代女「女は、髪・頭・姿の上盛といへり」

女は髪形【句】女の美しさは、最も多く、頭髪の結ひぶりに關係す。〔諺語〕 重雛子「黑髪の目出たからんこそ、女はめやすかるべしと、徒然草にもあるといの。とかく、女は髪かたち」 「よ。

女は京【句】「人は武士、女は京」を見よ。

女は下げて育てよ【句】女は、萬事に控目にすべき者なれば、生れたる家の格式以下に躾けて育つべし。〔諺語〕

女は三界に家無し【句】女は、五障・三從の束縛ありて、天地間に自由なる境地無し。〔諺語〕

女は地獄の使【句】『法華經題目抄に「華嚴經云、女人地獄使」、とあり』女の、色香を以て、男を墮落せしむること多き形容。〔諺語〕

女は化物【句】女は、化粧によりて、人の目を惑はす者なり。〔諺語〕 五人女「とかく、女は化物、姫路の於佐賀部狐(オサカベ)も、却って眉毛よまるべし」

女は鼻の先【句】「女の智慧は鼻の先」に同じ。〔諺語〕 胸算用「惣じて、女は鼻の先にして、身代たたまる宵まで二提灯(ヤウチヂン)」

女は春を憐む【句】『河海抄に、毛詩の註を引きて、「女感二陽氣一春思レ男、男感二陰氣一秋思レ女」とあり』女は、春を好む。〔諺語〕 源氏「女は春を憐むと、古き人の言ひおきはべりける、げに、さなん侍りける」

女は藤【句】「男は松、女は藤」を見よ。

女は門開【句】女は、一家一門を繁榮ならしむる基なれば、めでたきものなり。〔諺語〕 狂言(連尺)「女は門開と申して、めでたいものでござる」

女は會釋(ヤエシ)に餘れ【句】女は、何事にも、差し控へて振り舞へよ。(「男は辭儀に餘れ」に對して)〔諺語〕

女を拵ふ【句】情婦を持つ。

女を斷つ【句】男、祈願などのために、女に接することを止む。女を斷物(モノ)にす。

新しき女【句】もだあんがある(一)に同じ。

覺めた女【句】『坪内逍遙の、ハンキン作「最後のドムラン家」を譯したる時、始めて用ひし語』自覺の程度高き女。「新しき女」の、更に一層徹底して、智慮あり、意志强く、隨ひて、冷靜にして、熟することなき性質のもの。

七人の子は生すとも、女に心許すな【句】たとひ、妻として永く連れ添ひて、多くの子を生みたる者にても、女は、容易に信用し難し。〔諺語〕 雪女五枚羽子板「古人の詞に僞なし。七人の子は生すとも、女に心許すなとは、今、身の上にて知られたり」



をんなあふぎ 女扇【名】女持の品として、特に造りたる、形、小く、きやしやなる扇。をなごあふぎ。(男扇に對して) 生寫朝顔話「夥しいお金、その上、結構な女扇」

をんなあんじや 女案者【名】訴訟ごとなどの案文を作る女。 世間娘氣質「訴訟の目安を書きならひて、女案者となり」

をんなあんま 女按摩【名】女にして、按摩の業を營む者。

をんなあるじ 女主人・女主【名】女にて、一家の主人たる者。主婦。女戸主。(男主人に對して) 梵げすの家の女あるじ、痴れたる者添ひしも、をかし」

をんないうひつ 女右筆・女祐筆【名】女にして、文案・記錄の事に熟達せること、又その女。 一代女「京に女祐筆とて、……、戀をさかりの若男、やりくりの文章を賴まれ」

をんないしや 女醫者【名】ぢよい(女醫)に同じ。 世間娘氣質「氣の通りたる女醫者」

をんないぬ 女犬【名】めすの犬。(男犬に對して)



をんないまがは 女今川【名】〔書〕今川狀に擬して、女の訓戒たるべき條條を、假名文にて記し、繪を加へたるもの。一卷。澤田きちの著。元祿十三年の刊行。德川時代に、女の手習用として行はれたり。

をんなうま 女馬【名】めうま(牝馬)に同じ。(男馬に對して)

をんなおび 女帶【名】女の用ふる帶。幅廣し。(男帶に對して) 一代女「女帶、六尺五寸に限りしに、近代長うして」

をんなおや 女親【名】ははおや。めおや。(男親に對して) 曾我「女親とて賤みぬ侯か」

をんなかうきやう 女孝經【名】〔書〕一 をんなしきよ(女四書)(三)を見よ。 二孝經に擬へて、女の孝貞の道を、平易なる假名文にて記せるもの。一卷。十八章より成る。奥書に、北越芝藩尾本先生の著と見ゆ。文政五年の刊行。

をんなかうぶり 女冠【名】女の敍位。(男冠に對して)〔古語〕 榮穗「女かうぶりに、一階越えて、內侍のかみ、三位の加階したまふ」

をんなかうや・女高野【名】むろふじ(室生寺)を見よ。

をんながく 女樂【名】女の奏する音樂。女樂(ヤウガク)。 源氏「この人人の箏(ソウ)・琵琶の音も合はせて、女がく試みさせん」

をんなかげきよ 女景淸【名】遊里など

に對して)

**をんなげいしや** 女藝者【名】女の藝者。三味線藝者。藝妓。げいこ。げいしや。(男藝者に對して)〔徳川時代の語〕奴師勢之「女藝者の事を、昔は師子といふ。明和・安永の頃より、藝者と呼び、者(ヤ)などとしやれたり」

**をんなげた** 女下駄【名】女の穿く下駄。(男下駄に對して)

**をんなご** 女子【名】一女の子。むすめ。をうなご。めのこご。めなこ。女兒。(をのこ子に對して) 土佐「この家にて生れしをんな子の、諸共に歸らねば」二代男「女子ども呼びて、床を取らせ」 二若き女。(をのこ子に對して) 二代男「女子どもを呼びて、床を取らせ」

**をんなごころ** 女心地【名】次條に同じ。源氏「女ごころに任せて、隈なく語りつくせば」

**をんなごころ** 女心【名】女の柔和なる心。婦人の思慮。をんなぎ。をなごぎ。をなごごころ。(男心に對して) 謠曲「女郎花」「女心のはかなさは、都を、ひとりあくがれ出でて」

女心あり【句】女に接して、その情愛を知りてあり。(「男心あり」に對して) 十訓「世尊寺の阿闍梨仁俊とて、顯密知法にて、尊き人おはしけるを、鳥羽の院に候ひける女房、仁俊は女心ある者の、空聖(ソラヒジリ)だちけると申しけるを、かへり聞きて、口をしと思ひければ」

**をんなごし** 女輿【名】女の乘用する輿。女房ごし。をんなのりもの。 謠曲(舞内侍)「女輿と見えて來り候」

**をんなごしやう** 女小性【名】女の小性。二代男「裳切(ヤセン)したる女小性」

**をんなごしゆ** 女戸主【名】女にて、戸主たる者。をんなあるじ。

女戸主は三年限【句】女の力にて、一家を立つる事の困難なる形容。〔諺語〕

**をんなごと** 女事【名】女の爲す事。源氏「繪合……、かやうの女ごとにて、みだりがはしく爭ふに」

**をんなごども** 女子供【名】女と子供と。



「男宮おはします程なりけり。……、女君、……と苦しくおぼせど」

**をんなきんだち** 女君達【名】女のきんだち。貴族のむすめ。(男君達に對して) 宝積「女きんだち、女宮より始め奉りて」

**をんなきやく** 女客【名】女の客人。をんなまらうど。(男客に對して) 二代男「夜更けて、女客立ち歸り」

**をんなぎらひ** 女嫌【名】男の、女に接することを嫌ふこと、又その男。(男ずきに對して) 若風俗「斯かる女ぎらひも、世に、又あるものかな」

**をんなぎれ** 女切【名】女の片はし。をんなけ。をんなっきれ。(男切に對して)

**をんなぐさ** 女草【名】〔植〕**せんきゆう**(川芎)に同じ。

**をんなぐさし** 女臭し【形一】一女の衣類・持物などに、女に特有なる臭氣移り著きてあり。(男臭しに對して) 二男にてありながら、女めきてあり。女らし。めめし。(男臭しに對して)

**をんなぐじ** 女公事【名】女の訴へ出たる公事。(男公事に對して) 沙石集「女公事ばかりして、男公事は許されて」

**をんなくせまひ** 女曲舞【名】**をんなまひ**(女舞)に同じ。 文正元年四月十六日後法興院記「於三千本棧敷、殿有レ御、見二物女曲舞一」

**をんなくひ** 女食【名】女をくひ物にすること。多くの女を欺き弄ぶこと。又、その行爲ある人。をんなっくひ。をんなたらし。

**をんなくび** 女首【名】女の首。(男首に對して) 雪女五枚羽子板「この一つの女首」

**をんなぐるひ** 女狂【名】女色に耽ること。をんな三昧。(男狂に對して) 一代女「浮世寺のをかしさ、……、魚鳥も喰ひ、女狂もその夜に限りて」

**をんなぐるま** 女車【名】女の乘る牛車(ヤセ)。女房ぐるま。(男車に對して) 伊勢「この車を、女車と見て、寄り來て、とかくなまめく間に」

**をんなけ** 女氣【名】女のけはひ。女の居る樣子。をんなぎれ。をんなっけ。(男氣



**をんながな** 女假名・女假字【名】『古は、主として、女の用ひしよりいふ』**ひらがな**(平假名)に同じ。(男假名に對して)

**をんながはら** 女瓦【名】**めがはら**(牝瓦)に同じ。(男瓦に對して)

**をんなかぶき** 女歌舞伎【名】女の演ずる歌舞伎。出雲お國の於國歌舞伎より始まり、京都にては、村山又八・松本名左衛門・京屋萬太夫・大坂太郎左衛門など、次第に、舞臺を設けて、これを演じ。又、六條傾城町の遊女佐渡島正吉といふ者、容色、殊にすぐれ、四條河原に舞臺を設け、多くの遊女を集めて演ぜしめ、後には、江戸にも來りて、さかんに演じ、遂には風俗を亂すに至りしより、寛永六年十月、官命を以て、女淨瑠璃・女舞と共に禁止せられ、若衆(ワカシ)歌舞伎、これに代りて起れり。若風俗「お國が女歌舞伎も絶えて、若衆をあまた抱へ」

**をんながほ** 女顔【名】一女の顔。(男顔に對して) 新可笑記「四十路(ヨソヂ)に餘る女顔、今も、昔の形殘りて」二男なれども、やさしくて、女の如く見ゆる顔つき。(男顔に對して)

**をんながみ** 女神【名】**めがみ**(女神)に同じ。(男神(ガミ)に對して)

**をんながみゆひ** 女髮結【名】女にて、女の髻を結ふを業とする人。(男髮結に對して) 覽夫見聞記「寛政の初は、女がみゆひといふ者、至って稀なり」

**をんながら** 女柄【名】織物の、女の著用に適するがら。(男柄に對して)

**をんなぎ** 女氣【名】**をんなごころ**(女心)に同じ。(男氣に對して)

**をんなぎた** 女義太【名】次條の略。

**をんなぎたいふ** 女義太夫【名】義太夫節を、女の語ること、又その女の太夫。をんなぎだ。たれぎた。

**をんなぎみ** 女君【名】一貴族のむすめ。ひめぎみ。(男君に對して) 大鏡「その御腹に、男君三人、女君のかがやく如くなる、おはせし」二身分ある人の妻。おくがた。きたのかた。(男君に對して) 源氏



にて、女の、逃げんとする男の頭巾などを掴みて引き戻すを、三保谷(ハヤ)と平景清との錦引(ヒキヤウ)に見立てていふ語。天の網島「仲居のきよが、これを見て、三保谷が著たりける頭巾の錦を取外し、取外し、二三度逃延びたれども、……、ごんせと止めたる女景清」

**をんなかご** 女駕籠【名】**ぢよちゆうかご**(女中駕籠)に同じ。若風俗「女駕籠の窓より、鹿子下髮(カノコサ)の、ちらりと透きうつりて」

**をんながさ** 女笠【名】女の用ふるものとして、寶曆の頃まで流行せし菅笠。(男笠に對して) 鹿塚談「女笠とて、菅にて、大きく、飛脚の三度笠やうなるを用ひたり」

**をんながさ** 女傘【名】女の用ふるための傘。我奏「女傘は、轆轤もと、練絲(クヤリ)萌黄、五色の絲、三段に卷く。骨、黑塗」

**をんながた** 女方【名】一男と女とに組を分けたる場合の、女の仲間。女の組。(男方に對して) 源氏「我ながら、ことの外にほれぼれしくおぼし知らるる事多かるまぎらはしに、女がたにぞおはします」二妻の緣家。(男方に對して) 落葉「嬉しくて、めでたき女がたなりと思ひて」

**をんながた** 女形【名】芝居にて、專ら女にいでたつ俳優。をやま。(男形に對して) 若風俗「女形の藤田皆之丞を、生きながら女にせまほし」

**をんなかたぎ** 女容氣【名】〔書〕**かうしよ**

**をんなかたぎにんな** 女色五人女に同じ。

**をんなかたびら** 女帷子【名】女の著用する帷子。(男帷子に對して) 三代男「女帷子二つ」

**をんなかっぱ** 女合羽【名】女の著用する合羽。

**をんなかづら** 女鬘【名】女の用ふるかづら。三代男「舞臺子、……、女かづらして出づる時は」

**をんなかづら** 女葛【名】〔植〕**せんきゆう**(川芎)に同じ。和名「芎藭、水草。於無奈加豆良、香草也」(和名抄のこの「於」の字、假名違なり)

**をんなーごんりやう** 女今良【名】女の今良。(男今長に對して)

**をんなーころし** 女殺【名】一女を殺すこと。(男殺に對して) 二女子をして、死をも辭せざらしむる程に、情あり又は美しき男。をなごころし。(男殺に對して)

**をんなころしあぶらぢごく** 女殺油地獄【名】淨瑠璃の一。大阪本天滿町の油商河内屋の次男與兵衛といふ者、繼父德兵衛の甘やかしに增長して、放蕩の結果、借錢に苦しめられ、同町内の同商豐島屋(ヤウ)七左衛門の妻お吉に無心を言ひかけて、容れられざりしより、遂にこれを殺害するに至りし事を作れるもの。近松門左衛門の作。筋は單純なれども、近松の世話物中、一二を爭ふ傑作なり。

**をんなーごゑ** 女聲【名】一女の物いふ聲。(男聲に對して) 發心集「あはれ、さ申ししものを、……といふを聞けば、女ごゑなり」 二男の聲の女のに似たるもの。(男聲に對して)

**をんなーざいもん** 女祭文【名】女の語る祭文。膝栗毛「見世物(モノ)・齒磨賣・女祭文」

**をんなーざか** 女坂【名】神社・佛閣のある高所に通ずる坂の二つある場合の、勾配緩かなる方。(男坂に對して)

**をんなーさかもり** 女酒盛【名】女の酒盛。五人女「こなたには女酒盛、男とては淸十郎ばかり」

**をんなーざかり** 女盛【名】女の、年頃なること。嫁婚するほどの年齡の女。(男盛に對して) 一代女「過ぎし頃、我、女ざかりに枕並べし男」

**をんなーさじき** 女棧敷【名】女のみ居るべき棧敷。(男棧敷に對して) 新可笑記「女棧敷は、簾帳・ちく簾(ベス)を、心の外に打上げ」

**をんなーざむらひ** 女侍【名】女に似て、依怙(エコ)の沙汰多き侍。めめしき武士。甲陽軍鑑「詮索なしに、むざとわが贔屓(ヒイキ)を譽むる女侍」

**をんなーざんまい** 女三昧【名】をんなぐるひ(女狂)に同じ。

**をんなさ**

**をんなーさるがく** 女猿樂【名】女の演ずる猿樂。

**をんなし** 女し【形二】柔和にて、いかにも女としての性質を具へてあり。女らし。(男しに對して)〔古語〕 源氏「いとおほどかに、女しきものから」 同「世の常の女しくなよびたるかたは遠くやと」

**をんなーしごと** 女仕事【名】女の仕事。をんなわざ。 唐船噺今國姓爺「女仕事の拂取りて」

**をんなーしじやう** 女師匠【名】女にて、藝道などの師匠たる者。 俳諧新選(梅史)「山吹や女師匠の片折戸」

**をんなーしじよ** 女四書【名】〔書〕一後漢の曹大家(サウケ)の女誡と、唐の宋若昭が、名を曹大家に託して撰進せし女論語と、明の成祖の皇后徐氏の內訓と、淸の瑯琊の王晉舛の丹劉氏の女範とを、王晉舛の纂輯せるもの。一卷。 二前項の書の內、女範を除き、唐の陳邈の妻鄭氏が、その女姪のために作れる女孝經を加へたるもの。一卷。 三前項の書に就きて、その大要を、假名文に譯したるもの。一卷。明曆初年の刊行。闕略に過ぎて、本意を失ふに至れる所尠からず。

**をんなーしばね** 女芝居【名】女役者の演ずる芝居。(男芝居に對して)

**をんなーしま** 女島【名】一によじのしま(女護島)に同じ。二代男「危き海上を越え、無景の女島に渡りたまへり」 二遊女屋の異稱。 柳樽「女島まびく藥は正氣散」

**をんなーしまん** 女自慢【名】女が、己の容貌を誇ること。(男自慢に對して)

**をんなーじむゐん** 女事務員【名】女にて事務員たるもの。

**をんなーしやうぐわつ** 女正月【名】正月十五日を、女の年禮の始の日としていふ語。〔京都の語〕

**をんなーじやうるり** 女淨瑠璃【名】一女の語る淨瑠璃節。 二特に、德川時代の初期に、女が一座の主となりて興行せし淨瑠璃語。寛永六年十月、女歌舞伎・女舞と共に禁止せられたり。

**をんなし**

**をんなーしやしやう** 女車掌【名】女にて、電車・自動車などの車掌たるもの。

**をんなーしゆ** 女衆【名】一女たち。女ども。 二自己の妻。〔甲斐國の方言〕

**をんなーしゆんれい** 女順禮【名】女の順禮。 三代男「美しき女順禮」

**をんなーじよたい** 女所帶・女世帶【名】女の所帶。女のみにて家を構ふること。をなごじよたい。(男所帶に對して)

**をんなーじよゐ** 女敍位【名】によじよゐ(女敍位)に同じ。

**をんなーすがた** 女姿【名】一女の姿。(男姿に對して) 謠曲(三輪)「暫し迷の人心や、女姿と三輪の神」 二男なれども、姿の、女のに似たるもの。(男姿に對して)

**をんなーずき** 女好【名】一男の、色めきて、女を好むこと、又その男。(男好に對して) 二女の嗜好に適すること。(男好に對して)

**をんなーせうがく** 女小學【名】〔書〕女子の修身上の大小の注意を、假名文にて記せるもの。一卷。佐藤愃一郎の著。

**をんなーせつぶん** 女節分【名】『節分の日に詣づる代りなるよりいふ』京都及びその附近にて、正月十九日、女の、吉田の疫神に詣づること。

**をんなーだいがく** 女大學【名】〔書〕女子修身の要義、齊家の心得を、假名文にて綴りたるもの。一卷。貝原益軒の著と傳へたれど、實は、後人が、益軒の童子訓より抄出せるもの。德川時代に、女子一般の修身書として行はれたり。

**をんなーたいこ** 女太鼓【名】女のたいこもち。女の幇間。 二代男「女太鼓の藤」

**をんなーだうか** 女蹈歌【名】たうか(蹈歌)を見よ。

**をんなーだうらく** 女道樂【名】女ぐるひの道樂。道樂。放蕩。

**をんなーだけ** 女竹【名】〔植〕めだけ(女竹)に同じ。

**をんなーだて** 女達・女伊達【名】女にて、男だての行爲ある者。女俠。 梅盧「此所の姉御(アネ)は女達で、いろいろ人人の世話をしなさるが」

**をんなーだてらに** 女だてらに【副】『だてらは接尾語』女にも似合はず、亂暴に。

**をんなーたび** 女旅【名】女の旅行。 源氏十二「段長生殿「道はかどらぬ女旅」

**をんなーため** 女溜【名】『ため(溜)』を見よ』江戸時代の牢獄にて、重病に罹れる女囚を入れおきし場所。

**をんなーだより** 女便【名】女のたより。又、女のたよりとする人。 空蟬「一人侍るはらからなどをこそ、女だよりにはすれ」

**をんなーたらし** 女誑【名】女をたらすこと、又その行爲ある男。をんなくひ。

**をんなーだるま** 女達磨【名】女を、達磨大師の坐禪姿に描けるもの。 千紅萬紫「女達磨の繪に題す」

**をんなーぢから** 女力【名】女のかよわきこと。

**をんなーづか** 女塚【名】女の死骸を埋めし塚。(男塚に對して) 謠曲(女郎花)「この男塚・女塚について、女郎花のいはれも候」

**をんなーづかひ** 女使【名】古、加茂祭・春日祭に、勅使として差遣せられし內侍。(男使に對して) 金葉「女使せし世の事などいひて」

**をんなーつき** 女付【名】をんなぶり(女振)に同じ。(男付に對して)

**をんなーつきれ** 女切【名】をんなきれ(女切)の音便。

**をんなーつくひ** 女食【名】をんなくひ(女食)の音便。

**をんなーつけ** 女氣【名】をんなけ(女氣)の音便。(男振に對して)

**をんなーつぷり** 女振【名】をんなぶり(女振)の音便。(男つぷりに對して)

**をんなーづれ** 女連【名】女のみにて連れ立つこと。(男連に對して) 根岸志具佐「先へ行きたる器量を譽むれば、跡から來る女連、己が事かと心得て」

**をんなーで** 女手【名】一をんながな(女假名)に同じ。(男手に對して) 源氏「草(ウ)のも、ただのも、女手を、いみじう書きつくしたまふ」 二をんなわざ(女業)に同じ。

**をんなーてがた** 女手形【名】德川時代に、

女の用ひし、關所の通(ツヒ)手形。男のよりは嚴重にて、年齢・性質・旅行の目的、目的地・人相・日限など、精細に記入する例なりき。をんなとほりてがた。**でをんな**(出女)〔三〕參照。一代男「今切(キレ)の女手形」

**をんなてがた-しようもん** 女手形證文【名】德川時代に、女手形の交付を願ひ出づる者の、これを發行する職權ある者に呈出せし證文。

**をんな-てたち** 女出立【名】女の出立。女の扮裝。(男出立に對して) 五人女「今風の女出立、……、衣裝くらべの姿自慢」

**をんな-てっかい** 女鐵拐【名】女の、衣裳・化粧などにより、若返りて見ゆる者。一代女「脇ふさぎを、又明けて、昔の姿に歸るは、女鐵拐といはれしは、小づくりなる生れつきの德なり」

**をんな-てんか** 女天下【名】一家又一團の者の中に、女が權力を振ふこと。

**をんな-とうぐん** 女東宮【名】**によとうぐう**(女東宮)を見よ。

**をんな-どころ** 女所【名】女の居る所。源氏「御簾(ミス)は參る。女所にて、しとけなく、よろづの事習ひたる」

**をんな-どち** 女達【名】**をんななかま**(女仲間)に同じ。源氏「紀の守、國に下りなどして、女どちのどやかなる頃」

**をんな-とほりてがた** 女通手形【名】**をんなてがた**(女手形)に同じ。

**をんな-ども** 女共【名】〔一〕女の人人。衆女(シユウジヨ)。〔二〕『**をんなしゆ**(女衆)參照』自己の妻。狂言「貴聲」「女どもの聲がした。戻さっしやれい」

**をんな-ともだち** 女友達【名】女の友だち。後撰「常に消息(ソウソク)通はしける女友だちのもとより」

**をんな-ながえ** 女長柄【名】下簾ありて、古、貴族の婦女の乘用せし長柄輿。くるまながえ。

**をんな-なかま** 女仲間【名】女たちの仲間。をんなどち。

**をんな-ねこ** 女猫【名】**めねこ**(女猫)に同じ。(男猫に對して)



**をんな-のう** 女能【名】〔一〕女の演ずる能樂。〔二〕能樂にて、女に扮する役。

**をんな-のりもの** 女乘物【名】**をんなごし**(女輿)に同じ。

**をんな-はらばい** 女傍輩【名】女の傍輩。一代女「同じ枕の女はらばいも、目覺まして、手づから寢道具を疊みあげて」

**をんな-ばら** 女原【名】『**ばら**は接尾語。原は假借の文字』女の人たち。源氏「夜語らずとか、女ばら」

**をんな-ばら** 女腹【名】女兒の多く生るる腹。(男腹に對して)

**をんな-ひでり** 女日照・女旱【名】『**ひでり**(日照)〔三〕を見よ』意に適する女の乏しきこと。女房ひでり。(男日照に對して)

**をんな-ぶ** 女ぶ【動上二自】女らしくなる。(男ぶに對して)〔古語〕 取替「眉拔き、鐵漿(カネ)附けなど、女びさせたれば」

**をんな-ぶだう** 女武道【名】芝居にて、武道の嗜みある忠義なる女に扮する役。

**をんな-ふで** 女筆【名】**をんなもじ**(女文字)〔二〕に同じ。用明天皇壞人鑑「女筆の散し書」

**をんな-ふみ** 女文【名】女の書きたる手紙。(男文に對して) 源氏「まんなを走り書きて、さるまじきどちの女ぶみに、なかば過ぎて書きすくめたる」

**をんな-ふんべつ** 女分別【名】女の、淺はかなる分別。をんなれうけん。

**をんな-ぶり** 女振【名】女の容貌。をんなつき。をんなっぷり。(男ぶりに對して)

**をんな-べや** 女部屋【名】〔一〕女の平生居る部屋。〔二〕下女の寢起する部屋。〔三〕**をんならう**(女牢)に同じ。〔德川時代の牢内の語〕

**をんな-ほうばい** 女朋輩【名】**をんなはうばい**(女傍輩)を見よ。

**をんな-ほふし** 女法師【名】**あま**(尼)〔一〕に同じ。今昔「女法師一人」

**をんな-まかせ** 女任【名】物事を、女の爲すに任せおくこと。

**をんな-まじり** 女交【名】男の中に、女の加はりてあること。一代女「女まじりに、殿も、宵より御機嫌のよろしく」



**をんな-まひ** 女舞【名】昔、女が一座の主となりて組織せし舞舞(マヒ)。寛永六年十月、女歌舞伎・女淨瑠璃と共に禁止せられたり。をんなせまひ。

**をんな-まらうど** 女客人【名】**をんなきやく**(女客)に同じ。(男客人に對して) 和泉式部續集「女まらうどの詣(マ)で來て、物語などして歸りぬるに」

**をんな-みこ** 女御子【名】女の御子。ひめみや。をんなみや。(男御子に對して) 源氏「后(キサキ)失せたまひぬ。心細き樣にておはしますに、只、わが女御子たちと同じつらに思ひ聞えんと」

**をんな-みや** 女宮【名】前條に同じ。(男宮に對して) 空穂「女きんだち・女宮より始め奉りて」

**をんな-むき** 女向【名】女の使用に適すること、又その品。(男向に對して)

**をんな-むしや** 女武者【名】女の武者。女にて、甲冑を裝ひ、武器を執るもの。謠曲「巴」「巴といひし女武者」

**をんな-むすび** 女結【名】諸結(モロムスビ)の一。男結と同樣にて、左の方より結び始む。

**をんな-め** 妾【名】**をむなめ**(妾)の音便。

**をんな-めかし** 女めかし【形二】女めきてあり。女らし。宇治「細やかに女めかしくおはすれども」

**をんな-めく** 女めく【動四自】女のやうに見ゆ。

**をんな-めん** 女面・女假面【名】女に扮つ者のかぶる能面(ノウメン)。(男面に對して)

**をんな-もじ** 女文字【名】〔一〕**をんなかな**(女假名)に同じ。(男文字に對して) 〔二〕女の筆跡。をんなふで。(男文字に對して)

**をんな-もち** 女持【名】品物の、きやしやに、女の持つに適するやうに造れるもの。

**をんな-もの** 女物【名】女の著用し又は携帶するに適せる物。

**をんな-もやう** 女模樣【名】衣類などの、女向なる模樣。(男模樣に對して)

**をんな-やく** 女役【名】〔一〕女の務むべき役目。(男役に對して) 一代女「表使の女役を勤めし時」〔二〕**をんながた**(女形)に同じ。(男役に對して)



**をんな-やくしや** 女役者【名】女の俳優。女優。(男役者に對して)

**をんな-やま** 女山【名】**いんざん**(陰山)に同じ。(男山に對して)

**をんな-やもめ** 女寡・女寡婦【名】**やもめ**(寡婦)に同じ。(男鰥に對して)

女やもめに花が咲く【句】寡婦となれば、再嫁の世話などする者多くして、却って、もてはやさる。(「男鰥に虹が涌く」に對して)

**をんな-ゆ** 女湯【名】錢湯の、女の入るべき方の浴場。(男湯に對して)

**をんな-らう** 女牢【名】女囚を入れおく牢屋。

**をんな-らし** 女らし【形二】〔一〕態度など、女たるに相應して、しとやかなり。をなごらし。(男らしに對して) 〔二〕男なれども、姿・性質、女に似たり。(男らしに對して)

**をんな-るにん** 女流人【名】女にして、流罪に處せられたる者。

**をんな-れうけん** 女料簡・女了簡【名】**をんなふんべつ**(女分別)に同じ。

**をんな-ろくしやく** 女六尺・女陸尺【名】昔、貴人に仕へて、その乘物を、奥より玄關まで舁く役を勤めし下婢。家の定紋を染め出したる看板を著用する習なりき。(男六尺に對して)

**をんな-わざ** 女業【名】女の爲す業。をんなごと。一谷嫩軍記「我を見つけて、無體の戀慕、だまし討たんも女業、かくの如く手にかかり」

**をんな-わらは** 女童【名】〔一〕女のわらは。女の兒供。めのわらは。をんなわらはべ。をんなわらんべ。をんなわらべ。土芥「女童なん、この歌を詠める」〔二〕女とわらはと。をんなこども。

**をんな-わらはべ** 女童・女童部【名】前條に同じ。空穂「逸物(キイザ)の者ども、女わらはべ」

**をんな-わらべ** 女童【名】前條の略。

**をんな-わらんべ** 女童・女童部【名】前前

條の音便。太平記「兒法師(ヤシボウ)・女童部、此處・彼處に切倒され」

**をんなえ** 女繪【名】女の姿を書ける繪畫。(男繪に對して) 蜻蛉「女繪をかしく書けりけるがありければ」

**をんなをどり** 女踊・女躍【名】女の演ずる踊。

**をん-ねつ** 溫熱【名】だんねつ。暖氣。

**をん-ねん** 怨念【名】うらみの思。遺恨。

**をんのうれん** 【名】〔植〕**をんのれ**に同じ。

**をん-の-ざ** 穩座【名】**をんざ**(穩座)に同じ。「に同じ。

**をんのれ** 【名】〔植〕**をのをれかんば**(斧折樺)

**をんのれい** 【名】〔植〕前條に同じ。

**をんのれん** 【名】〔植〕前條に同じ。

**をん-ば** 穩婆【名】『鄉談正音に「鄉曰二生婆一、正曰二穩婆一」とあり』**さんば**(產婆)に同じ。

**をん-ぱう** 溫袍・縕袍・褞袍【名】わたいれ。ぬのこ。うんぱう。

**をん-はっさ** 溫八叉【名】**をんていぬん**(溫庭筠)を見よ。

**をん-び** 溫肥【名】〔農〕『纖維多くして、粗鬆多孔性なるがために、醱酵しやすく、その際、熱を發するよりいふ』馬糞を肥料として用ふるもの。熱性肥料。

**をん-びん** 穩便【名】一おだやかなること。險惡ならぬこと。十訓「法皇、この事聞しめして、甚だ穩便ならず、……、私の勝負、狼藉の至なりと仰せられて」二手數のかからぬこと。てがる。寛天見聞記「ここに五軒の娼家あり。至って穩便なる遊にして、藝者も無し、高笑・大聲を禁じ」

**をんめいてん** 溫明殿【名】**うんめいてん**(溫明殿)に同じ。「に同じ。

**をん-めん** 溫麪・溫麵【名】**たうへい**(湯餅)

**をん-や** 溫野【名】あたたかき野原。溫野に骨を禮す【句】〔佛〕某國の人、死して、その靈魂、天より下り來り、自己の死骨に花を散らし、これを撫でさすりて、生前、父母に老順、君に仕へて忠、三尊を敬し、師父の教に違背せず、能く我魂をして天に生れしめしが故に、今、もとの肉體に向ひて恩を謝すといひきといふ故事(譬喩經に出づ)。深野に花を供(ク)す。平治「溫野に骨を禮せし天人は、平生の善を喜び、寒林に骸(ネバ)を打ちし靈鬼は、前生(ゼンシン)の惡を悲む」「と。

**をん-り** 溫李【名】〔人〕溫庭筠と李商隱

**をん-りう** 溫溜【名】腕の背部にある灸穴。〔漢方醫の語〕

**をん-りやう** 怨靈【名】怨讐の念を有せる亡靈。正統記「花山院、俄かに世を遁れ、三條院の御目のくらく、この東宮の、斯く自ら退きたまひぬるも、怨靈のためなりとぞ」

**をん-りやう** 溫涼・溫凉【名】あたたかさとすずしさと。

**をん-りやう** 溫良【名】溫和にしてすなほなること。

**をん-りやう-しや** 轀輬車【名】車の旁に窓ありて、これを開けば、涼しくなり、閉づれば、溫くなるやうに造りたるもの。古、支那秦の始皇帝、行幸さきにて崩御ありし時、喪を祕して、その遺骸を載するに用ひたりといふ。

**をん-りよう** 遠陵【名】十陵の外なる、普通の山陵。ゑんりよう。(近陵(キンリヨウ)に對して)

**をん-る** 遠流【名】三流(サンル)の一。最も重き流罪。伊豆・安房・常陸・佐渡・隱岐・土佐などに流ししもの。江戸時代には、流罪を、一般に、遠島(ヱンタウ)と呼びたれど、なほ、伊豆の七島、薩摩の五島、肥後の天草、隱岐・壹岐・佐渡の六箇所に送るを、六所遠流(ロクショヱンル)と呼びたり。平家「都に置いては叶はじ、遠流にせよとて、伊豆國へぞ流されける」「たさと。

**をん-れい** 溫冷【名】あたたかさと、つめたさと。

**をん-わ** 溫和【名】一溫かにして和ぎたる氣候。暖和。和暖。二性質の、溫順にして、柔和なること。

**をん-わ** 穩和【名】性質の、おだやかに和ぎてあること。おとなしきこと。

**をん-わ-てうてい** 穩和調停【名】〔法〕國際間の紛爭を、穩和なる手段によりて調停すること。



**をん-をん** 溫溫【貌】『詩經の小雅小宛篇に「溫溫恭人、維德之基」とあり』性質のおだやかなるさま。

**をん-めい** 汚名・汙名【名】けがれたる名。惡しき評判。臭名。

**をめき-ぐさ** をめき草・莨菪・莨菪子【名】〔植〕**はしりごろ**(走野老)に同じ。

**をめく** 喚く【動四自】**わめく**(喚く)に同じ。字治「追剝ありて、人殺すやとをめく」同「をめき叫びあひたり」

**をめる** 【動自】叱らる。〔尾張國・遠江國の方言〕「ぼね。

**をもと** 尾本【名】馬の尾の附根(ネツケ)。を

**をもと-じろ** 尾本白【名】馬の毛色の一。尾本の白きもの。

**を-もの** 食物【名】『**をしもの**(食物)の略なるべしといふ』**おもの**(御物)一に同じ。〔古語〕紀「粮、ヲモノ」

**をもの-がは** 雄物川【名】〔地〕**おものがは**(御物川)に同じ。

**を-や** 小屋【名】小き家。こいへ。萬葉「さし燒かむをやのしき屋にかき棄てむ破薦(ヤモモ)を敷きて」

**を-や** 【助】一を四と反語の助詞やとの連結して、或云なるものを、豈云云せんやの意を示す語。「云云せん」の意を示す語句を、この語の下に言ひ續くる場合と、その意なる語句を省略する場合とあり。「波高きを、豈、船を出すに堪へんや」などの如く、「云云せん」の意なる語句を中間に插入して、「を」と「や」とを離隔せしむる場合の用法は、ここに特に言ふ必要なし。「さるは、理の當然なるをや」萬葉「廣瀨川袖つくばかり淺きをや心深めてわが思へらむ」方丈記「川原・白河・西の京、もろもろの邊地などを加へていはば、際限もあるべからず。いかに況や、諸國七道をや」二漢文の「況於二云云一乎」の直譯『於て」といふ語の下に續け、上に副詞「況や」を伴なひて、前項の中の、「云云せん」の意の語句を略したる場合と同義に用ふる語。「況や、理の當然なるに於てをや」延慶本平家「草木愁ひたる色あり。況や、霜凌の松に於てをや」三を一と疑問の助詞やとの連結したる語。太平記「魯酒薄くして邯鄲圍まるとは、かやうの事をや申すべき」



**を-やしろ** 小社【名】小きやしろ。小社(ヲヤシロ)。散木「祈ること七のをやしろころころとことなはせよく口ばしるなり」

**をやす** 【動四他】をえしむ。病み衰へさす。〔古語〕紀「被二蛇毒一而、ヲロチニヲヤサレテ」

**をやべ-かは** 小矢部川【名】〔地〕越中國にある川。西礪波(ニシトナミ)郡の南端、大門(オホモ)山の北側に發し、北流し、石動(イヒナヅ)町に至り、高岡市の北隅を過ぎ、庄(ショウ)川の分流と合して、射水(イミ)川となり、伏木港に至りて、日本海に注ぐ。流程十八里。石動・高岡・石動の各地の間は、船舶の通航盛んなり。平家「木曾、わが身は、一萬餘騎で、をやべの渡(ワタ)をして」

**を-やま** 小山【名】一**をんながた**(女形)に同じ。〔德川時代より明治初年にかけての語〕二遊女。娼妓。於山(ヲヤ)。〔京都・大阪邊の語〕四〔地〕下野國にある町。下都賀(シモツケ)郡の南隅。奥州街道の一驛。鐵道東北線の停車場あり。水戸線・兩毛線の分岐點たり。もと天王宿と呼び、小山氏累代城守の地にして、城址は町の西端、思川の東端にあり。又、德川家康の、上杉景勝を征せし時、この地を本陣としたり。五〔地〕駿河國駿東(スントウ)郡にある町。國の東北隅に位する山間の一部邑。富士瓦斯紡績會社の大工場あるによりて名高く、鐵道東海道線の駿河驛(舊稱、小山驛)あり。御殿場(ゴテバ)驛と相摸國山北(ヤマキタ)驛との中間に位し、山北との間は、隧道七箇所を數へ、東海第一の險と稱せらる。六〔地〕近江國にありといふ地。散木「紅葉せし小山の里の戀しさにしぐれてのみも明け

暮すかな」 ㊀姓氏の一。藤原秀郷の裔。秀郷、平將門追討の功により、下野守に任ぜられて、子孫、遂に下野の住人となり、下野大掾政光、小山莊に住して、小山四郎と稱し、遂に姓氏となる。政光の子に朝政あり、源頼朝に仕へて戰功多く、子孫世襲して、隆政に至り、康暦二年、宇都宮基綱と私鬪の結果、足利氏に滅さる。一族結城(ユウキ)泰朝、家名を繼ぎたれども、後、甚だ振はず、或は上杉氏に、或は北條氏に屬し、天正十八年終に滅ぶ。

**をやま** 尾山 【名】〔地〕加賀國金澤の古稱。

**をやまかた** 小山形 【名】をやま(小山)㊁に同じ。

**をやまがへり** 小山返 【名】網懸(アガカ)の鷹の、正月十五日より内に打落せるもの。

**をやまぐるひ** 小山狂 【名】いうぢよぐるひ(遊女狂)に同じ。〔京都・大阪邊の語〕天の鍋島「やい、治兵衛、女房・子供の身の皮剝ぎ、その金でをやま狂」

**をやまぐるま** 雄山車 【名】〔植〕かせんさう(歌仙草)に同じ。

**をやまじんじや** 尾山神社 【名】加賀國金澤市西町に鎭座せる別格官幣社。祭神は前田利家。攝社金谷神社に、利長・利常を合祀す。もと、利家の薨後、同族子弟等、私かにその靈を卯辰(ウダツ)山の麓に祀りて、越中國烏帽子峯鎭座の八幡社の遷座と稱せしを、明治四年、廢藩の後、卯辰山より今の地に遷ししもの。

**を-やまだ** 小山田 【名】『を(小)は接頭語』**やまた**(山田)に同じ。(主に歌にいふ) 萬葉「小山田の池の堤に插す柳成りも成らずも汝(ナ)と二人はも」

**をやまだともきよ** 小山田與清 【名】〔人〕國學者。字は文儒(ブンジュ)、松屋(マツヤ)、又、知非齋と號す。武藏國多摩郡小山田村の人。田中本孝の子。江戸の豪商高田氏を嗣ぎ、肥後侯の儒臣古屋昔陽に漢籍を學び、後、村田春海の門に國學を攻め、最も考證に精しく、高田の家、資財豐かなりしため、藏書都下第一と稱せられ、水戸烈公の知遇を得、扶桑拾葉集を註し、又、八洲文藻を撰みて上る。文政九年、病を以て、家務をその孫清常に讓り、本姓小山田氏に復して、小山田將曹、又、外記といふ。弘化四年歿す。年六十五。著書・群書搜索目錄・擁書漫筆等、五十餘種あり。

**をやまだの** 小山田の 【枕】山田には、鹿の來りて穀物を荒すをおどすことあるより、人に物を言ひきこゆる意なるおどろかすにかけていふ。後撰「小山田のおどろかしにも來(コ)ざりしをいとひたぶるに逃げし君かな」

**をやまともまさ** 小山朝政 【名】〔人〕武將。藤原秀郷の裔。通稱は、小四郎。晩に薙髮して、生西と稱す。下野國の人。源頼朝に屬し、屬ば戰功あり。累進して、從五位下・下野守に至り、後、又、播磨守護に補せらる。承久の役、元老を以て鎌倉に留まり、軍謀に與る。曆仁元年卒す。年八十(一説に八十四)。

**をやまにんぎやう** 小山人形 【名】㊀承應の頃、小山次郎三郎といへる人、江戸の淨瑠璃芝居にて、若き女の人形を、巧に使ひしこと。㊁若き女の形に造れる人形。

**をやまやうくわい** 小山養快 【名】〔人〕國學者。字は儀、伯鳳と號す。大阪の人。博く和漢の書に通じ、竹取物語抄を著はす。安永の末年歿す。年二十五。

**をやまりんだう** 小山龍膽 【名】〔植〕龍膽科に屬する多年生の草。高さ一尺内外。葉は對生し、葉柄を缺き、全緣にして、先端狹き披針形をなし、三縱脈あり。上部の葉腋に、龍膽のに似て小形なる紫碧色の花を著く。我國、北部の高山に自生す。

**をやまゑ** 小山繪 【名】遊女を描きたる繪。於山(オヤマ)繪。

**を-やみ** 小止 【名】をやむこと。少し止むこと。源氏「例の雨の、をやみなく降りて」

**を-やむ** 小止む 【動四自】『を(小)は接頭語』少し止む。ちよつと止む。をだゆ。源氏「つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとど水嵩(ミカサ)まさりて」 夫木「斧の音もしばしはをやめまきもくの檜原(ヒバ)の山に時鳥鳴く」

**を-やらふ** 【動下二他】『食(ジキ)遣(ヤ)ふの義』飲食す。〔古語〕 紀「美飲喫哉、此云二于摩羅儛烏野羅市屢柯佞一」

**をゆ** 痒ゆ・瘙ゆ 【動下二自】病みて衰へ弱る。〔古語〕 記「神倭伊波禮毘古(イハレビコ)の命、倏忽(カニ)にをえまし、また、御軍(イクサ)も、皆、をえて伏(ヒ)しき」 和名「瘙臥、乎江不世理」

**をゆみごしよ** 小弓御所 【名】下總國千葉郡の今の生實(オサネ)村にありし、足利義明の館。館の址は、村の西北部にあり、方五町、壘壕なほ存して、一郭をなせり。「御弓(ユミ)御所」とも書く。

**をらす** 居らす 【動四他】すわる(坐る)㊁に同じ。〔肥前國長崎の方言〕

**を-らち** 雄埒 【名】流鏑馬(ヤブサメ)の馬場の、兩側の埒の中にて、射手の左方、即ち的方に、高く結ひたるもの。(雌埒(メラチ)に對して)

**をらで-がま** 遠羅天釜 【名】〔書〕『禪師が平生用ひし茶釜の名を取りて書名とせる由なれど、その意義は明かならず』白隱禪師が、その門徒に與へて、佛法の大本と禪の要義とを說けるもの。二卷。初の一卷には「答二鍋島攝州侯近侍一書」、「贈二遠方之病僧一書」、「答二法華宗老尼之問一書」を收め、續集に、「答下念佛與二公案一優劣如何之問上書」と、參學某の漢文にて記したる「答客難」とを載せたり。

**を-らん** 雄蘭 【名】〔植〕するがらん(駿河蘭)に同じ。

**をり** 檻 【名】『居(ヲ)の義』狂人・罪人・猛獸などを入れ籠めておくための圍(カコ)ひ。「物事を、折返し繰返し爲すこと。**やしほをり**(八鹽折)參照。〔古語〕 ㊁ころ。季節。氣候。〔節〕 新古今「をりにあへばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕ぐれの聲」 ㊃とき。ばあひ。をりふし。時機。枕「御聲などのすぐれたるにはあらねど、折の、ことさらに作り出でたるやうなりしなり」 新後撰「今ぞ見る君が心も折も得て春の時知る花の一枝」 ㊄をりはこ(折箱)の略。 ㊅をりびつ(折櫃)の略。 ㊆をりづめ(折詰)の略。

**折嬉し** 【句】嬉しくも、好き折に出あへり。(「折憎し」に對して) 源氏「姫君も、折うれしく思ひ聞えたまふに」

**折から** 【句】「折しも」に同じ。〔折柄〕 曾我「ひとり伏屋の軒の月、涙に曇る折からや、折知顔の鹿の聲」

**折からに** 【句】前條に同じ。〔折柄に〕 薩摩歌「行末思ふお吉(オキ)の涙、折からに泣く蚊の聲も、いとど涙を添へにけり」

**折心憂し** 【句】心憂き折に出あへり。 葉花「同じ死(シ)といへども、明順も、折心憂くなりぬることを、世の人、口安からず言ひ思ひけるに」

**折しまれ** 【句】「折しもあれ」の約。 空穗「内にも、折しまれ、斯かる頃しも」 小侍從集「しのびづま明くれば歸る折しまれ涙もよほす鶯の聲」

**折しも** 【句】恰もその時に。その時、丁度。折も折。時も時。をりふし。 枕「うたて、折しも、などて、さ、はたありけん」 源氏「折しも、例の少將、侍從の君の曹司(ゾウシ)に來たりけるを打連れて」

**折しもあれ** 【句】『他に然るべき折もあれと思ふにの義』前條に同じ。

**折憎し** 【句】あやにくにも、好からぬ折に出あへり。(「折嬉し」に對して) 落窪「なほも、よろしう降れかし。をりにくくもおぼえ侍るかな」

**折の物** 【句】をりづめもの(折詰物)に同じ。

**折も有らんに** 【句】「折しもあれ」に同じ。

**折も折** 【名】前條に同じ。

**折も折とて** 【句】前條に同じ。

**をり** 【名】『をりぼね(折骨)參照』はぎ(脛)に同じ。〔古語〕 醒異記「脚、乎利」

**をり** 【名】もとどり(髻)を云ふ。〔豐後國の

方言」

**をーり** 汚吏・汙吏【名】よこしまに慾深き「役人。

**をり** 居り【動佐變自】『居(キ)有りの約轉なるべし』一ゐる(居る)二に同じ。萬葉「あたらしき年の初に思ふどちい群れてをれば嬉しくもあるか」 寫忠百首「夏ながら氷をりける奥山はこの世の外の心ちこそすれ」 三ゐる(居る)に同じ。竹取「ここらのおほやけ人に見せて、恥見せんと、腹だちをり」 同「胸痛き事なしたまひそ、……と妬みをり」 四『居の字の直譯』にんず(任ず)に同じ。「自ら聖人を以て居る」

**をり** 折【助數】一紙など、幾枚かづつ折り重ねて分ちたる物の數。「紙一折」 二物を詰めたる折箱の數。「菓子一折」

**をりーあげ** 折上【名】〔建〕天井などを張るに、上方に至るに從ひて、曲線をなして、漸次突出する樣に造ること、又その造り方のもの。

**をりあげーがうてんじやう** 折上格天井【名】〔建〕次條に同じ。

**をりあげーくみてんじやう** 折上組天井【名】〔建〕折上の張り方なる天井。

**をりあげーだな** 折上棚【名】四十八棚の一。床間(トコマ)・書院などの脇に設くる、一種の化粧棚。

**をりーあし** 折脚【名】器物に取附けたる脚の、自由に折疊むことを得る造り方なるもの、又それを取附けたる器物。机飯臺などに、この造り方多し。

**をりーあひ** 折合【名】一をりあふこと。和合。和熟。 二〔文〕連歌にて、上の句と下の句とに、語路の調節のために、同音の助詞を用ひぬこと。 御製「折合とは、例へば、下の句に「花を見んとて山に入るなり」といふ句に、て留(メ)の上の句を附けず、又、前句の上句に、「秋の夜の明けはつるまで月を見て」といふ句に、「涙にくれて」などと、腰の折合にて、文字をすべからずといふ義なり。ての字に限らず、は文字・に文字・はね字、皆同前。果て・待て・捨てなどの、てにはならざるて留は、嫌はず。それも、「捨てて」、「果てて」などと、て文字附きたるは、嫌ふなり」

**をりあひーくぎ** 折合釘【名】中部屈曲し、襖・屏風などに緣を打附くるに用ふる釘。

**をりーあふ** 居合ふ【動四自】中よくなる。中なほりす。互に和合す。

**をりーいっーて** 折入って【副】ひたすら。切(セ)に。たって。わりいって。

**をりーいる** 折入る【動下二他】一折りて、中に入らしむ。をりこむ。 二一首の歌の中に、或言葉又は意味を插みて用ふ。よみこむ。

**をりーうづ** 折櫃【名】をりびつ(折櫃)の音便。源氏「御前のをりうづ物・籠物(コモ)など、右大辨なん承りて仕うまつらせける」

**をりーうづーもの** 折櫃物【名】をりびつもの(折櫃物)の音便。源氏「御前のをりうづ物・籠物(コモ)など、右大辨なん承りて仕うまつらせける」

**をりーえぼし** 折烏帽子【名】風折(カザ)烏帽子と侍(サブラヒ)烏帽子との併稱なるが如し。(立(タチ)烏帽子に對して) 壇鶴「折烏帽子に、布直垂(クダリヒ)といふ物うち著て」

**をりーえいさう** 折詠草【名】よこえいさう(横詠草)に同じ。

**をりーえだ** 枝枝【名】折り取りたる、木の枝。 源氏「梅の折枝、蝶・鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小袿(コウチキ)に」

**をりーえり** 折襟【名】洋服又はシャツの襟の、外側へ折れ返りたる形のもの。(立(タチ)襟に對して)

**をりーかがみ** 折屈【名】『をれかがみ(折屈)の轉訛』一をれまがり。屈曲。屈折。 二『身體の折り屈む意』行儀作法。坐作進退。動作。をりめ。

**をりーかく** 折掛く【動下二他】一折りて引掛く。「折懸く」 太平記「鎧に立つ所の矢二十三筋、簑毛の如く折りかけて」 二折返して寄せかく。敷本「風吹けば浪折りかけて歸りけり岸には植ゑじ山吹の花」 三折取らんとして、中途にて止む。をりさす。 俳諧類選・嘯山「折掛けし藤やぶらりと捻ぢながら」

**をりーかけ** 折掛【名】一折り掛くること。 二をりがね(折金)一に同じ。 三をりかけどうろう(折掛籠燈)に同じ。 曠野・探丸「折かけの火を取る蟲の悲しさよ」 四をりかけばた(折掛旗)に同じ。「折懸」

**をりかけーがき** 折掛垣【名】竹・柴などを折曲げて作りたる垣。しをりがき。 菅家御集「山里のをりかけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらん」

**をりかけーどうろう** 折掛燈籠【名】燈籠の一種。竹を折りかけて造りたるもの。をりかけ。 五人女「をりかけ燈籠かすかに、棚經(ナナヒギ)せはしく」

**をりかけーばた** 折掛旗・折懸旗【名】四半(シ)に似て、横手のある旗。をりかけ。

**をりーかさなる** 折重なる【動四自】折重ねたるやうになる。かさなり合ふ。

**をりーかさぬ** 折重ぬ【動下二他】折りて重ぬ。たたみ重ぬ。

**をりーかた** 折形【名】一床飾(ザトコカ)又は贈答の品を、紙にて包む時、その紙を種種に折る形式。時代・流儀、又、物品の如何により、種類甚だ多し。 二赤飯などを進物とする時、紙を折りたる中に、胡麻鹽などを包み入れて添ふるもの。 三兒女などの、紙を種種に折り疊みて、鶴・兜・蛙など、種種の形を造り出す遊戯。をりする。

**をりーがね** 折金【名】一刀の鞘に取附けて、刀を帶に差す時、鞘の脫け出ぬために、したる、木製・角製又は金屬製の鉤。おひかへり。おびどめ。かへりづの。さかさづの。 二旗の乳(チ)に通すために、一方は旗竿に添ひ、他の一方を乳に通すやうにせる折金。をりかけ。

**をりーがばん** 折鞄・折革鞄【名】折疊み得るやうに造りたるカバン。書類などを入れて携ふるに用ふ。

**をりーかへし** 折返【名】一折り返すこと、又その折目。 二來狀に對して、すぐさま返書を記して差出すこと。 三倍まし。二倍。「折返の利益」

**をりかへしーて** 折返して【副】來狀・問合などに對して、直ちに返事するにいふ語。

**をりーかへすー** 折返す【動四他】一折りて、二重になす。萬葉「白妙(シロタヘ)の袖折返し紅(クレナヒ)の赤裳(モカ)裾びき」 二くりかへす。再びなす。 枕「高砂(タカサゴ)を、をりかへし吹かせたまへば」

**をりーがみ** 折紙【名】一二つに折りたる紙。たたうがみ。 長詠「斯かる事なんありしとて、折紙に、御宸筆なりけるものを傳へ贈られたり」 二奉書・烏子(ハトコ)・檀紙(シタ)などを、横に二つに折り、進物の目錄、交名(キヤウメイ)などを記し、又、貴重品の鑑定、武藝・水泳術などの一定の資格認定の旨などを記すに用ふるもの、又それを記したる用紙。 東鑑「其交名、不レ載二折紙一候事、非二指武士一候之故也」 四言教講義「わが心の實を失ひて、四書・六經の文義のみを見るを、道と覺えたるは、折紙の目錄を太刀・馬なりと思ふに等し」 三貴重品の鑑定・保證、又それを得たる品。 四武藝・水泳術などの、一定の資格の認定、又その資格。

折紙が附く【句】一鑑定・保證の折紙が添はる。 二その物事の價値又は資格が定まる。

**をりーがみーがた** 折紙方【名】室町幕府の職制の一。將軍の贈遺の物に關する事務を掌りしもの。

**をりーがみーじやう** 折紙狀【名】交名(キヤウメイ)を、折紙一に記したるもの。をりがみ。 東鑑「註二交名於折紙一、被レ遣二帥中納言一……」

**をりーがみーだい** 折紙臺【名】進物の折紙を載する臺。

**をりーがみーだうぐ** 折紙道具【名】一折紙つきの、貴重なる道具。 雪女五枚羽子板「暫くありて、家内には、折紙道具失せたりと、家來は、面面、身開(ノガ)に」 二保證つきの、すぐれたる物事。

**をりーがみーだち** 折紙太刀【名】折紙つきの、名作の太刀。 長町女腹切「刀屋石見何がしとて、諸役御免の受領職、折紙太刀の御用まで、……」

**をりーがみーつき** 折紙附【名】一鑑定・保證の折紙の添はりてあること。 二その物事の價値又は資格の、現に定まりてあること。「折紙附の惡黨」

**をりーがみーもの** 折紙物【名】一折紙附の

物。〔三〕刀の價の、金四枚以上の極札(ごくふだ)あるもの。(札物(ふだもの)に對して)

**をりーから** 折柄【名】**をりふし**(折節)〔一〕に同じ。源氏「ものあはれなるをりからにて、取りて見たまふ」

**をりーから** 折柄【句】**をり**(折)の條下を見よ。

**をりーからど** 折唐戸【名】折疊み得るやうに造りたる唐戸。

**をりーきど** 折木戸【名】戸を折疊み得るやうに造りたる木戸。門出八島「竹垣に折木戸」

**をりーく** 折句【名】〔文〕〔一〕短歌の隱題(かくしだい)の一種。物の名の假名を、一字づつ、毎句の頭に、順に置きて詠むもの。例へば伊勢物語に、「かきつばた(燕子花)」を折句にして、「からころもきつつ馴れにしつましあればはるばる來ぬるたびをしぞ思ふ」といへる類。**くつかむり**(香冠)〔二〕參照。「折句の歌」柳樽「三圍(みめぐり)の雨は豐(ゆた)の折句なり」〔實井其角が、江戸三圍神社にての雨乞の句「夕立や田を三めぐりの神ならば」の各句の頭の音を合はすれば、「ゆたか」(豐年の義)の一語を成すとて、和歌の折句に擬へていへるなり〕〔二〕俳諧にて、判者が、十七文字の初の一句を出して、中の句と下の句とを附けしむるもの。

**をりーくぎ** 折釘【名】中部を直角に折り曲げて造りたる釘。柱・壁などに打附け、物を懸けおくに用ふ。をれくぎ。二代男「竹花入(ナイレ)懸けも折釘」

**をりーくぶ** 折燻ぶ【動下二他】**をりたく**(折焚く)に同じ。織留「栗栖野(くるす)・小野の萩柴折りくべて」

**をりーくほ** 折窪【名】鳥帽子の一部。鏃尖(やじり)の周圍の、窪みたる所。

**をりーぐわし** 折菓子【名】折詰にしたる菓子。其角「折菓子や井筒になりて雛の「じ。たけ」

**をりーげ** 折界・折堺・折斟【名】次條に同じ。

**をりーけい** 折界・折堺・折斟【名】紙に折目を附けて、罫とすること。をりげ。

**をりーこごみ** 折屈【名】**をりかがみ**(折屈)に同じ。



**をりーごと** 折琴【名】折疊み得るやうに造りたる琴。方丈記「いはゆる折琴・つぎ琵琶、これなり」

**をりーこみ** 折込【名】〔一〕折込むこと、又、折込みたる所。〔二〕〔文〕俳句にて、題の漢字二字を、一字は句頭に、他の一は句中に置きて作るもの。例へば、遠頭といふ題にて、「遠くから白く頭の目立つ富士」と作る類。

**をりこみーくわん** 折込鐶【名】檣に取附けて、折込綱を通す鐶。

**をりこみーだな** 折込棚【名】四十八棚の一。床間(トコ)・書院などの脇に設くる、一種の化粧棚。

**をりこみーづな** 折込綱【名】檣を立て或は倒すに用ふる綱。ねあげづな。

**をりこみーてこ** 折込手子・折込挺子【名】檣を立て或は倒し、又、碇をおろす時などに用ふる道具。

**をりーこむ** 折込む【動四他】折りて、内部に入らしむ。中に向けて折る。をりいる。

**をりーとむ** 折込む【動下二他】前條に同じ。

**をりーとんぶ** 折昆布【名】昆布を、折疊みたる形にして賣るもの。宇賀の昆布。

**をりーども** 折薦【名】折返して作りたる薦なるべしといふ。延喜式「折薦八百五十八枚、葉薦四百六枚」

**をりーしき** 折敷【名】〔兵〕**ひざうち**(膝打)の舊稱。「を取る。

**をりーしく** 折敷く【動四自】折敷の姿勢

**をりーしく** 折敷く【動四他】〔一〕木などを折りて、地に敷く。俳諧新撰(蟻山)「折敷いて御室(おむろ)に見ばや後の月」〔二〕折疊みて、敷き並ぶ。先代萩「紙折敷きて並ぶれば」「を見よ。

**をりーし-も** 折しも【句】**をり**(折)の條下

**をりしりーがほ** 折知顔【名】**ときしりがほ**(時知顔)に同じ。新後撰「見るたびに露けさまさる萩が花折知顔に何匂ふらん」

**をりーすけ** 折助【名】〔一〕武家のしもべ。膝要毛「上力(かりき)で盲祿(めくら)といふは、折助の事だは」



**をりすけーこんじやう** 折助根性【名】命令を等閑にして、容易に働かぬ根性。奉公人根性。

**をりすけーぜん** 折助膳【名】『折助などの、主として用ひしものなるよりいふ』**きりだめ**(切溜)〔二〕を云ふ。〔江戸の語〕

**をりすけーべや** 折助部屋【名】大名・旗本の屋敷にて、折助の集まり居る部屋。

**をりーすゑ** 折居【名】**をりかた**(折形)〔三〕に同じ。伊呂芝居「折すゑの鶴・鍬形の兜」

**をりーせつ** 折節【副】**をりふし**(折節)に同じ。

**をりーそふ** 折添ふ【動下二他】折りて添へて加ふ。五人女「里は冬構して、萩柴折添へて、降らぬ先より、雪垣など」

**をりーだい** 折臺【名】折箱を載する臺。

**をりーたく** 折焚く【動四他】折りて、火に焚く。をりくぶ。萬葉「磯の上(へ)に爪木折りたき汝(な)がためとわがかづき來(こ)し沖つ白玉」

**をりたくしばのき** 折焚柴記【名】〔書〕『新古今集の哀傷の部に見えたる後鳥羽上皇の御製「思ひ出づるをりたく柴の夕けぶりむせぶも嬉し忘れがたみに」に依りて名づく』新井白石が國文にて記せる自敍傳。三卷。

**をりたたみ-しき** 折疊式【名】使用せぬ時は、折疊み得る方式。

**をりーたたむ** 折疊む【動四他】折りて重ね疊む。たたむ。

**をりーたつ** 折立つ【動下二他】折りて立つ。五人女「忌日・忌日に、榊(ヒサキ)折立て」

**をりーたて** 折立【名】箱の四隅に、裏張を施したる織物などを折りて立てたるもの。「衣筥(ハコヒモ)の折立」榮花「經函は、……唐の紺地の錦の小紋なるを、折たてにせさせたまへり」

**をりーたむ** 折廻む【動四自】**をれまがる**(折曲る)〔一〕に同じ。「古語」萬葉「衣手を折りたむ里にある吾を知らずぞ人は待てど來(こ)ずける」

**をりつきーかっせん** 折附合戰【名】攻め寄する敵軍の、先陣は到著して、後陣の未だ來らざる内に、此方より急に攻めかかること。



**をりーづきん** 折頭巾【名】頂に多くの襞(ヒダ)を折りつけたる頭巾。

**をりーつまど** 折妻戸【名】折り疊み得るやうに造りたる妻戸。謠曲(熊坂)「例の長刀、引きぞばめ、折妻戸を小楯に取って」

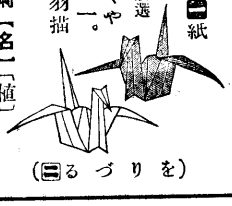
**をりーづめ** 折詰【名】食品を、折〔六〕に詰むること、又、その詰めたるもの。

**をりづめーべんたう** 折詰辨當【名】折詰にしたる辨當。をりべんたう。

**をりづめーもの** 折詰物【名】折詰にしたる食物。折の物。

**をりーづる** 折鶴【名】〔一〕紙にて、鶴の形を折り作りたるもの。俳諧新選(茶雷)「折鶴の羽も動くや今朝の秋」〔二〕紋所の一。

**をりづる**(折鶴)〔一〕を一羽描けるもの。



(〔二〕るづりを)

**をりづるーらん** 折鶴蘭【名】〔植〕百合科に屬する多年生常綠草木。多數の纖劍狀を有し、數箇の氣根を出す。葉は叢生し細長にして先端尖る。花は白色にて、春、葉間より抽出せる花莖上に開く。觀賞用として栽培せられ、我國、各地の山地に自生す。

**をりーて** 折手【名】〔一〕折取る人。俗謠「花は一枝折手は二人、私(シック)やどちらへ靡こやら」〔二〕折疊む人。一代女「扇屋のお内儀樣と呼ばれて、數多の折手まじりに、見世に出で」

**をりーでほん** 折手本【名】折本に仕立てたる手本。

**をりーど** 折戸【名】門・庭先などの、蝶番(ヒツヒ)の仕掛にて開閉する戸。片折戸・諸折戸の別あり。各條を見よ。

**をりーどころ** 居所【名】**ゐどころ**(居所)に同じ。新六「いたづらに鹽燒ごろも濡れてのみ哀なる蜑のをり所かな」

**をりーとる** 折取る【動四他】折りて取る。

**をりーにくし** 折憎し【句】**をり**(折)の條下

を見よ。

**をり-のこす** 折殘す【動四他】折り盡さずに、殘し置く。芭蕉「里の子よ梅折殘せ牛の鞭」

**をり-のし** 折熨斗【名】熨斗㊀の、略式にして、熨斗包の紙を、そのまま熨斗に代用するもの。即ち、小形の正方形なる紙を、その包紙に擬して折り、中央に熨斗鮑の小片を貼り附けたるもの。なほ、一層略式にして、熨斗鮑の小片を貼る代りに、その形を、黄色に刷り出したるものも行はる。又、更に簡略に、折熨斗の形を印刷して切抜きて用ふるを、切(サ)熨斗といふ。

**かきのし**(書熨斗)・**えのし**(繪熨斗)参照。(長熨斗(ナガ)に對して)

**をり-の-をぬ** 遠里小野【名】〔地〕**をりをの**(遠里小野)の古稱。萬葉「墨江(スミエ)の遠里小野の眞榛(ハリ)もち匂(ホ)しし衣(ソ)に」

**をり-は** 折羽【名】雙陸(ロクロク)の類なる遊戯。骰子(サイ)二つを、竹筒に入れ、雙方に、大よそ十二づつを並べて、骰子の目に出でたる數だけづつ、駒を取り、取りたる駒の多き方を勝とするもの。油囊「一二一二と文字ぞ見えける(さいふ句に)をりは打つ采(サイ)に將棊のさまをして」

**をり-ば** 居場【名】**をりばしよ**(居場所)に同じ。

**をり-ばこ** 折箱【名】薄き板又はボオル紙などを折曲げて、手輕に淺く小形に造りたる箱。をりふちだか。**をりびつ**(折櫃)参照。

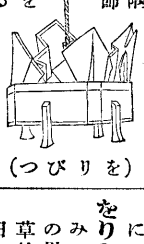
**をり-ばし** 折箸【名】古、木などを、細く削り、中央より折り屈め、その兩端にて、食物を挾むやうにせる箸なりといふ。〔古語〕續日本後紀「折箸の本末(モト)知らず亂絲(ミダレイト)の亂れてあれど」

**をり-ばしよ** 居場所【名】**ゐばしよ**(居場所)に同じ。

**をり-はふ** 折延ふ【動下二自】時を長くのばす。〔古語〕

折延へて【句】季節の末まで延ばして、引續く。古今「足引の山ほととぎす折はへて誰かまさると音(ネ)をのみぞ鳴く」同「明けたてば蟬のをりはへ鳴きくらしよるは螢の燃えこそ渡れ」

**をり-びつ** 折櫃【名】檜などの片木(ヘギ)を折曲げて造れる櫃。大・小不定、形は四角・六角など種種ありて、肴・餅・菓子の類を盛りて、蓋をなし、四隅に造花などを立てて飾としたり。後世の折箱は、その一變せるなり。をりうづ。枕「大きなる折櫃など持たせて、これに、白からん所、ひたもの入れて持(モ)て來(コ)」



(つびりを)

**をりびつ-もの** 折櫃物【名】折櫃に入れたる物。をりうづもの。紫式部日記「折櫃物・籠物(コモ)どもなど、殿の御方より、まうち君だち、取續きて參れる」

**をりびつ-ぶぎやう** 折奉行【名】**おをりぶぎやう**(御折奉行)を見よ。

**をり-ふし** 折節【名】㊀さし當りたる時。をりから。㊁季節。をり。

**をり-ふし** 折節【副】㊀「折しも」に同じ。㊁**をりをり**(折折)に同じ。紙留「折節は見せに來る事あり」

**をり-ふし-に** 折節に【副】前條㊁に同じ。源氏「をりふしにしいでん業の、あだごとにも、まめごとにも」

**をり-ふばこ** 折文匣【名】折疊み得るやうに造りたるふばこ。

**をり-べい** 折塀【名】折曲げて圍ひたる「塀。

**をり-べんたう** 折辨當【名】**をりづめべんたう**(折詰辨當)に同じ。

**をり-ぼね** 折骨【名】㊀馬の三頭(ツウ)の、隆起せる骨。㊁**をり**を見よ。**こしぼね**(腰骨)㊁に同じ。義經記「柄(カツ)を心元(モトナ)へさし込み、鞘は、をり骨の下へ突き入れて」

**をり-ぼん** 折本【名】續きたる紙を折揃へて重ね、綴ぢざる書物。佛經、習字の手本、この製なるもの多し。えふし。

**をり-まがり** 折曲【名】**をれまがり**(折曲)の轉訛。「(折曲る)の轉訛。

**をり-まがる** 折曲る【動四自】**をれまがる**

**をり-まぐ** 折曲ぐ【動下二他】折りて曲らしむ。撓めてゆがましむ。屈曲す。

**をり-まつ** 折松【名】『まつ(松)㊃を見よ』篝火などの燃料とする爲にへし折りたる松。源氏「折松、おどろおどろしからぬ程におきて、さしのぞきてともしたれば」

**をりみ-ぐさ** 折見草【名】『心は、折に臨みて變るものなりといふとぞ』人の心の異名なりといふ。〔古語〕莫傳抄「折見草枝もやあらん事にふれなぐさみ多き今日の夕ぐれ」

**をり-みまひ** 折見舞【名】寒さ・暑さにつけての見舞。時候見舞。

**をり-め** 折目【名】㊀折疊みたるさかひ目。たたみめ。新六「散るをわれ惜み持ちたる後までも折目もつけじ櫻薄樣」㊁**をりかがみ**(折屈)に同じ。㊂鷹の翼の一部。

**をりめ-だか** 折目高【名】㊀折目㊀の、目立つ程に高くあらはれてあること。膝栗毛「洗濯布子の糊こはきを、折目高に著なして」㊁行儀正しきこと。起居振舞の固苦しきこと。「折目高に振舞ふ」

**をり-やなぎ** 折柳【名】男の髪の結ひ方の一。元祿の頃、初、若衆(シユ)の間に行はれ、若衆以外にも流行するに至りしもの。若風俗「折柳とて、一流結び出し、髪先、二の曲(ヤ)の清らなれば、普くこの氏(ウジ)にたよりて」

**を-りゆう** 雄龍【名】をすの龍。(雌(メ)龍に對して)

**を-りゆう** 汚隆・汙隆【名】衰ふることと、さかんなることと。盛衰。隆替。

**をりを** 折尾【名】〔地〕筑前國遠賀(オンガ)郡にある村。洞海(クキノウミ)の南方、遠賀川の分流なる堀川(吉田川)に臨む。もと郡役所の所在地にして、鐵道鹿兒島本線と筑豐本線との交叉點に當り、乘客の昇降、貨物の集散、頗る盛んなり。

**をりをの** 遠里小野【名】〔地〕**をほざとの**(遠里小野)㊀の古稱。

**をり-をり** 折折【副】ときどき。をりふし。節節。枕「折折、内へ參り」

**をりをり-ぐさ** 折折草【名】〔書〕諸國を旅行せし時の見聞の事、又、人人の物語の中に興ある事を、四季に分ちて記せるもの。六卷。建部(タケ)綾足の著。名著文庫に收められる。

**をりをり-に** 折折に【副】**をりをり**(折折)に同じ。本居宣長「折折に遊ぶ暇はある人の暇なしとて書(ア)讀まぬかな」

**をる** 折る【名】『を(小)に語尾の添ひたるものなるべし』㊀中途より曲げ屈めて、重なるやうにす。撓めて重ぬ。たたむ。たたみ重ぬ。㊁曲げ撓め、取離して、二つにす。折取る。たをる。源氏「なよ竹のここちして、さすがに、折るべくもあらず」㊂疊み重ねて作る。**をりかた**(折形)㊃参照。「鶴を折る」㊄勢よくおさへて、勢を鈍らしむ。「我(ア)を折る」「鼻先を折る」

**をる** 折る【動四自】折れ返るやうに搖れ動く。**やへをる**(八重折る)参照。

**をる** 折る【動下二自】㊀中途より曲り撓みて、重なりたるやうになる。㊁曲り撓みて、切斷す。曲りて斷ゆ。源氏「大なる木の枝などの折るる音も、いとうたてあり」㊂側面の通路へと方向を轉じて進む。源氏「二條より、洞院の大路を折れたまふ程」㊃負けて從ふ。氣が挫く。屈す。源氏「とかく言ひそめつとならば、何かは折れて、ふとしも歸りたまふ」㊄收益の金額、元手の二倍となる。

**をる** 居る【動四自】**をり**(居り)の口語形。

**をる-やなぎ** 折柳【名】支那唐代の樂曲「折柳(セツリウ)」の直譯。謠曲(藤)「歌へや、歌へ、折る柳、落つる梅」

**をるふらむ** (獨 Wolfram)【名】〔化〕**たんぐすてん**に同じ。

**をれ** 折【名】折るること、又、折れたる物。「木の枝の折を拾ふ」

**をれ** 折【助數】舞の曲の數。源氏「のどかに、袖かへす所を、一をれ、けしきばかり舞ひたまへるに」

**をれ-かがみ** 折屈【名】㊀**をりかがみ**(折屈)に同じ。㊁身體の關節。

**をれ-かへる** 折返る【動四自】㊀幾度も

# 大倉書店

## 特約販賣所

東京市日本橋區　丸善株式會社
同　六合館
同　青野書店
同　明文館
同　大原文盛堂
同　榊東京堂
同　文林堂
同　東益文堂
同　神田區　丸善支店
同　麻布區六本木　三省堂
同　京橋區　誠至堂
同　北隆館
同　東海堂
同　春祥堂
同　中川文林堂
同　丸善支店
同　芝區　福島書店
同　有隣堂
同　吉見書屋
同　谷川書店
同　瀬島書店
同　星野書店
同　東枝書店
同　若林書店
同　京都書籍株式會社
同　寺町二條　松田書店
同　二條通河原町東　山本文華堂
同　寺町通二條　川勝鴻寶堂
同　寺町通夷川北入ル　大阪寶文館
京都府伏見桃山中學校前　盛文館
大阪市西區阿波堀通　大宅書店
同　西區靱北通　三善支店
同　東區橫堀四丁目　丸宮兵衛店
同　東區博勞町　井宗文館
和歌山市新通　寶文館支店
神戸市元町通　川瀨日進堂
神戸市元町通　竹內伊八郎
兵庫縣龍野町　尙文館
鳥取市片原町　今井兼文
米子市尾高町

松江市殿町
松江市京店町
岡山市西大寺町
岡山市下ノ町
廣島市鹽屋町
山口縣山口町
下關市東南部町
德島市西新町
高松市丸龜町
松山市湊町
高知市桝形
高知市種崎町
久留米市米屋町
福岡市東中洲町
同　上西町
同　中島町
佐賀市吳服町
長崎市築町
同　東濱町
大分市竹町
熊本市新二丁目
同　上通四丁目
宮崎市
鹿兒島市中町
同
那覇市松下町
同　東千石町
千葉市本町
千葉市市場
水戸市上市泉町
水戸市上市泉町
茨城縣土浦町
宇都宮市鐵砲町
足利市通町
前橋市曲輪町
甲府市柳町
甲府市柳町
長野市大門町

郁文堂支店
有田傳助
渡邊泰山堂
大森隆文堂
積善館
白銀日新堂支店
日新堂支店
黑崎精二店
宮井脇書店
向井書店
日士越新館
富竹金文堂
菊幸次郎店
田中文館書店
積善支店
丸善支店
金文堂信
大坪惇
森屋書店
好斐文書店
甲斐書店
長崎次郎
長崎支店
松井修進堂
吉田書店
谷村書店
久永書店
小澤博愛堂
多田屋支店
松田屋支店
川野又書店
平田分書店
寺山書店
內大盛堂
青木乎堂
煥正堂書店
柳月堂書店
朗月堂書店
西澤書店

松本市大名町
同　本町
松本市大名町
長岡市表四ノ丁
同　三ノ丁
新潟市古町通
同
富山市東四十物町
高岡市守山町
金澤市片町
福井市佐佳枝中町
同　佐佳枝上町
仙臺市郵便局前
同　大町
同　國分町
盛岡市肴町
盛岡市肴町
盛岡市吳服町
弘前市土手町
靑森市米町
山形市七日町
同
山形縣新庄町
秋田市大町
秋田市茶町菊の町
秋田縣大館町
同　增田町
札幌市南一條
同
函館市末廣町
小樽市花園町
樺太コルサコフ
笠山府大倉町
京城府本町
大連市大山通
哈爾賓市道裡買賣街
臺灣坊石街
布哇ホノルル
桑港

鶴林堂書店
水琴倫堂書店
明黑書店
覺目書店
張松書店
萬光社
北田書店
中學海書店
宇都宮書店
品川書店
中村六郎店
金港堂書店
鈴木英華堂店
丸善支店
佐々木書店
玉山東堂
佐藤庄兵衛店
今泉本店
今泉支店
五十嵐書店
遠藤商書店
大川書店
石見書店
成島書店
藤林本
東海貴
富新文
維文舍
魁堂店
魁店
齋藤支店
吉田書店
大阪屋號店
大阪屋號店
千葉書店
新高堂書店
村上書店
中央倫店

文學博士　芳賀矢一　著

# 新式辭典縮刷

▲第卅二版▼

『內容見本進呈』

三六判函入總革裝　壹千參百五拾頁　定價參圓八拾錢　送料一一十七錢

## 全國中等學校の指定辭書

現在發行されてゐる辭書は、國語を假名順に排列したもので、實用には尙遠い憾みがある。

「新式辭典」は深慮苦心を重ね、排列淸新、檢索至便なる漢字本位、國字本位に則り編纂したのである。例へば前者がブンケンの條下に「文獻、聞見」等と排列し、假名の順序はあれ漢字、國字には何等連絡の取れてないのを、本書はブン(文)の條下に「文運、文雅、文學」等、又タマ(玉)の條下に「玉垣、玉串、玉敷く、玉垂れ」等の頭字を同じうする類語、熟語、成句を同所に洩れなく收載し、國語辭典たるばかりでなく、漢和、作文の二辭典を兼ねさせて机上無二の寶典となした。

岩本梓石
宮澤朱明　共著

# 增訂新撰俳諧辭典

▲增訂新版▼

『內容見本進呈』

四六新形函入布裝　九百四拾頁　特價四圓八拾錢　送料二十七錢

## 我が俳諧道の最高照鏡

俳諧辭典は、包容する季題數は八千に上り、これに異名、異訓を加へれば將に一萬に垂とし、其資料語も一萬を超ゆる浩瀚にして、斯道に遊ぶ士が備ふべき最良文獻と信ずる。編纂方法は上み山崎宗鑑の犬筑波集より以降、現代に及ぶ間の著名な俳書中より、季は勿論、連句上の用語、諸種の配合資料としたる語を摭據し來り、其他古語、俗語、俚諺、風俗、地名、人名、伎藝等凡そ俳諧に關する事物は全部收錄し、之に圖版を挿み、別に「季よせ」「連句作法」古代より大正までの故俳人の小傳たる「俳諧人名譜」及「俳諧年表」を附錄とした。(裝幀　中村不折・川村淸雄・鵜月左靑)

登張信一郎著

# 新式獨和大辭典

▲第壹百版▼

『內容見本進呈』

三六判函入美裝
總革製 洋布製
貳千參百七拾頁

革裝 特價六圓參拾錢
布裝 特價五圓五拾錢
送料各二十七錢

## 第壹百版を記念とする特價提供

「頁數は多い、語數も豐富である、熟語も大抵は網羅してある。而しこれ丈では唯從來の辭書を分量上擴大したに過ぎぬのであるが、彼國最新の組立法に則りて、綴成の方法を一變し同意義の獨語を挿入して語義を明確にし、反義の獨語と同義の英語とを加入し、進んでは語源語根の解釋まで添へたのは凡てこの辭書が始めて成したる質の上の進歩改善であると信ずる。」 著者序文より

本書は初版發賣以來嘖々たる好評を博し「獨和は登張」の造語が江湖に於て成されたるは周知の事實で、今更冗々しき附辭は要しない。而して今回百版を記念に精版を新ため印刷の鮮明を期して特價を提供するに至つたのである。

登張信一郎著

# 新譯獨和辭典

▲第四拾版▼

『內容見本進呈』

ポケット形總革裝
壹千百貳拾八頁

特價貳圓八拾錢
送料十八錢

## 袖珍型獨和辭書中の白眉

我が獨逸語學界の最大權威が、その深遠廣汎なる學識と、永い教授上の體驗とを披瀝して編纂した本辭典は、袖珍判發兌後僅か一年余にして版數四十を算し、尙特價を提供して良書一層普及の陣を布いてより、高等學校・專門學校以上の學生諸君及每日獨逸語を使用なしつゝある士にして本書を手にせられざるはなきに至つた。之最近獨語の精華を汎ねく網羅せる優秀一千二百余頁の內容を藏し、堂々と一般大辭典の範圍を浸して類型辭書を壓し、而して携帶に便なるを最も雄辯に語る所であると信ずる。

かくして我等は「新譯獨和」に依て研學あれと薦めたい。

大倉書店編輯所編

# 新譯英和辭典

▲第十六版▼

『內容見本進呈』

新袖珍版總革裝
七百五拾頁
特價壹圓七拾錢
送料十四錢

## 特價提供の新裝優雅な總革版

ポケット形英和辭書の數は甚だ多いが、初學者には「よくわかる」相當進んだ研究者には「充分間に合ふ」樣に語の取捨選擇に鋭意を注ぎ、發音は國際音標文字（フォネティックサイン）に依り、ウエブスター式符號及極く初步者の爲に假名發音を併載したものは、「新譯英和辭典」を措いて他に見ない。

收錄語も近代語、實用語は言ふまでもなく、歐洲戰後に出來た新語、例へば Cheerio. Dummy-Cap. Mass-game の如き又無電、キネマ、飛行機等に關する語は殆んど蒐集した。

なほ各種の教科書と充分なる連絡をとつて、中等學校程度の學生諸君の爲に便したれば、學習上に一新紀元を畫さう。

鈴木於菟平
八杉貞利
松本圭亮共譯

# 新譯露和大辭典

▲第十四版▼

三六判函入洋布裝
壹千六百六拾六頁
定價七圓五拾錢
送料二十七錢

## 日本が持つ唯一の露和辭典

ロシヤを眞に理解することは日本焦眉の問題であつて、それは實に露語を研究、征服すべしの同意語ではあるまいか。

本書はアレキサンドロフ氏の原著を、鈴木、八杉の兩外語教授と松本氏が協力、六星霜に亘り、其間稿を改める事數度に及んで完譯を達したものである。

而して語數の豐富、譯語の妥當（術語は英、獨、羅語を併記し學究者に便す）挿入畫の夥多は勿論、印刷の鮮明、紙質及製本の精良等凡そ辭書が要す條項を具備した眞に本邦唯一の露語辭典にして、政治的、思想的、經濟的に彼國とは今や益々密接の度を加へるの時、學生並に研究者の羅針盤である。

野村泰亨著

# 增訂 新佛和辭典

▲第卅一版▼

三五判函入洋布裝
壹千參百拾貳頁
定價參圓五拾錢
送料十八錢

## 最も格好なる佛和辭典

日佛の國交は近年愈々親善を加へ來り、流麗優雅なる佛語は外交上には無論、社交界、藝術界、思想界等を通じ著しき勢を以て傳播されて居る。

「新佛和辭典」は本邦佛語學界の耆宿野村氏が中澤、阿部兩氏を補助とし、拮据十年を閲せる結晶に、其後愛讀せられたる名著、大作或は新聞、雜誌等より秀句、俗言、新語を蒐輯なし之に日常語、實用語を添へ增訂版として完全を期したものである。殊に特色とすべきは一貫して著者の系統正しき語の排列と譯の懇切を盡せる點にして、雖然として何等連絡のとれぬ他の書の企求し得られざる所である。

松井知時
上田駿一郎
共著

# 新和佛辭典

▲第三十二版▼

三五判函入洋布裝
壹千百四拾貳頁
定價參圓五拾錢
送料十八錢

## 佛蘭西語學界の代表和佛

佛語の研究者が仰望しつゝあるに、一つとして信ずるに足るべき和佛辭典の無きを遺憾として、松井、上田の兩文學士が一致して著はされしが本書である。

執筆に際しては新鋭なる學識と深長なる教授上の經驗に基き先人が陷りたる過失を改め、學生並に一般研究者の不便とせられたる點を補ふ樣、細心周到なる注意を拂つた。

而して本書の成るに際し、エミール・エツク先生は兩著者に手翰を以て「其語數の豐富なる、其佛譯の殆んど精確なる等は確かに本書の特色なれども、特に名詞に男女性を付したる一事は日本學生の謝すべき長所」との言を寄せられて居る。